

博士論文

中国語の可能補語と日本語の可能を表す
複合動詞との対照研究

鹿児島国際大学大学院
国際文化研究科国際文化専攻

丁 飒飒

2021年3月

目 录

序 章.....	1
1 研究の目的と意義.....	1
2 研究の範囲.....	2
3 研究方法.....	3
4 論文の構成.....	4
第1章 「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能について.....	6
1 はじめに.....	6
2 先行研究の問題点と本章の立場.....	6
3 前置動詞が意志動詞である場合.....	10
3.1 人の表現活動動詞の場合.....	10
3.2 「仕事をする」という意味を表す動詞の場合.....	12
3.3 対応の意味を表す動詞の場合.....	14
3.4 所有関係の変化をひきおこす動詞の場合.....	16
3.5 方向を表す動詞の場合.....	19
3.6 飲食を表す動詞の場合.....	25
3.7 「付き合う」という意味を表す動詞の場合.....	27
4 前置動詞が無意志動詞である場合.....	32
4.1 覚醒の意味を表す動詞の場合.....	32
4.2 方向を表す動詞の場合.....	33
5 本章のまとめ.....	38
注.....	40
第2章 前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」の構文的条件について.....	42
1 はじめに.....	42
2 先行研究の問題点と本章の立場.....	43
3 「V+“得”+“来”」の構文的条件.....	45

3.1	疑問文の場合.....	45
3.2	否定を表す副詞“没”“没有”“未必”と共起する場合	48
3.3	時間を表す副詞“才”と共起する場合	50
3.4	対義語と共起する場合	52
4	「V+“不”+“来”」の場合.....	54
4.1	副用語の“怎么都”と共起する場合	54
4.2	仮定条件文の従属節の述語として機能する場合	55
4.3	時間を表す副詞の“迟迟”と共起する場合	57
4.4	推量を表す副詞と共起する場合	58
5	本章のまとめ.....	60
	注	62
第3章	「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関わりについて.....	63
1	はじめに.....	63
2	先行研究の問題点と本章の立場.....	63
3	Vが「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”/“不”+“来”」構造の程度副詞の分布	65
3.1	「V+“得”+“来”」の場合.....	66
3.2	「V+“不”+“来”」の場合.....	77
3.3	「V+“得”+“来”」構造と「V+“不”+“来”」構造と共起可能な程度副詞の共通点と相違点.....	81
4	程度副詞と共起できる「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞の分布	86
4.1	前置動詞が“回”の「V+“不”+“来”」構造の場合	87
4.2	前置動詞が“干”の「V+“不”+“来”」構造の場合	88
4.3	前置動詞が“应付”の「V+“不”+“来”」構造の場合	89
5	本章のまとめ.....	90
	注	92
第4章	「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について.....	93
1	はじめに.....	93

2	先行研究の問題点と本章の立場.....	93
3	目的語がつく場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能.....	95
3.1	目的語が時間を表す場合.....	96
3.2	目的語に数量詞が含まれる場合.....	97
3.3	目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合.....	98
3.4	目的語が無標である場合.....	101
4	目的語が顕現しない場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能.....	105
4.1	前置動詞が意志動詞である場合.....	105
4.2	前置動詞が無意志動詞である場合.....	110
5	本章のまとめ.....	111
	注.....	113
第5章	「V+“得”/“不”+“了”」構造と疑問詞との関わりについて.....	114
1	はじめに.....	114
2	先行研究の問題点と本論文の立場.....	114
3	疑問詞と意味関係を結ぶ場合の「V+“得”+“了”」構造の構文的特徴.....	117
3.1	“谁”と意味関係を結ぶ場合.....	117
3.2	“哪”と意味関係を結ぶ場合.....	120
3.3	“怎么”と意味関係を結ぶ場合.....	121
3.4	“为什么”と意味関係を結ぶ場合.....	122
4	疑問詞と意味関係を結ぶ場合の「V+“不”+“了”」構造の構文的特徴.....	124
4.1	“谁”と意味関係を結ぶ場合.....	124
4.2	“怎么”と意味関係を結ぶ場合.....	129
4.3	“为什么”と意味関係を結ぶ場合.....	131
5	「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の構文的分布の共通点と相違点.....	132
5.1	“谁”と意味関係を結ぶ場合.....	132
5.2	“哪”と意味関係を結ぶ場合.....	134
5.3	“怎么”と意味関係を結ぶ場合.....	135
5.4	“为什么”と意味関係を結ぶ場合.....	135

6 本章のまとめ.....	136
注	138
第6章 「V+得る」構造の意味・機能について.....	139
1 はじめに.....	139
2 先行研究の問題点と本章の立場.....	139
3 「V+得る」が終止形として機能する場合の意味・機能.....	142
3.1 前置動詞が意志動詞である場合.....	142
3.2 前置動詞が無意志動詞である場合.....	147
4 「V+得る」が連体形として機能する場合の意味・機能.....	149
4.1 前置動詞が意志動詞である場合.....	149
4.2 前置動詞が無意志動詞である場合.....	156
5 本章のまとめ.....	158
注	160
第7章 前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の構文的条件について.....	161
1 はじめに.....	161
2 先行研究の問題点と本論文の立場.....	161
3 「V+得る」が終止形として機能する場合の構文的分布.....	164
3.1 文を言い切る場合.....	164
3.2 疑問文を構成する場合.....	170
3.3 「かどうか」や「か否か」とともに疑問節を構成する場合.....	173
4 「V+得る」が連体形として機能する場合の構文的分布.....	175
4.1 被修飾語が人物である場合.....	175
4.2 被修飾語が物である場合.....	176
4.3 「限り」と共起する場合.....	177
5 本章のまとめ.....	178
注	180
第8章 「V+得る」と「V+“得”/“不”+“来”」「V+“得”/“不”+“了”」との対応・	

非対応関係について.....	181
1 はじめに.....	181
2 先行研究の問題点と本論文の立場.....	181
3 「V+得る」が「V+“得”/“不”+“来”」とも「V+“得”/“不”+“了”」とも対応する場合.....	184
3.1 Vが意志動詞の「V+得る」が「だけが」「のみが」で主語を示す文に使われる場合.....	185
3.2 Vが意志動詞の「V+得る」が仮説条件文に使われる場合.....	186
3.3 Vが意志動詞の「V+得る」が「かどうか」「か否か」と疑問節を構成する場合.....	187
3.4 Vが意志動詞の「V+得ない」の場合.....	189
4 「V+得る」が「V+“得”/“不”+“了”」構造としか対応しない場合.....	190
4.1 Vが意志動詞の「V+得る」が疑問文に使われる場合.....	191
4.2 「行く」が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合.....	192
5 「V+得る」が「V+“得”/“不”+“来”」「V+“得”/“不”+“了”」と対応しない場合...193	
5.1 無意志動詞が「V+得る」構造の前置動詞に立つ場合.....	194
5.2 無意志動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合.....	195
6 本章のまとめ.....	197
注.....	199
終章 本論文の言語学的意義と言語教育学的意義.....	200
主要参考文献.....	202
初出一覧.....	207

序 章

1 研究の目的と意義

本論文は、現代中国語の可能補語¹⁾と現代日本語の可能を表す複合動詞²⁾の意味・機能に関する対照研究である。

中国語には、「可能補語」という動詞と補語の間に“得”や“不”を挿入することによって可能の意味を表す構造がある。例えば、“干得来”“干不来”という「V+“得”/“不”+“来”」構造や、“干得了”“干不了”という「V+“得”/“不”+“了”」構造などが挙げられる。一方、日本語の複合動詞において、後項動詞(後ろ側の動詞)の意味によって可能の意味を表すことができる複合動詞がある。例えば、「起こり得る」「起き得ない」という「V+得る」構造が挙げられる。

意味・機能の観点からみれば、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」と「V+“得”/“不”+“了”」のように構成される可能補語も、日本語の「V+得る」のような複合動詞も可能の意味を表すことができる。この点において、中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞には、共通性が見られる。

しかし、共通点ばかりではない。特異性もある。例えば、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造は、可能の意味以外に“回得来”のように移動の意味を表す場合がある。また、「V+“得”/“不”+“了”」構造も可能の意味を表すほかに、“吃得了”のように完了の意味が含まれるケースもある。中国語の可能補語の多岐にわたる解釈の可能性に対して、日本語の「V+得る」は可能の意味・機能しか持っていない。

以上のように、本論文は主に次の三つの問題について答えを導き出すことを目的としている。

- I. 中国語の可能補語はどのような枠組みを有しているか。「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造はどんな意味・用法を有しているのか。
- II. 日本語の可能を表す複合動詞はどのような枠組みを有しているか。「V+得る」構造はどんな意味・用法を有しているのか。
- III. 中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造及び「V+“得”/“不”+“了”」構造と日本語の可能を表す複合動詞の「V+得る」構造はどのように共通し、どのように食い違っているのか。

上記の三つの問題を解明することが本論文の目的である。第Ⅲの問題を解明するためには、まず中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造、「V+“得”/“不”+“了”」構造と日本語の「V+得る」構造とは、どんな意味・用法を有しているのかという、第Ⅰ、第Ⅱの問題を解明する必要がある。

本論文の意義は次のように位置づけられる。まず、中国語における「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・用法を解明することによって、中国語学に寄与することができる。それから、日本語における「V+得る」という可能を表す複合動詞の意味・用法を解明することによって、日本語学に寄与することができる。さらに、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造、「V+“得”/“不”+“了”」構造と日本語の「V+得る」構造とはどのように対応しているのかという問題を解明することによって、日中言語対照研究や中国語と日本語の習得研究に寄与することができる。

2 研究の範囲

中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造には、前置動詞 V の違いによって、意味が変わる傾向が見られる。例えば、“处得来”“干得来”のような構造については同様に解釈することが不可能である。しかし、どんな構文的条件を満たせば、可能の意味を表すことができるのかという問題について、「V+“得”/“不”+“来”」構造の表す意味・機能とその前置動詞との関係性について考察する必要がある。

また、中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造には、目的語の表す意味によって、意味が変化する現象が見られる。そのため、「V+“得”/“不”+“了”」構造がどんな目的語と意味関係を結ぶ場合に可能の意味を表すことができるのかについて考察する必要がある。

現代中国語において、「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造の以外にも、「V+“得”/“不”+“出”」構造、「V+“得”/“不”+“到”」構造、並びに「V+“得”/“不”+“成”」構造などのような可能補語が挙げられる。しかし、これらの可能補語の意味・用法については、教科書や先行研究での言及は十分であると認識しているため、本論文では取り上げないことにする。

一方、日本語の可能を表す複合動詞は、「V+得る」構造以外にも「V+かねる」構造が挙げられる³⁾。しかし、「V+かねる」構造は肯定形で否定的な意味を表し、否定形で「可能性がある」という肯定的な意味を表すという極めて特殊な構造であるため、中国語にはそれと対応することができる可能補語はないようである。そのため、日本語の「V+かねる」

構造も本論文の対象外とする。

さらに、中国語の可能補語はなぜ可能の意味を表すことができるのかといった問題については、歴史言語学の観点から考察する必要があるため、本論文では取り上げないことにする。

3 研究方法

本論文では、対照研究を行うことを究極の目的とする。この目的を達成するためには、まず個別言語にまつわる諸現象について記述し、それぞれの意味・用法を解明する必要がある。そこで、本論文では、まず中国語の可能補語の意味・用法と、日本語の可能を表す複合動詞の意味・用法について考察する。

具体的な検証方法として、中国語の可能補語については、“人民网”(www.people.com.cn)などの中国の新聞サイト、筆者が所持している資料(1976年から2020年の小説などの文学作品)などから抽出した計16,903例の「V+“得”/“不”+“来”」構造の用例と、計18,759例の「V+“得”/“不”+“了”」構造の用例を観察の対象とした。日本語の可能を表す複合動詞については、『朝日新聞デジタル』(www.asahi.com)などの新聞サイトと、筆者が所持している資料(1966年から2020年の小説などの文学作品)などから抽出した計13,660例の「V+得る」の用例を観察の対象とした。

用例の観察によって仮説を立てて、その妥当性について検証する。そうすることによって、中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞の意味・用法を浮き彫りにする。それから、対照研究の観点から、中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞の類似点や相違点を明らかにする。

また、個別研究としての第1章から第7章において、中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞の置き換えの可否による裏付けも試みる。中国語の用例の文法性判断は、筆者の内省と修士課程以上のネイティブの方16名に協力して頂いた。判断が曖昧な場合は12名以上の適格判断を基準とした。日本語の用例の文法性判断は、30代から60代の計12名以上のネイティブの方に協力して頂いた。判断が曖昧な場合は8名以上の適格判断をもって自然な表現と見なした。

なお、本論文におけるすべての用例の翻訳及び中国語に関する先行研究の日本語訳は筆者が責任を負うものである。

4 論文の構成

本論文は序章と終章を含めて10章からなっている。第1章から第5章までは、中国語の可能補語の意味・用法について述べ、第6章と第7章では、日本語の可能を表す複合動詞の意味・用法について述べる。第8章では、第1章から第7章で解明した可能補語や可能を表す複合動詞の意味・用法に基づき、対照研究を試みる。終章では本論文の意義について論じる。

第1章から第3章では、これまでの研究の問題点を指摘した上で、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・用法を明らかにする。具体的に言えば、第1章では、「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能を述べる。第2章では、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」の構文的条件を明らかにする。第3章では、「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関わりについて明らかにする。

第4章と第5章では、中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・用法について考察する。具体的に第4章では、「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能を検証し、第5章では、「V+“得”/“不”+“了”」構造と疑問詞との関わりについて浮き彫りにする。

第6章と第7章では、先行研究の問題点を指摘した上で、日本語の可能を表す複合動詞の「V+得る」の意味・用法について考察し、その使用条件を究明する。第6章では、「V+得る」構造の意味・機能を明らかにする。第7章では、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の構文的条件を浮き彫りにする。

第8章では、日本語の可能を表す複合動詞と中国語の可能補語の意味・用法について総合的に対照分析を行う。個別研究としての第1章から第7章までの分析の結果を踏まえ、第8章では、「V+得る」と「V+“得”/“不”+“来”」「V+“得”/“不”+“了”」との対応・非対応関係を明らかにする。

注

- 1)いわゆる「可能補語」とは、動詞と補語の間に“得”や“不”を挿入することによって、動作の結果を成立させることができるか否かを表すことができる。詳しくは、北京大学中文系現代漢語教研室(2004)の pp.300-303 を参照されたい。
- 2)いわゆる「可能を表す複合動詞」とは、複合動詞の後項動詞の意味分類において、後項動詞が可能を表すことができる複合動詞のことである。複合動詞の後項動詞の意味分類は姫野(2018)の pp.21-35 を参照されたい。

3) 「V+かねる」が可能の意味を表す複合動詞であるという判断は、城田(1998)を参考したものである。

第1章 「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能について

1 はじめに

この章では、中国語の「V+“得”+“来”」「V+“不”+“来”」という可能補語について考察し、その意味特徴を明らかにする。具体的に、前置動詞のVにはどんな動詞が生起するか、さらにどんな意味を表すかについて考察する。

中国語の「V+“得”+“来”」「V+“不”+“来”」は可能を表す表現として知られている。しかし、「V+“得”+“来”」「V+“不”+“来”」の前置動詞が具体的にどのように分布しているのか、またそれぞれの動詞が「V+“得”+“来”」「V+“不”+“来”」の前置動詞Vに生起する場合には具体的にどんな意味を表すのか、というような問題について、先行研究に示されたルールは十分とはいえない。本論文では、「V+“得”+“来”」「V+“不”+“来”」を「V+“得”/“不”+“来”」構造と表記し、「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞Vに焦点を当て、前置動詞Vが意志動詞か、それとも無意志動詞かに分けて、「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能を明らかにしたい。

2 先行研究の問題点と本章の立場

「V+“得”/“不”+“来”」構造に関する研究は刘月华(1998)、安本真弓(2009)などが挙げられる。刘月华(1998:pp58-59)では、「V+“得”/“不”+“来”」構造の語彙的制限について、「“醒”与“来”不构成可能式。”(“醒”と“来”は可能形式を構成することができない)と述べている。いわば、「醒」という動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造のVにはならないとされている。しかし、次の例(1)~(4)に示すように、「醒」が「V+“得”/“不”+“来”」構造に生起することもあると認めなければならない。

(1)这回你醒得来吗? (《人民网》2010年1月11日)(今回、君は目覚めることができるだろうか?)

(2)田小黎说:“睡着了还醒得来吗?”(柯云路《芙蓉国》2008)(「眠ったら、また目覚めることができるのか?」と田小黎は言った。)

(3)如果早晨实在醒不来,睡前可以让窗帘留出一条缝,让第二天的自然光来唤醒沉睡的身体。(《人民网》2016年9月22日)(もし朝どうしても起きられないなら、寝る前にカーテンをわずかに開けておいて、翌日の自然な光で眠っている体を起こさせ

るという手もある。)

- (4)我告诉自己一定要睁开眼睛，不然可能会再也醒不来。(《人民网》2014年10月28日)(「絶対に目を閉じるな」と自分に言い聞かせた。そうでないと、二度と目覚められないかもしれない。)

例(1)(2)における“醒得来”と、例(3)(4)における“醒不来”は、「V+“得”/“不”+“来”」構造として使われている。つまり、“醒”という動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造のVに立つことが可能であり、“醒”と“来”の間に“得”や“不”を挿入し、可能補語という可能形式を構成することができる認められる。このことから、刘月华(1998)でいう「“醒”と“来”は可能形式を構成することができない」という記述は事実には合わないといわざるをえない。“醒”という無意志動詞も「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞Vになりうるのである。

一方、安本真弓(2009:86)では、「V+“得”/“不”+D」のような趨向性可能補語¹⁾の構文的条件について、「V」項が非自主動詞²⁾である場合、「V+“得”/“不”+D」構造は成り立たないとされている。安本真弓(2009)において、本論文の研究対象の「V+“得”/“不”+“来”」構造も「V+“得”/“不”+D」構造として位置づけられている。しかし、用例を調べてみると、いわゆる非自主動詞も「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞Vとして機能することが可能だと思われる。例えば、次の(5)(6)における「V+“得”/“不”+“来”」構造の「V」項は安本真弓(2009)でいう非自主動詞として認めなければならない。

- (5)我告诉他们喀纳斯的第一场雪一般要到10月中旬才下得来。(康剑《聆听喀纳斯》2015)(私は彼らに「ハナスの初雪は普通10月中旬になってからはじめて降るものだ」と教えた。)

- (6)那天有下雨的迹象，天色晦暗，但雨却迟迟下不来。(苏童《平静如水》1988)(あの日雨が降りそうで、空も暗くなり、けれど雨はなかなか降ってこなかった。)

例(5)(6)の“下得来”“下不来”は「V+“得”/“不”+“来”」構造として機能し、「V」項は動詞の“下”である。この場合、動詞の“下”は、例(5)においては「雪」という無情物の動きを、例(6)においては「雨」という無情物の動きを表しているため、非自主動詞として認められる。つまり、安本真弓(2009)でいう「『V』項が非自主動詞の場合、『V+“得”/“不”+“来”』構造が成り立たない」という記述は適切ではないと認めなければならない。したがって、

「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能の全容を解明するために、例(5)(6)のような非自主動詞(いわゆる無意志動詞)が前置動詞の「V」項に立つ場合の意味・機能も視野に入れるべきである。

また、管見の限り、これまでの研究では、非自主動詞(いわゆる無意志動詞)が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞として機能することができないという見解が定着しており、「V」項が非自主動詞(いわゆる無意志動詞)の場合の意味・機能に関する考察は見られなかった。そこで、本論文では、例(1)～(6)のような非自主動詞(いわゆる無意志動詞)が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合の意味・機能も視野に入れておくべきだと思われる。

さらに、安本真弓(2009:44)では、「V+“得”/“不”+“来”」のような可能補語³⁾の基本的意味について、「ある動作を実現後、ある結果の出現が可能・不可能であることを表す」とされている。しかし、そのような解釈では、下記の例(7)における「V+“不”+“来”」構造をカバーすることができない。

(7)口味不合适，他们喜欢吃辣的，吃麻的，我吃不来，短时间还可以将就，长时间做不到。(《人民网》2014年2月7日)(口に合わないのだ。あの人たちは辛いものと、びりびり痺れるようなものが好きで、私には食べられない。短い間だったらまだ我慢できるが、長期間は無理だ。)

例(7)における“吃不来”は「V+“不”+“来”」であり、安本真弓(2009)に基づいて解釈すれば、「食べるという動作を実現した後、ある結果の出現が不可能であることを表す」ということになる。しかし、ここの“吃不来”は「私には食べられない」という話者の意志を表しているため、「食べる」という動作自体が行われることはないので、実現することもないと思われる。そうであれば、安本真弓(2009)の解釈にある「結果」は何を指しているかも不明であると言わざるをえない。以上の理由から、安本真弓(2009)における「V+“得”/“不”+“来”」に関する解釈は、例(7)の“吃不来”のような用例には適用しないと認めなければならない。

それから、「V+“得”/“不”+“来”」構造のVが意志動詞である場合、以下の例(8)(9)(10)のような用例も見られる。これらの用例も一概に安本真弓(2009)でいう「ある動作を実現後、ある結果の出現が可能・不可能であることを表す」という意味として解釈できるわけ

ではない。

(8)他就是这么个人，和谁都处得来。(《人民网》2000年10月10日)(彼はそういう人で、誰ともうまく付き合える。)

(9)我们3人，各自带一个通信员，组成3个爆破组，把敌人的火力点炸掉，增援部队才上得来。(《长江日报》2010年7月23日)(私たち三人はそれぞれ通信員一人を連れ、三つの爆破班を組む。敵の火力陣地を爆破すれば、増援部隊ははじめて登って来られる。)

(10)我做不来记者这行。(《人民网》2016年7月7日)(私はジャーナリストという職業ができない。)

例(8)(9)(10)の“处得来”“上得来”“做不来”はいずれも V が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造である。しかし、この場合の例(8)(9)(10)の「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味は、例(7)の“吃不来”と全く同じ意味を表しているとは考えにくい。このような例(7)の“吃不来”と例(8)(9)(10)の“处得来”“上得来”“做不来”の意味の違いについて、刘月华(1998)においても、安本真弓(2009)においても言及されていない。本章では、このような前置動詞の違いによって生じた「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味の違いも視野に入れながら、「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味の精緻化を試みたい。

以上の事実が示すように、これまでの研究では「V+“得”/“不”+“来”」構造の構文的特徴の全容が明らかにされていないといえる。そこで、本章では、主に先行研究において考察に及ばなかった三つの問題を中心に考察していく。一つ目は、「V」項が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造の「V」は具体的にどんな動詞に分布しているのかである。二つ目は、それぞれの動詞の違いは、「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能にどんな影響を与えているのかである。三つ目は、「V」項が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造はどんな意味・機能を表しているのかである。この三つの問題の解明に向けて、本章では、「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能について以下のように提案する。

(11)「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞が意志動詞の場合、「ある動作が実現できるかどうか」という意味を表す。前置動詞が無意志動詞の場合、「ある現象が現れ

る可能性があるかどうか」という意味を表す。

上記の(11)は本論文の仮説である。以下では、この仮説に基づいて本論文の提案の妥当性について証明する。3節では前置動詞が意志動詞の場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造の動詞の分布と、それぞれの場合の意味・機能を明らかにし、4節では前置動詞が無意志動詞の場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・用法を明らかにする。5節では、まとめを行う。

3 前置動詞が意志動詞である場合

本節では、前置動詞の意味特徴を視野に入れて、前置動詞が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能について考察する⁴⁾。また、(11)の仮説の妥当性を検証する。さらに、どんな動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞として生起しうるのかについて考察する。

コーパスを調べた結果、「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞は、人の表現活動動詞、「仕事をする」という意味を表す動詞、対応の意味を表す動詞、方向を表す動詞、所有関係の変化をひきおこす動詞、飲食を表す動詞、「付き合う」という意味を表す動詞⁵⁾の七つに分布している。以下では、それぞれの動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞として機能する場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味の違いを検討する。

3.1 人の表現活動動詞の場合

中国語には、「歌う」「描く」などのような人の表現活動動詞がある。この節では、その類の動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用可能かどうかについて考察し、「V+“得”/“不”+“来”」の意味・機能を明らかにする。この場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造において、Vは「表現する」という意味を表し、“得”や“不”は「できるかどうか」という意味を表し、“来”は「実現する」という意味を表しているため、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「表現することが実現できるかどうか」という意味を表すと思われる。

まず、“形容”という動詞は「表現する」という意味を表し、人の表現活動動詞として認められる。下記の例(12)～(15)に示すように、“形容”という動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に生起しうる。

- (12)他的个人魅力，不是我的秃笔可以形容得来的。(《人民网》2008年7月23日)(彼の魅力は、私の拙筆では、表現できるものではない。)
- (13)那种翹影之美，真不是我用语言能形容得来的。(《光明日报》2018年8月3日)(あの羽の影の美しさは、私の言葉で表現できるものではない。)
- (14)离开赛场时，马琳一次次抚摸着奖杯，看了又看，那份喜悦，是形容不来的。(《新民晚报》2019年4月27日)(試合会場を出る際、馬琳は何度もトロフィーを撫で、何度もトロフィーを見ていた。その嬉しさは、表現できるものではない。)
- (15)形容不来那是种什么心情，就是开心。(《人民网》2017年1月24日)(あの気持を表現できないが、とにかくうれしい。)

例(12)~(15)の“形容”は人の表現活動動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。例(12)(13)の「V+“得”+“来”」構造は「表現することが実現できる」という意味を表し、例(14)(15)の「V+“不”+“来”」構造は「表現することが実現できない」という意味を表している。“形容得来”と“形容不来”は、「表現できるかどうか」という意味を表す。また、これらの用例は、“形容”という人の表現活動動詞は「V+“得”/“不”+“来”」のV項になれることの裏付けとして捉えられる。

また、「歌う」ことも人の表現活動の一種であり、「歌う」ことを意味する中国語の“唱”という動詞も人の表現活動動詞であると思われる。用例を調べた結果、“唱”という人の表現活動動詞も「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項になりうる。その証左として次の例(16)~(19)が挙げられる。

- (16)有6首是我写的，其余的都是我们同学写的，每一首都唱得来。(《天府早报》2004年8月17日)(その中の6曲は私が書いたもので、ほかは全部クラスメイトが書いたものである。どの曲でも歌える。)
- (17)现在流行的《康定情歌》一共有四段歌词，与老《康定情歌》比较，多出了一段，康定的长辈们大都只知道或唱得来三段，而不知第四段所云。(《人民网》2007年1月31日)(現在流行の「康定ラブソング」という歌の歌詞は四つの段落からなっている。昔の「康定ラブソング」より、一つの段落が増えている。康定の年配者のほとんどは、三段落までは歌えるが、四つ目の段落は何のことかは分からないという。)

- (18)虽然他们听力正常，发音亦无异常，言语交流也完全没有问题，但就是对音乐一窍不通，听不懂也唱不来。(《人民网》2018年12月3日)(彼らの聴覚は正常であり、発音も異常はなく、言語によるコミュニケーションもさして問題はないが、ただ音楽に関しての知識が全くなく、聞いてもわからないし、歌うこともできない。)
- (19)我觉得很好听，但自己唱不来，可能因为我是上海人的缘故。(《人民网》2009年5月6日)(いい歌だと思うが、私には歌えない。というのは、私が上海出身だからかもしれない。)

例(16)~(19)の“唱”は人の表現活動動詞として機能し、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。例(16)(17)の「V+“得”+“来”」構造は「表現することが実現できる」という意味を表し、“唱得来”は「歌える」という意味を表している。例(18)(19)の「V+“不”+“来”」構造は「表現することが実現できない」という意味を表し、“唱不来”は「歌えない」や「歌うこともできない」という意味を表している。このことから、“唱”という人の表現活動動詞も「V+“得”/“不”+“来”」のV項に生起しうるといえる。

以上のことから、人の表現活動動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項になりうるといえる。「V+“得”/“不”+“来”」構造は「表現するという動作が実現できるかどうか」という意味を表す。

3.2 「仕事をする」という意味を表す動詞の場合

この部分では、「仕事をする」という意味を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用可能かどうかについて考察する。「仕事をする」という意味を表す動詞には、“做”“干”などが挙げられる。この場合、“得”や“不”は「できるかどうか」という意味を、“来”は「実現する」という意味を表す。「V+“得”/“不”+“来”」構造は「Vが実現できるかどうか」という意味を表す。

まず、“做”という動詞の目的語がある仕事を指す場合、「仕事をする」という意味を表す。用例を観察してみたところ、“做”という「仕事をする」という意味を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項として使用できると思われる。その裏付けとして、以下の用例が挙げられる。

- (20)手绘是一件创意工作，需要有童心才能做得来。(《人民网》2015年5月19日)(手

描きはクリエイティブな仕事で、童心を持っていないとできない。)

(21)在这里做事每天有 120 元，这个活很轻松，完全可以做得来。(《人民网》2018 年 4 月 18 日)(この仕事は 1 日 120 元を稼ぐことができ、これは簡単な仕事であり、余裕でできる。)

(22)我们的团队规模做不来这么高负荷的工作，也没有足够的预算这么做。(《人民网》2014 年 7 月 21 日)(私たちのチームの規模では、これほどのボリュームのある仕事ができないし、その仕事をできるほどの予算もない。)

(23)我做不来记者这行。(例(10)を再掲)(私はジャーナリストの仕事ができない。)

例(20)～(23)における“做”という「仕事をする」という意味を表す動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造の V 項に立っている。例(20)(21)の「V+“得”+“来”」構造は「この仕事ができる」という意味を表し、例(22)(23)の「V+“不”+“来”」構造は「この仕事ができない」という意味を表している。このことから、“做”という「仕事をする」という意味を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」の V 項になりうると認めなければならない。

「仕事をする」という意味を表す動詞は、“做”という動詞以外にも、“干”という動詞が挙げられる。“干”という動詞は、「乾く」という自動詞の意味を表すほかに、「仕事をす」という意味を表す他動詞として機能する場合もある。次の例(24)～(27)に示すように、“干”は「仕事をする」という意味を表す動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造の V 項に生起しうる。

(24)换别的工作，我不一定干得来，想着也差不多过年了，就干脆先回家了。(《人民网》2009 年 2 月 9 日)(別の仕事にしても、私ができるとは限らないし、もうそろそろ年末だし、いっそのこと、先に家に帰ろうと思った。)

(25)没事儿，这又不是什么重活儿，现在还干得来。(《人民网》2012 年 2 月 14 日)(大丈夫だ、これは重労働の仕事ではなく、今ならまだできる。)

(26)我虽然干不来重体力活，但是喂猪还能坚持干下来。(《人民网》2017 年 8 月 10 日)(私は重労働の仕事ができないが、豚に餌をあげるという仕事は、なんとかやっつけてける。)

(27)家里也给他找过别的工作，可他就是干不来。(《人民网》2001 年 10 月 11 日)(家族も彼に別の仕事を紹介してみたことはあるが、彼はどうしてもできないのであ

る。)

例(24)～(27)の“干”は「仕事をする」という意味を表し、「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞として機能している。例(24)～(27)の“干得来”という「V+“得”+“来”」構造は「この仕事ができるかどうか」という意味を表している。

このことから、“干”という「仕事をする」という意味を表す動詞は「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうる。

つまり、“做”“干”のような「仕事をする」という意味を表す動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項になりうる。この場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造は「仕事をするのが実現できるかどうか」という意味を表す。

3.3 対応の意味を表す動詞の場合

対応の意味を表す動詞は、“应付”“应对”などのような「他人の対応をする」という意味を表す動詞のことを指す。この節では、その対応の意味を表す動詞は、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用可能かどうかについて考察する。

典型的な対応の意味を表す動詞として、中国語の“应付”という動詞が挙げられる。コーパスを調べてみたところ、“应付”という動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞として機能することが可能であるという結果が得られた。この場合においても、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「Vが実現できるかどうか」という意味を表すと思われる。以下では、その裏付けと捉えられる用例を挙げておく。

(28)我应付得来的。(张小娴《幸福鱼面颊》2000)(私は対応できる。)

(29)接下来的两天肯定会安排她休息，或者让她做一些轻松的工作。她本人完全可以应付得来。(《人民网》2009年10月28日)(これから二日は必ず彼女が休めるように手配するか、または少し楽な仕事をさせる。彼女自身で完璧に対応できる。)

(30)这些任务爷爷奶奶辈的肯定应付不来，必须要父母亲自上阵！(《人民网》2016年10月28日)(これらのミッションは、おじいさんやおばあさんの世代にとっては、絶対に対応できない。父や母で自らやる必要がある。)

(31)毕竟在国外学了那么多年，干专业以外的工作怕自己应付不来。(《人民网》2012年9月11日)(せっかく海外で何年も勉強してきたのに、専門外の仕事では対応でき

ないと心配になる。)

例(28)～(31)における“应付”は対応の意味を表す動詞であり、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。例(28)(29)の「V+“得”+“来”」構造は「対応することが実現できる」という意味を表し、“应付得来”は「対応できる」という意味を表している。例(30)(31)の「V+“不”+“来”」構造は「対応することが実現できない」という意味を表し、“应付不来”は「対応できない」という意味を表している。このことから、“应付”という対応の意味を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうる。

また、中国語の“照顾”という動詞も対応の意味を表す動詞として認められる。というのは、“照顾”は「面倒を見る」という意味を表し、「面倒を見る」ことは、「人の対応をする」という意味としても解釈できるからである。次の例(32)～(35)に示すように、“照顾”という対応の意味を表す動詞も「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうる。

(32)我妈妈现在身体还不错，我可以照顾得来，而且自己照顾肯定比较尽心尽力，请人照顾的事，暂时不考虑。(《人民网》2009年6月23日)(私のお母さんは今体調が良い方であり、私は対応できる。それに自分で面倒を見る方が比較的尽力できるし、お手伝いさんを雇うという事は、まだ考えていない。)

(33)你一个人能照顾得来，用不上我吧。(《人民网》2013年11月13日)(あなた一人でも面倒を見れるから、私は必要ないだろう。)

(34)她可以把周行海治好，但周行海以后的生活她照顾不来。(《人民网》2005年11月28日)(彼女は周行海を治すことができる。しかし、今後の周行海の生活は、彼女では対応できない。)

(35)因为老人年纪大了，身体疾病多，子女工作忙，照顾不来。(《人民网》2016年8月8日)(あの老人は年もあって、患っている病気も多いし、息子や娘たちは皆仕事で忙しいから、対応できない。)

例(32)～(35)の“照顾”は対応の意味を表す動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に使われている。例(32)(33)の「V+“得”+“来”」構造は「対応することが実現できる」という意味を表し、“照顾得来”は「対応できる」という意味を表している。例(34)(35)の「V+“不”+“来”」構造は「対応することが実現できない」という意味を表し、“应付不来”は

「対応できない」という意味を表している。

このことから、「应付」という対応の意味を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に生じうると認められる。この場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「対応することが実現できるかどうか」という意味を表す。

上記の3.1から3.3に示すように、前置動詞が人の表現活動動詞、「仕事をする」という意味を表す動詞、または対応の意味を表す動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「Vが実現できるかどうか」という意味を表す。

3.4 所有関係の変化をひきおこす動詞の場合

所有関係の変化をひきおこす動詞とは、「買う」や「売る」などの行為によって、ものの所有者が変わるという現象を引き起こす動詞のことである。この節では、その所有関係の変化をひきおこす動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造に生じうるかどうかについて考察する。この場合、「得」や「不」は「できるかどうか」という意味を、「来」は「実現する」という意味を表すほかに「話者のものになる」という意味も含まれていると思われる。そのため、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「所有関係が話者のものになるという動作が実現できるかどうか」という意味を表すと思われる。

まず、「買う」を意味する中国語の“买”という所有関係の変化をひきおこす動詞について検証を行う。“买”とは「商品を買うこと」であり、商品の所有関係は売る人から買う人になる。用例を観察したところ、“买”は「V+“得”/“不”+“来”」構造に生じうる。その証拠として、次の例(36)~(39)を挙げておく。

(36)我们买得来技术和专利权，但永远买不来关键技术和研发能力。(《中国经济和信息化》2012年7月26日)(私たちは技術と使用権を買うことができるが、核心的な技術と開発能力はいつまでも買うことができない。)

(37)全球三大名车之一的沃尔沃，不是有钱就能买得来的，福特选择新的东家有他自身的价值取向和标准。(《人民网》2010年3月31日)(世界の三大自動車メーカーの一つであるボルボは、お金があれば買えるものではない、フォードが新しい株主を選ぶには、それなりの価値志向と基準がある。)

(38)她顿时急了：“这消息倒不意外，可树苗买不来，计划全得泡汤！”(《人民网》2020年3月22日)(彼女は急に焦ってきた。「この情報自体は意外ではないが、苗を買

えなくなると、計画は全部ダメになる」)

- (39)在节目中有一位企业老板的感慨让人记忆深刻，他说 30 年的打拼攒下来的钱买不来北京的一套房子。(《人民网》2012 年 9 月 21 日)(この番組に登場した、ある企業の社長さんの感慨がすごく印象的である。30 年間頑張ってコツコツ貯めた金でも、北京の部屋一つすら買うことができないと彼は言った。)

例(36)~(39)の所有関係の変化をひき起こす動詞の“买”は、「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に使われている。例(36)(37)の「V+“得”+“来”」構造は「買うことが実現できる」という意味を表し、“买得来”は「買える」や「買うことができる」の意味を表している。例(38)(39)の「V+“不”+“来”」構造は「買うことが実現できない」という意味を表し、“买不来”は「買えない」や「買うことができない」という意味を表している。このことから、“买”という従属変化を引き起こす動詞が「V+“得”/“不”+“来”」の V 項になりうると認めなければならない。

次に、中国語の“借”という所有関係の変化をひき起こす動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞として機能できるかどうかについて検討する。用例を調べたところ、“借”も「V+“得”/“不”+“来”」構造の V 項になることが可能である。下記の例(40)~(43)はその裏付けである。

- (40)在这个国家，借得来钱，就是好汉，老人家一辈子借过多少钱？你问问他去!(严歌苓《花儿与少年》2004)(この国では、お金を借りることができる人が「漢」だ。あのお爺さんが生涯でどれほどのお金を借りたと思う？自分で聞いてみてください!)

- (41)犹太人就是这样善于借别人之力为己用，凡是可借用的资源，名人、荣誉、市场、资本、技术、都会想法去借，而且往往还能够借得来。(高朋《别让不好意思害了你》2013)(ユダヤ人はこういうふうに関係の力を借りて自分自身のために使うことが得意で、リソース、有名人、名誉、市場、資本、技術など借りられるものなんでも借りようとする。それに、いつも借りることができる。)

- (42)工作找不到，钱也借不来，想回家也没有路费。(《人民网》2003 年 3 月 15 日)(仕事は見つからないし、お金も借りることができないし、実家に帰りたいたっていても、帰るための交通費もない。)

(43)可是，我能借的都借了，能想的办法都想了，实在借不来钱了。(《人民网》2006年12月5日)(しかし、借りられるところからは全部借りてきたし、考えられる方法も全部試した。どうしてもお金が借りられないのだ。)

例(40)～(43)における“借”は所有関係の変化をひきおこす動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に使われている。例(40)(41)の「V+“得”+“来”」構造は「借りることが実現できる」という意味を表し、“借得来”は「借りられる」や「借りることができる」という意味を表している。例(42)(43)の「V+“不”+“来”」構造は「借りることが実現できない」という意味を表し、“借不来”は「借りられない」や「借りることもできない」という意味を表している。つまり、例(40)～(43)は、“借”という所有関係の変化をひきおこす動詞が「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうる。

また、中国語の“借”は「借りる」ことを意味する場合もあれば、「貸す」ことを意味する場合もある。しかし、「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞として機能する場合、「貸す」という意味を表すことができず、「借りる」という意味しか表すことができない。考えられる理由として、「V+“得”/“不”+“来”」構造の“来”と関係していると推測できる。“来”には、「話者のもとへの移動」という意味が含まれている。また、「貸す」という動作には「ものの所有権は話者の元から離れる」という意味が含まれているため、中国語の“借”が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、「借りる」という「所有権が一時的に話者のもとへの移動」という意味しか表せないのである。一方、“借得出”“借不出”というような中国語の“借”が「V+“得”/“不”+“出”」構造の前置動詞に立つ場合、“借”は「貸す」という意味しか表せないのもそのためだと考えられる。

さらに深掘りすると、所有関係の変化をひきおこす動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞として機能する場合、“来”が「実現する」という意味を表す理由については、“来”の転義に求められる。“来”の基本義は「話者のもとへの移動」である。“买得来”は「買うことが実現できる」いわば「商品の所有権が話者のもとへの移動は可能できる」という意味として解釈できる。しかし、前置動詞の“买”(買う)という言葉には、すでに「買い主へ移動」という意味も含まれているため、“来”の「(商品の所有権が)話者のもとへの移動」という意味機能は“买”によって担われることになり、「V+“得”/“不”+“来”」構造の“来”は「実現する」という意味になったと考えられる。いわば、3.1～3.3において、「V+“得”/“不”+“来”」構造が「Vが実現できるかどうか」という意味を表しているのは、“来”が「実現

する」という意味を表す役割を果たしているからだと思われる。

つまり、「买”“借”のような従属変化を引き起こす動詞は「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうる。この場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造は「Vが実現できるかどうか」という意味を表す。

3.5 方向を表す動詞の場合

中国語の方向を表す動詞には、「上”“下”“进”“出”“来”“去”“回”“过”などが挙げられる。これらの動詞は、文脈によって意志動詞としての役割を果たす場合もあれば、無意志動詞としての役割を果たす場合もある。この違いは意志性の有無と、移動の主体によって決められる。いわば主体が有情物であり、意志的な動作を行う場合、意志動詞としての役割を果たすのに対し、主体が無情物であり、意志が含まれていない自然現象である場合、無意志動詞としての役割を果たす⁹⁾。

この節では、前置動詞が意志動詞としての方向を表す動詞である場合の、「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能について考察する。この場合、Vは「移動の方向」を表し、「得”や“不”は「できるかどうか」という意味を、「来”は上記の3.1から3.4のように「実現」の意味だけでなく、「話者のいる場所への移動の実現」という意味もあると思われる。つまり、この場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造の“来”には、「話者のいる場所へ移動」という意味が含まれている。ゆえに、前置動詞が方向を表す動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できるかどうか」という意味を表すと考えられる。また、すべての方向を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造に生起しうるわけではないようである。そのため、「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項として使用可能な方向を表す動詞を探る必要がある。

まず、以下の例(44)~(47)に示すように、「上」という方向を表す動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に生起しうる。

(44)我们3人，各自带一个通信员，组成3个爆破组，把敌人的火力点炸掉，增援部队才上得来。(例(9)を再掲)(私たち三人はそれぞれ通信員一人を連れ、三つの爆破班を組む。敵の火力陣地を爆破すれば、増援部隊ははじめて登って来られる。)

(45)路上的雪清扫了，你们应该还是上得来。(《人民网》2019年2月26日)(路上の雪を掃除しておければ、君たちは上がって来られるだろう。)

(46)有的队员因严重的高原反应被送下山去就再也上不来，但甘晓玲却咬牙坚持了下来。

(《人民网》2014年12月26日)(深刻な高山病のため、ふもとまで搬送されて、それ以降はもう登って来られない隊員もいる。それに対して、甘曉玲は齒を食いしばって、なんとか耐えてきた。)

(47)有个患者在楼下的运送车里上不来，董芳就推了一辆轮椅下了电梯。(《人民网》2020

年3月2日)(下の搬送用の車にここまで上がって来られない患者がいるのを知り、董芳はすぐ一台の車椅子を押してエレベーターに乗り、下に行った。)

例(44)~(47)の“上”の動作の主体の“増援部队”“你们”“队员”“患者”は有情物であることから、“上”は意志動詞として機能し、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。例(44)(45)の「V+“得”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できる」という意味を表し、“上得来”は「登って来られる」や「上がってこられる」という意味を表している。例(46)(47)の「V+“不”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できない」という意味を表し、“上不来”は「登って来られない」や「上がってこられない」という意味を表している。このことから、“上”という方向を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうるといえる。

次に、“下”という方向を表す動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞として機能することが可能かどうかについて考察する。下記の例(48)~(51)に示すように、“下”という方向を表す動詞は意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に立つことが可能である。

(48)有经验的猎人上山，天黑都不一定下得来。(《钱江晚报》2011年9月20日)(たと

えベテランのハンターでも山に登ったら、暗くなるまでに降りてこられるとは限らない。)

(49)就是上去了，走到尽头也不一定能下得来，就只能这样推着轮椅逆行走在自行车道

了。(《人民网》2018年9月4日)(たとえ上に行き、突き当たりまで行っても、降りてこられる保証はない。だからこのまま車椅子を押し、自転車専用道路で逆行するしかなかった。)

(50)一位50多岁的男子，被困在6楼的房顶上下不来。(《人民网》2018年6月20日)(あ

る50代の男性が6階の屋根に閉じ込められ、降りてこられない。)

(51)可能是老太受到了惊吓，也可能是那名男子力气不够了，一直没有办法把老太拉回屋里，眼看着老太坐在二楼窗上下不来，大家都跟着着急。(《千山晚报》2017年2月17日)(お婆さんがびっくりしてしまったのか、それともあの男が力尽きてしまったのか、いつまでたってもお婆さんを部屋の中に引き込むことができなかった。お婆さんが二階の面格子に座ったまま、降りてこられないのを見て、皆も焦り出した。)

例(48)~(51)の“下”という動作の主体の“猎人”“我们”“男子”“老太”は有情物であることから、“下”は意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造に用いられている。例(48)(49)の「V+“得”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できる」という意味を表し、“下得来”は「降りてこられる」という意味を表している。例(50)(51)の「V+“不”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できない」という意味を表し、“下不来”は「降りてこられない」という意味を表している。このことから、“下”という方向を表す動詞も意志動詞として、「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうると認めなければならない。

さらに、コーパスを調べてみたところ、「中に入る」を意味する方向を表す動詞の“进”も意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用することが可能である。その裏付けとして、次の例(52)~(55)が挙げられる。

(52)万一失火了，消防车进得来吗？(《人民网》2013年7月22日)(もし火事にでもなったら、消防車は入って来られるのか?)

(53)我赶忙下意识地把手电一转，一束光柱打到了卧室门上去，但马上我就反应过来，声音不可能从卧室门外传进来，因为我已经把防盗门锁好了，不可能有人进得来。(壹号怪谈社《医院怪谈》2006)(私は無意識のうちにすぐ懐中電灯をつけ、その一筋の光を寢室のドアに当てた。しかし私はすぐ気づいた。物音は寢室のドアの外から伝わってくるわけではない。なぜなら私はすでに防犯用のドアのロックをかけていた。誰かが入ってこられるわけがない。)

(54)有一次，我大孙子生病，救护车到了离村口5公里的山沟就进不来了，最后只能靠人背出去。(《人民网》2020年2月18日)(一度だけ、私の一番大きい孫が病気になって、救急車は村の入り口から5キロ離れていた山奥にまで着いた、それ以上は入ってこられない。最後は孫をおんぶして村から出るしかない。)

(55)士兵想推门进来，门是反锁着的，他进不来。(邓一光《我是太阳》1997)(兵士はドアから入ろうとした。しかし、ドアは反対側からロックされているため、彼は入って来られないのだ。)

例(52)～(55)の「V+“得”/“不”+“来”」構造に方向を表す動詞の“进”が意志動詞として使われている。この場合、例(52)(53)の「V+“得”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できる」という意味を表し、“进得来”は「入ってこられる」という意味を表している。例(54)(55)の「V+“不”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できない」という意味を表し、“进不来”は「入ってこられない」という意味を表している。つまり、“进”という方向を表す動詞も「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうる。

それから、“进”という方向を表す動詞の視点的対義語として、“出”という動詞も方向を表す動詞として認められる。下記の例(56)～(59)に示すように、“出”も意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうる。

(56)半间教室是原来的办公室，只有十来平方米，课桌椅摆得太密集，中间没有过道，下课时，学生踩在课桌上才出得来。(《都市快报》2011年4月17日)(教室の半分はもともと事務室であった。十何平米しかない。教室の机などは密に並べられていて、人が通れるスペースもない。授業が終わったら、学生は机に登ってやっと出てこられる。)

(57)那些地方就算是我们自己去，都要走上1、2天才可能出得来。(《人民网》2014年12月23日)(そういうところは、たとえ私たちが行くとしても、一日や二日もかかってやっと出てこられる。)

(58)有人驾驶轿车撞上了一辆大货车，被卡在车里出不了。(《人民网》2019年12月5日)(乗用車を運転し、一台の大型トラックにぶつかった人がいて、その人が車に閉じ込められて、出てこられない。)

(59)你发疯了吗？想陷在里面出不来吗？(李国文《冬天里的春天》1981)(正気か？中に閉じこめられ、出てこられなくなったらどうする？)

例(56)～(59)の“出”という方向を表す動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。その動作の主体は「学生」「私たち」「人」「あなた」という有情物であるため、“出”は意

意志動詞としての役割を果たしていると思われる。例(56)(57)の「V+“得”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できる」という意味を表し、“出得来”は「出てこられる」という意味を表し、例(58)(59)の「V+“不”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できない」という意味を表し、“出得来”は「出てこられない」という意味を表している。このことから、“出”という方向を表す動詞も「V+“得”+“不”+“来”」のV項になりうるといえる。

さらに、用例を調べてみたところ、「戻る」ことを意味する中国語の“回”という方向を表す動詞も意志動詞として「V+“得”+“不”+“来”」のV項に生じうる。次の例(60)～(63)はその裏付けである。

(60)他问: 婚离得了吗? 林珠回得来吗? (池莉《来来往往》1998)(「離婚できるか? 林珠は戻ってこられるのか?」と彼は思った。)

(61)就又问上善: “晚上回得来?” (贾平凹《秦腔》2005)(またすぐ上善に聞いた「夜には戻ってこられるのか?」)

(62)在村里上 120 急救车时, 我回头看了看生活了 40 年的家, 觉得再也回不来了。(《人民网》2020 年 2 月 13 日)(村で救急車に乗った時、私は振り返って、40 年間過ごしてきた家を見た。ふっともう戻ってこられないと思った。)

(63)有时候家长回不来, 孩子就吃住在我这。(《人民网》2017 年 5 月 5 日)(時々親が戻ってこられない。その時、子供は私のところに預ける。)

例(60)～(63)の「V+“得”+“不”+“来”」構造に、“回”は方向を表す動詞が意志動詞としてV項に立っている。例(60)(61)の「V+“得”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できる」という意味を表し、“回得来”は「戻ってこられる」という意味を表している。例(62)(63)の「V+“不”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できない」という意味を表し、“回不来”は「戻ってこられない」という意味を表している。つまり、方向を表す動詞の“回”も「V+“得”+“不”+“来”」のV項になりうる。

それから、「渡る」という意味を表す“过”という方向を表す動詞も意志動詞として「V+“得”+“不”+“来”」構造に使用することが可能であるかどうかについて検証する。以下の用例に示すように、“过”も「V+“得”+“不”+“来”」構造のV項になりうる。

- (64)这里是名副其实的死亡地带，你们过得来么，你们过得来么？(巍巍《东方》1979)(ここは名実通りのデスゾーンだ。君たちはここまで渡ってこられるのか？君たちはここまで渡ってこられるのか？)
- (65)你继续往前开，我帮你看着路，应该能过得来。(《人民网》2011年10月2日)(君はそのまま前に進むように運転し、私が案内してあげるから、多分渡ってこられる。)
- (66)疫情不好转，外省工人就过不来，招工难呀。(《人民网》2020年3月26日)(コロナの状況がよくなる限り、出稼ぎ労働者は県境を渡ってこられないし、求人応募が難しい。)
- (67)因为吊桥断了，忠叔也过不来了，班淑决定自己去找父亲，与忠叔就此别过。(《人民网》2016年2月25日)(つり橋が崩落してしまったため、忠おじさんも渡ってこられない。班淑は自分で父親を探しに行くこと決めた。忠おじさんに別れを告げた。)

例(64)～(67)の“过”は方向を表す動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。“过”の主体は“你们”“你”“工人”“忠叔”という人であるため、意志動詞として認められる。例(64)(65)の「V+“得”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できる」という意味を表し、“过得来”は「渡ってこられる」という意味を表し、例(66)(67)の「V+“不”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できない」という意味を表し、“过不来”は「渡ってこられない」という意味を表している。このことから、“过”という方向を表す動詞も「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうるといえる。

以上のように、方向を表す動詞において、“上”“下”“进”“出”“回”“过”は「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうると認められる。裏を返せば、方向を表す動詞の“来”“去”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のVにはならないということになる。実際の用例を調べたところ、“来”“去”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のVになる用例は見られなかった。その原因について以下のように考えられる。

まず、「来る」を意味する“来”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に生じえないのは、「来る」を意味する“来”は「V+“得”/“不”+“来”」における“来”と意味上重なる部分があるからである。いわば、“来得来”や“来不来”は「来てこられる」「来てこられない」というような二重表現になりかねないため、“来”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項には生

起しえないと考えられる。

また、「行く」を意味する“去”も「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に生起しえない。なぜならば、“去”の移動の方向は、話者から離れる方向であるため、「話者のいる場所への移動が実現できる」を意味する「V+“得”/“不”+“来”」構造には向かないと推測できる。そのため、“去”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に生起しえないのである。

この節をまとめると、方向を表す動詞の“上”“下”“进”“出”“回”“过”は「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうる。それに対して、方向を表す動詞の“来”“去”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項にはならない。この場合、「V+“得”+“来”」は「話者のいる場所への移動が実現できる」という意味を表し、「V+“不”+“来”」は「話者のいる場所への移動が実現できない」という意味を表す。また、方向を表す動詞は無意志動詞としての役割を果たす場合もあり、改めて4.2で述べることにする。

3.6 飲食を表す動詞の場合

以下では、飲食を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造に用いられるかどうかについて考察し、この場合の「V+“得”/“不”+“来”」の意味・機能を明らかにする。

中国語の飲食を表す動詞に、“吃”“喝”などが挙げられる。この場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造において、Vは「食べる」という意味を表し、“得”や“不”は「できるかどうか」という意味を表し、“来”は「実現する」という意味を表す。そのため、「V+“得”/“不”+“来”」構造は、「食べることが実現できるかどうか」という意味を表しているように思われる。しかし、“吃”が「V+“得”/“不”+“来”」構造に用いられる用例からみれば、「その食べ物に慣れているかどうか」という意味も含まれていると思われる。下記の用例はその裏付けである。

(68)有一样东西可能你不一定吃得来，这东西就是——鱼腥草，四川叫“折耳根”。(《人民网》2016年7月14日)(多分あれだったら、君も食べられないかもしれない。あれというのは、ドクダミのことで、四川省では“折耳根”と呼ぶのだ。)

(69)他吃饭总的口味是很清淡的，一般淮扬菜他都能吃得来。(《人民网》2019年6月11日)(彼の食事の好みは淡泊で、一般的な「淮揚料理」であれば、なんでも食べられる。)

(70)我有一个博士生是越南学生，我问他为什么总是不跟我们一起去吃饭，他说老师那

个饭我吃不来，那个味道怪怪的，他一定要回去做自己的越南饭。(《人民网》2018年10月10日)(私の指導する博士後期課程の学生の一人がベトナム人で、私は彼に「なぜ私たちと一緒に食事しに行かないか」と聞いた。彼は「先生、私にはああいう料理が食べられない。とにかく味が変だと感じる。」と話した。彼は食事の際、いつも自分の部屋に戻って、自分でベトナム料理を作って食べる。)

(71)口味不合适，他们喜欢吃辣的，吃麻的，我吃不来，短时间还可以将就，长时间做不到。(例(7)を再掲)(口に合わないのだ。あの人たちは辛いものと、びりびり痺れるようなものが好きで、自分には食べられない。短い間ならまだ我慢できるが、長期間は無理だ。)

例(68)~(71)の“吃”は「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。例(68)(69)の「V+“得”+“来”」構造は「(食べ物に慣れて)食べることが実現できる」という意味を表し、“吃得来”は「食べられる」という意味を表している。例(70)(71)の「V+“不”+“来”」構造は「(食べ物に慣れないから)食べることが実現できない」という意味を表し、“吃不来”は「食べられない」や「食べることができない」という意味を表している。このことから、“吃”という飲食を表す動詞は「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうるのである。

この場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「食べられるかどうか」という意味だけでなく、その原因も「V+“得”/“不”+“来”」構造に含まれている。いわば、「食べ物に慣れているかどうか」という「食べられるかどうか」の原因も「V+“得”/“不”+“来”」構造によって表されていると思われる。この点において、他の意志動詞の場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味と違うものと見なすべきである。

また、“吃”以外にも、「飲む」を意味する“喝”も飲食を表す動詞として挙げられる。飲食を表す動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項になりうるということを証明するためには、“喝”という動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項として成り立つかどうかについても確認する必要がある。

(72)可能北京人比较喜欢，但外地人未必喝得来。(《人民网》2016年12月26日)(北京の人は好きかもしれないが、地方の人でも飲めるとは限らない。)

(73)王好说,我不去,我又喝不来酒。(三石《捕鱼者说》2013)(「私は行かないよ。酒も飲めないし」と王好は言った。)

(74)有人喝不来“利普顿”，说是味道很怪。(《新华网》2017年6月10日)(「リプトン」を飲めない人もいて、味が変だという意見である。)

例(72)(73)(74)の“喝”は「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。この場合においても、「食べ物に慣れているかどうか」という「食べられるかどうか」の原因も「V+“不”+“来”」構造に含まれているのである。そのため、例(72)の「V+“得”+“来”」構造は「(食べ物に慣れて)食べることが実現できる」という意味を表し、“喝得来”は「飲める」という意味を表し、例(73)(74)の「V+“不”+“来”」構造は「(食べ物に慣れないから)飲むことが実現できない」という意味を表し、“喝不来”は「飲めない」や「飲むことができない」という意味を表している。つまり、飲食を表す動詞の“喝”も「V+“得”/“不”+“来”」のV項に生起しうる。

以上のことから、飲食を表す動詞は「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうるといえる。「V+“得”/“不”+“来”」構造は、「食べることが実現できるかどうか」という意味を表し、「食べ物に慣れているかどうか」という原因も「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味に含まれる。

3.7 「付き合う」という意味を表す動詞の場合

「付き合う」という意味を表す動詞とは、相手との関係を維持するために行う動作のことを指す動詞である。具体的に“相处”“处”“谈”“说”⁷⁾などが挙げられる。この場合、Vは「付き合う」という意味を表し、“得”や“不”は「できるかどうか」という意味を表し、“来”は「実現する」という意味を表しているが、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「付き合うことが実現できるかどうか」という意味だけではなく、その理由として「相性がいいかどうか」という意味も含まれると思われる。

中国語の典型的な「付き合う」という意味を表す動詞として、“相处”という動詞が挙げられる。コーパスを調べたところ、“相处”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に生起することが可能である。

(75)他是那么随和，好像与任何人都相处得来。(《人民网》2004年8月25日)(あの人は人当たりがいいから、誰とでもうまく付き合える。)

(76)她现在的标准是对方一定要有退休金，能养活自己，另外就是能相处得来。(《人民

網》2010年10月18日)(彼女の今の基準は、結婚相手が福祉年金を持っていることである。そうすると、自分を養うことができる。それ以外は、うまく付き合えることである。)

(77)現在夫妻俩跟儿子住，但他还专门在单位宿舍留了套房，担心儿子结婚了，两代人相处不来。(《人民网》2013年1月22日)(あの夫婦は今息子と一緒に住んでいるが、あのご主人は勤め先の寮にも、自分たちの住める家を用意してある。なぜなら息子が結婚したら、息子夫婦と気が合わないのではないかと心配したからである。)

(78)我以前是分校的同学，来到新校区之后，不适应新的环境，与同学们相处不来。(《人民网》2019年6月5日)(私はもともと分校の学生であり、新しいキャンパスに来た後、新しい環境になじむことができず、クラスメイトともうまく付き合うことができない。)

例(75)~(78)における“相处”という動詞は「付き合う」という意味を表し、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。例(75)(76)の場合、「V+“得”+“来”」構造は「(相性がいいから)付き合うことが実現できる」という意味を表し、“相处得来”は「話が合う」や「気が合う」という意味を表している。例(77)(78)の場合、「V+“不”+“来”」構造は「(相性がよくないから)付き合うことが実現できない」という意味を表し、“相处不来”は「話が合わない」や「うまく付き合えない」という意味を表している。つまり、“相处”という「付き合う」という意味を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうる。また、この場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「付き合うことが実現できるかどうか」という意味だけでなく、その原因も「V+“得”/“不”+“来”」構造に含まれている。いわば、「相性が良いかどうか」という原因が「V+“得”/“不”+“来”」構造によって表されていると思われる。この点において、ほかの前置動詞が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味と違うものと見なすべきだと思われる。

次に、“相处”と似通った意味を表す“处”という「付き合う」という意味を表す動詞が、「V+“得”/“不”+“来”」の前置動詞に生起する場合の用例を挙げておく。この場合においても、「相性が良いかどうか」という原因も「V+“得”/“不”+“来”」構造に含まれていると思われる。

(79)他就是这么个人,和谁都处得来。(例(8)を再掲)(彼はそういう人で、誰ともうまく付き合える。)

(80)她说:“学校的学习氛围很好,图书馆都排队,同学们都很热情,和同学也挺处得来。”(《人民网》2018年9月5日)(「この学校は、勉強の環境がとてもよくて、図書館も列にならばないと入れないくらいである。クラスメイトもみな親切で、うまく付き合える」と彼女は言った。)

(81)我奶奶太以自我为中心了,不管跟谁都处不来。(《人民网》2012年8月25日)(私のばあさんはすごく自己中心的な人で、誰ともうまく付き合えない。)

(82)我在那儿没有自己的朋友,他的朋友我又处不来。(《人民网》2002年11月25日)(そこには私の友達がいなし、彼の友だちとはうまく付き合えない。)

例(79)~(82)の“处”は「付き合う」という意味を表す動詞であり、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。例(79)(80)の場合、「V+“得”+“来”」構造は「(相性がいいから)付き合うことが実現できる」という意味を表し、“处得来”は「話が合う」や「気が合う」という意味を表している。例(81)(82)の「V+“不”+“来”」構造は「(相性がよくないから)付き合うことが実現できない」という意味を表し、“处不来”は「話が合わない」や「うまく付き合えない」という意味を表している。このことから、“处”という「付き合う」という意味を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項において機能することができるといえる。この場合においても、「相性が良いかどうか」という原因も「V+“得”/“不”+“来”」構造によって表されているのである。

以上のように、典型的な「付き合う」という意味を表す動詞の“相处”“处”は「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうるということを証明してきた。しかし、“相处”“处”という典型的な「付き合う」という意味を表す動詞以外にも、非典型的な「付き合う」という意味を表す動詞もある。

「付き合う」という意味を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうることを証明するために、非典型的な「付き合う」という意味を表す動詞も視野に入れておく必要がある。非典型的な「付き合う」という意味を表す動詞というのは、本来は別の意味を表し、「V+“得”/“不”+“来”」構造のVとして機能することによって、「付き合う」という意味を表すようになった動詞のことを指す。この場合、「話す」という意味を表す“谈”や“说”などが挙げられる。

まず、“谈”という「付き合う」という意味を表す動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造に生起することが可能である。“谈”は「話す」という意味で使われる動詞であるが、「V+“得”/“不”+“来”」構造に生起することによって、「(相性がいいから)付き合うことが実現できる」ことを指すようになる。下記の用例はその裏付けである。

(83)孩子。你与我家小芳谈得来吗？(《人民网》2014年5月18日)(坊や。うちの芳ちゃんとうまくやっているのかい？)

(84)虽然年纪相差很大，但我们思想上比较一致，平时很谈得来。(《人民网》2018年1月26日)(年が離れているとはいえ、考えていることは比較的に近いし、ふだんもとてもうまく話し合える。)

(85)也许我还年轻吧，有时觉得自己和六七十岁的老人谈不来。(《人民网》2006年1月19日)(たぶん私はまだ若いということだろうか。たまに六十代や七十代の老人とうまく話すことができないと感じる。)

(86)因为我们谈不来就不了了之。(《人民网》2014年9月16日)(わたしたちは話が合わなかったから、中途半端に終わってしまった。)

例(83)～(86)の“谈”は「付き合う」という意味を表す動詞としての役割を果たし、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。例(83)(84)の「V+“得”+“来”」構造は「(相性がいいから)付き合うことが実現できる」という意味を表し、“谈得来”は「話が合う」や「気が合う」という意味を表し、例(85)(86)の「V+“不”+“来”」構造は「(相性がよくないから)付き合うことが実現できない」という意味を表し、“谈不来”は「話が合わない」や「うまく付き合えない」という意味を表している。このことから、“谈”という非典型的な「付き合う」という意味を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうると認めなければならない。

それから、“说”という動詞も「付き合う」という意味を表す動詞として機能することが可能である。用例を観察してみると、“说”という動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造に生起しうる。下記の用例はその証左として挙げておく。

(87)因为老爷子和我的儿子都在美国，一样读完博士，在美国成家，生子，工作，我们有很多共同的话题，比较熟，也比较说得来。(《人民网》2016年2月2日)(あの爺

さんは私と同じように、息子さんがアメリカにいて、博士課程を終え、アメリカで結婚し、子供ができて仕事をされているから、お互いに共通の話題が多いし、よく知っているし、話が合う。)

(88)刘向前老实本分，踏实稳重，又会过日子，跟我特说得来！（《人民网》2013年4月25日）（刘向前は地味で正直であるし、穏やかで堅実な性格の持ち主でもある。また生活のやりくりも上手で、私とすごく話が合う！）

(89)封鑫珂性格孤僻，爱独来独往，拿他自己的话说，就是自家穷，和别人说不来。（《人民网》2005年1月30日）（封鑫珂の性格はひねくれている、自分一人で行動するのが好きで、彼自身の言葉でいうと、実家が貧乏のせいで、他の人と気が合わないそうである。）

(90)那也得找得到才行，你和这个人根本说不来，找他有什么意思？（《人民网》2003年11月8日）（それも見つけられればの話で、君とこの人は全然気が合わないし、会ってどうするの？）

例(87)～(90)の“说”は「付き合う」という意味を表す動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造に使われている。例(87)(88)の「V+“得”+“来”」構造は「(相性がいいから)付き合うことが実現できる」という意味を表し、“说得来”は「話が合う」や「気が合う」という意味を表し、例(89)(90)の「V+“不”+“来”」構造は「(相性がよくないから)付き合うことが実現できない」という意味を表し、“说不来”は「話が合わない」や「うまく付き合えない」という意味を表している。これらの用例は、“说”という「付き合う」という意味を表す動詞が「V+“得”/“不”+“来”」のV項になれることの裏付けにもなりうる。

この部分をまとめると、「付き合う」という意味を表す動詞は「V+“得”/“不”+“来”」のV項になりうる。「V+“得”/“不”+“来”」構造は、「(相性がいいかどうかによって)付き合うことが実現できるかどうか」という意味を表す。

3節の分析結果をまとめると、前置動詞が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能は主に次の四つにまとめられる。

まず、前置動詞が人の表現活動動詞、「仕事をする」という意味を表す動詞、従属変化を引き起こす動詞、対応の意味を表す動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「Vが実現できるかどうか」という意味を表す。次に、前置動詞が方向を表す動詞の場合、「話者のいる場所への移動が実現できるかどうか」という意味を表す。さらに、前置動詞が飲

食を表す動詞である場合、「V+“得”+“来”」構造は「(食べ物に慣れて)食べることが実現できる」という意味を表す。それから、前置動詞が、「付き合う」という意味を表す動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は、「(相性がいいかどうかによって)付き合うことが実現できるかどうか」という意味を表す。

4 前置動詞が無意志動詞である場合

この節では、先行研究では考察に及ばなかった「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞は無意志動詞である場合の意味・用法について考察する。これまでの研究では、無意志動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に生起することができないとされている。しかし、本章の2節で示したように、無意志動詞も「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に生起することが可能である。本節では、どんな無意志動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞になりうるかどうかについて検証し、無意志動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞のVになる場合の意味・機能について考察する。

用例を調べた結果、「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に使用可能な無意志動詞は、覚醒の意味を表す動詞と方向を表す動詞に分布している。そのため、本節では、覚醒の意味を表す動詞の場合と方向を表す動詞の場合と分けて、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能について考察する。

4.1 覚醒の意味を表す動詞の場合

覚醒の意味を表す動詞とは、「目が覚める」ことを意味する動詞のことである。中国語では、“醒”という言葉が当てはまる。「目が覚める」という行為は、一般的に言えば、人の意志によってコントロールできる動作ではないため、無意志動詞として認められる。そのほか、“醒”は意志動詞として機能する場合もある。例えば、悪夢にうなされて、自ら起きようとする場合の“醒”は意志動詞として認められる⁸⁾。この節では、無意志動詞として機能する覚醒の意味を表す動詞の“醒”に焦点を照らし、無意志動詞の“醒”が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に使用可能と仮定し、その妥当性について考察する。

また、仮説の(11)で提案したように、前置動詞が無意志動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「ある現象が現れる可能性があるかどうか」という意味の部分についても検証する。実際の用例を観察してみたところ、無意志動詞としての“醒”は、「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に使用することが可能である。以下の用例はその裏付けである。

- (91)本来医生还说，不知道你要多久才醒得来呢。(邵薇《幸福烘焙坊》2004)(もともと医者さんは、あとどのぐらいで君が目覚めることができるのかわからないと言っていた。)
- (92)前半夜看了几回，后半夜困得厉害了，我睡死再没醒得来嘛。(柳青《铜墙铁壁》1976)(あの日の夜の前半は何回も見たが、夜中になると眠すぎて、死んだように眠ってしまって、その後目覚めることがなかった。)
- (93)夜里，疲倦沉重的人们一时醒不来，那锣声就会长久地响着，直到人们一个个哈欠连天地走来。(《人民网》2017年3月14日)(夜、ひどく疲れている人たちはすぐに目覚めることができない。ドラの音がジャンジャンと長く響き渡ってようやく人々はあくびをしながら、出てくる。)
- (94)朋友一下子慌了神，她拼命晃她，想唤醒小汪，可是小汪怎么都醒不来。(《人民网》2009年6月23日)(友人は急に慌て出した、彼女は必死に汪さんを揺らし、汪さんを起こしたい。しかし汪さんはどうしても目覚めることができない。)

例(91)～(94)における“醒”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に使われている。この場合、動作主が意志的に行う動作ではないため、覚醒の意味を表す動詞の“醒”は、無意志動詞としての機能を果たしていると認められる。例(91)(92)の「V+“得”+“来”」構造は「目覚めるという現象が現れる可能性がある」という意味を表し、“醒得来”は「目覚めることができる」という意味を表している。例(93)(94)の「V+“不”+“来”」構造は「目覚めるという現象が現れる可能性がない」という意味を表し、“醒不来”は「目覚めることができない」という意味を表している。

このことから、覚醒の意味を表す動詞の“醒”は無意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項になりうる。“醒得来”は「目覚めることができる」という意味を表し、“醒不来”は「目覚めることができない」という意味を表す。それから、無意志動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造に生じた場合、ある現象が起きる可能性があるかどうかという意味を表すので、「認識の可能」⁹⁾として認められる。

4.2 方向を表す動詞の場合

方向を表す動詞は、主体が有情物の場合において意志動詞としての機能を果たし、主体が無情物の場合において、無意志動詞としての機能を果たす。本章の3.3において、すで

に意志動詞としての方向を表す動詞の“上”“下”“进”“出”“回”“过”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に生起しうるという結果が得られた。この節では、無意志動詞として方向を表す動詞を中心に、「V+“得”/“不”+“来”」構造に適用可能であるかどうかについて考察する。さらにどんな方向を表す動詞が、無意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造に生起しうるかという問題の解明にも努めたい。

まず、コーパスを調べたところ、方向を表す動詞の“下”は、無意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に生起することが可能である。下記の用例はその裏付けである。

(95)雷声很响，但是雨点没有下得来。(《人民网》2013年3月6日)(雷の音が大きく鳴っているが、雨粒は降ることはなかった。)

(96)我告诉他们喀纳斯的第一场雪一般要到10月中旬才下得来。(例(5)を再掲)(私は彼らに「ハナスの初雪は普通10月中旬になってからはじめて降るものだ」と教えた。)

(97)那天有下雨的迹象，天色晦暗，但雨却迟迟下不来。(例(6)を再掲)(その日雨が降りそうで、空も暗くなり、けれど雨はなかなか降らなかった。)

(98)如果发现出水管口处堵塞，热水下不来，要疏通出水管。(徐文钦《低碳节能生活指南》2015)(もし排水管の出口が塞がっていて、お湯が下へと流れてこなかった場合、詰まりをとることをおすすめする。)

例(95)~(98)における“下”の主体は「雨粒」「初雪」「雨」「お湯」というような無情物であるため、無意志動詞として認められる。いわば、“下”は無意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に使用可能であるといえる。例(95)(96)の「V+“得”+“来”」構造は「降るという現象が現れる可能性がある」という意味を表し、“下得来”は「雨や雪が降る可能性がある」という意味を表している。例(97)(98)の「V+“不”+“来”」構造は「降るという現象が現れる可能性がない」という意味を表し、“下不来”は「降らないまたは流れてこない」という意味を表している。この場合も「認識の可能」に当てはまり、意味に含まれている「可能性があるかどうか」という部分は話者の認識であり、モダリティの役割を果たしていると考えられる。そのため、文全体の意味に影響がなく、ある現象が現れるかどうかの意味だけがとどまっているのである。

また、「下がる」や「降る」を意味する“下”の対義語の“上”も無意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項になりうる。以下では、“上”が「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に立つ用例を挙げておく。

(99)政府采购定价低只是一个方面，提高了价格质量也未必上得来，一类疫苗实际上是垄断经营，没有竞争。(《中国财富》2013年9月10日)(政府による仕入れ価格は安いということもあって、仕入れ価格を上げたところで、品質も上がってくるとは限らない。ワクチンI類は実質上独占経営で、競争はない。)

(100)萧风说，他这随身听，是极品，低音下得去，高音上得来，绕耳三日，余音不绝……(《北方文学》1999)(「このウォークマンは結構なもので、低音に下がることもできるし、高音に上がることもできる。これで流した音楽はずっと耳に残り、余韻を感じられる」と萧风は言った。)

(101)他们告诉我，这里叫石板坡，地势高，白天水压低，自来水根本上不来，只有等到夜深人静，全城的大多数居民都不用水了，才有可能来一点点水。(叶辛《我生命的两极》2004)(彼らは私に教えた。ここは「石板坂」といって、標高の高いところであり、昼間の水圧は弱く、水道水が上がってこない。夜深く、城中の大半数の居民が水を使わなくなるまで待ったら、水は少しだけ上がってくる。)

(102)过去管理不科学，产量和品质上不来。(《人民网》2018年9月23日)(過去の管理は科学的ではないため、産出量も品質も上がってこない。)

例(99)～(102)における“上”の主体は「品質」「高音」「水道水」「産出量と品質」というような無情物であるため、無意志動詞と思われる。また、“上”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に使われている。例(99)(100)の「V+“得”+“来”」構造は「上がるという現象が現れる可能性がある」という意味を表し、“上得来”は「品質が上がる・高音に上がる事が可能である」という意味を表している。例(101)(102)の「V+“不”+“来”」構造は「上がるという現象が現れる可能性がない」という意味を表し、“上不来”は「上がってこない」という意味を表している。このことから、“上”は無意志動詞として、「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に使用可能である。

さらに、以下の例(103)～(106)に示すように、「入る」ことを意味する“进”という方向を表す動詞も、無意志動詞としての機能があり、「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に使用

することが可能である。

- (103)首先，得铲除多余角质，让水分乖乖留在肌肤内，养分也才进得来。(《新华网》2012年4月6日)(まず余分な角質を取り除き、水分をきちんと肌の中にとどまるようにしてから、栄養成分がはじめて入ることが可能になる。)
- (104)最初设计三门峡水库的苏联专家没意识到泥沙问题，结果泥沙进得来出不去。(《人民网》2002年7月15日)(はじめに三門峽ダムを設計する段階で、ソ連の専門家は泥と砂の問題に気づかなかつたため、その結果泥と砂は入ってくることは可能であるが、出ることはできない。)
- (105)禅就是空，杯子空了，水才进得来，满了就进不来了。(《人民网》2015年3月6日)(禅はすなわちこれ空である。コップが空になったら、水がはじめて入ることができて、いっぱいになると水が入らない。)
- (106)如果造血功能宕机，新鲜健康的养分进不来，却被有害有毒物质入侵，后果将十分严重。(《人民网》2019年2月20日)(造血機能が低下すると、新鮮で健康的な栄養素は入ることができなくなり、かえって有害や有毒の物質が侵入してしまい、その結果、深刻な問題になる。)

例(103)～(106)の“进”の主体は「栄養成分」「泥と砂」「水」「養分」のような無情物であるため、“进”は無意志動詞としての機能を果たしていると認められる。また、“进”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に使われている。例(103)(104)の「V+“得”+“来”」構造は「入るという現象が現れる可能性がある」という意味を表し、例(105)(106)の「V+“不”+“来”」構造は「入るという現象が現れる可能性がない」という意味を表している。このことから、方向を表す動詞の“进”は無意志動詞として、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用可能である。

さらに、“进”の視点的対義語として挙げられる“出”という動詞も無意志動詞として、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用可能だと思われる。その裏付けとして、以下の例(107)～(110)を挙げておく。

- (107)用 85 摄氏度的水泡白茶最佳，味道才出得来。(《人民网》2018年7月12日)(85度のお湯で入れた白茶が一番いい。そうすると、味が初めて出てくる。)

(108)如果说管理部门认真负责的话，那么多广告怎么出得来呢？（《人民网》2006年3月12日）（もし管理部門がまじめに規制していれば、広告はそんな多くに出てくるものか？）

(109)沙漠一望无垠、一毛不存，但出不来清流碧泉，长不出鲜花甜果。（朱国良《冷雨敲窗》2003）（砂漠は果てしなく広がっていて、何も生えていない。清らかな水も、碧い泉も出ることがなく、鮮やかな花や甘い果実が育つことはない。）

(110)每次试验都要花费巨额的钱，测量数据出不来就白实验了，所以工作责任大，价值很高，一点粗心大意也不行。（冯骥才《一百个人的十年》2004）（毎回のテストには、巨額のお金を使う必要があり、測定データが出てこない、無駄な実験になってしまう。だから仕事の責任は重大で、価値も非常に高く、少しの油断も許されない。）

例(107)～(110)の“出”の主体は「味」「広告」「清らかな水と碧い泉」「測定データ」のような無情物であるため、“出”は無意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に使われているといえる。例(107)(108)の「V+“得”+“来”」構造は「出るという現象が現れる可能性がある」という意味を表し、例(109)(110)の「V+“不”+“来”」構造は「出るという現象が現れる可能性がない」という意味を表している。このことから、方向を表す動詞の“出”は無意志動詞として、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用可能であると認めなければならない。

それから、コーパスを調べた結果、“过”という方向を表す動詞は無意志動詞としての役割を有し、「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項になりうると思われる。以下の用例はその裏付けである。

(111)那么高的山，水咋过得来？（《人民日报》2018年8月15日）（あんな高い山、水は渡ってこられるのか？）

(112)你们看，过去架起的管渠有的又被埋入地下，落差一米多，水哪里过得来啊？（京华时报2011年6月3日）（見てください。昔建てた水路はまた地下に埋められてしまった。段差は1メートルもあり、水が流れてくるはずないだろう。）

(113)滩涂淤积到一定高度，潮水过不来，就没有多少鸟儿光顾了。（《人民网》2002年3月15日）（砂浜がある高度まで積もると、潮水が渡らなくなり、その時はもう鳥

も来なくなるだろう。)

(114) 资金过不去，我就需要在大陆这边的银行贷款。(《人民网》2020年2月7日)(資金が渡ってこないと、私は大陸側の銀行でお金を貸さないといけない。)

例(111)～(114)の“过”は「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に使われている。“过”の移動の主体は「水」「潮水」「資金」のような無情物であるため、無意志動詞として役割を果たしていると認められる。例(111)(112)の「V+“得”+“来”」構造は「渡ってくるという現象が現れる可能性がある」という意味を表し、例(113)(114)の「V+“不”+“来”」構造は「渡ってくるという現象が現れる可能性がない」という意味を表している。このことから、方向を表す動詞の“出”は無意志動詞として、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用可能であると認めなければならない。

つまり、方向を表す動詞において“下”“上”“进”“出”“过”は、無意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用することが可能である。

4節の内容を改めてまとめると、覚醒の意味を表す動詞の“醒”と、方向を表す動詞の“下”“上”“进”“出”“过”は無意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に立つことが可能である。この場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は、「ある現象が起きる可能性があるかどうか」という意味を表す。

5 本章のまとめ

本章では、どんな動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に生起しうるかについて考察し、さらに前置動詞が意志動詞かそれとも無意志動詞かに分けて、「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能についても検討してきた。分析の結果を改めてまとめると、以下のようになる。

- ① 意志動詞の場合、「付き合う」という意味を表す動詞、飲食を表す動詞、人の表現活動動詞、所有関係の変化をひきおこす動詞、「仕事をする」という意味を表す動詞、対応の意味を表す動詞、方向を表す動詞の“上”“下”“进”“出”“回”“过”は、「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に生起しうる。無意志動詞の場合、覚醒の意味を表す動詞の“醒”と、方向を表す動詞の“下”“上”“进”“出”“过”は、「V+“得”/“不”+“来”」構造のV項に生起しうる。

- ② 前置動詞が人の表現活動動詞、「仕事をする」という意味を表す動詞、従属変化を引き起こす動詞、または対応の意味を表す動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「Vが実現できるかどうか」という意味を表す。
- ③ 前置動詞が方向を表す動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「話者のいる場所への移動が実現できるかどうか」という意味を表す。
- ④ 前置動詞が飲食を表す動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「(食べ物に慣れて)食えることが実現できる」という意味を表す。
- ⑤ 前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は、「(相性がいいかどうかによって)付き合うことが実現できるかどうか」という意味を表す。
- ⑥ 前置動詞が無意志動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は、「ある現象が起きる可能性があるかどうか」という意味を表す。

以上のように、本章では、「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能の細分化を行い、それぞれの意味の違いを解明してきたが、残される課題もある。前置動詞が無意志動詞である場合、「V+“不”+“来”」は自然な表現であるのに対し、「V+“得”+“来”」は平叙文に用いることがないようである。前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」と「V+“不”+“来”」の構文的条件について検討する必要があるように思われる。改めて第2章で述べることにする。

注

- 1) 「V+“得”/“不”+D」におけるDは趨向補語(方向補語)の意味であり、“来”もDに含まれているとされる。「趨向性可能補語」は、すなわち動詞と趨向補語の間に“得”や“不”を挿入した可能補語のことを指す。“来”も趨向補語であるため、本章の研究対象の「V+“得”/“不”+“来”」構造も「趨向性可能補語」として認められる。
- 2) 安本真弓(2009)がいう非自主動詞は、日本語においては無意志動詞のことであろう。また、自主動詞は意志動詞とは同じ類の動詞である。“自主動詞”と“非自主動詞”の詳細については馬慶株(1988)を参照されたい。日本語の「意志動詞」と「無意志動詞」の詳細については鈴木重幸(1972)を参照されたい。「意志動詞」と「無意志動詞」の違いは基本、主体が有情物かそれとも無情物かで区別する。主体が無情物である場合、無意志動詞とみなされる。主体が有情物である場合、さらに、その動作は主体でコントロールできるかどうかで判断する。主体の意志でコントロールできる場合は「意志動詞」とみなされ、主体の意志でコントロールできない場合は「無意志動詞」とみなされる。詳しくは杉本(1997)を参照されたい。
- 3) 「可能補語」は「V+“得”/“不”+方向補語」「V+“得”/“不”+結果補語」「V+“得”/“不”+“了”」などのような構造を指す。「V+“得”/“不”+“来”」構造も可能補語の一種として含まれる。
- 4) 本章では、“下不来台”“划得来”などのような既に意味が定着したものを対象外とする。また、“聊得来的朋友”のような連体修飾語として機能する場合もあるが、本論文では取り扱わないことにする。
- 5) 本章の取り扱う動詞の分類は工藤真由美(1995)を参考にし、まとめたものである。具体的に言えば、「人の表現活動動詞」、「所有関係の変化をひきおこす動詞」は工藤真由美(1995)から借りた用語である。それ以外の『「仕事をする」』という意味を表す動詞、「対応の意味を表す動詞」、「方向を表す動詞」、「飲食を表す動詞」、「『相手をする』』という意味を表す動詞」という五つの動詞分類は、「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能とその前置動詞の構文的分布に基づき、それぞれの動詞の意味特徴を捉えられるように、筆者がまとめた分類である。
- 6) この観点は、馬慶株(1988)によって支持される。馬慶株(1988)では、中国語の“上”“下”“打”“起”“过”などの動詞は、文脈(目的語などの違い)によって自主動詞の役割や非自主動詞の役割を果たす場合があると指摘している。詳しくは馬慶株(1988)の pp175-176 を

参照されたい。

- 7) この“说”の客体が人であるため、「付き合う」という意味を表す動詞として認められる。また、“我不会说普通话”(標準語が言えない)のような例文において“说”は言語活動を表す動詞として認められる。
- 8) コーパスを調べたところ、文脈に基づき、意志動詞として機能する場合の“醒”が「V+“得”“不”+“来”」構造の前置動詞に生起する用例はわずか3例しかないので、本研究の対象外とする。“醒”が意志動詞として機能しているかそれとも無意志動詞として起しているのかという意志性の有無に関する判定は、文脈に基づき、筆者の内省によるものである。
- 9) 「認識の可能」とは、あるコトガラの実現の可能性である。詳しくは渋谷勝己(1986)を参照されたい。

第2章 前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」の構文的条件について

1 はじめに

前章では、前置動詞が意志動詞かそれとも無意志動詞かに分けて、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能について考察し、さらに前置動詞が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味を細分化してきた。本章では、前章の考察に及ばなかった「前置動詞が無意志動詞である場合」の「V+“得”/“不”+“来”」構造の構文的特徴について考察する。

「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞には、さまざまな動詞が生起しうる。これまでの研究では、無意志動詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用できないとされている。しかし、前章に示したように、“醒”という無意志的な動きを表す動詞または“下”のような方向を表す動詞は、無意志動詞として「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用することが可能である。しかし、前置動詞が無意志動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造はすべての文環境に使用できるわけではない。

(1)最初设计三门峡水库的苏联专家没意识到泥沙问题，结果泥沙进得来出~~不~~去。(《人民网》2002年7月15日)(はじめに三门峡ダムを設計する段階で、ソ連の専門家は泥と砂の問題に気づかなかつたため、その結果泥と砂は入ってくることは可能であるが、出ることはない)

(1')*最初设计三门峡水库的苏联专家没意识到泥沙问题，结果泥沙进得来。¹⁾

例(1)の“进得来”の主体は「泥と砂」であり、意志性も感じられないため、無意志動詞として認められる。この場合の“进得来”という「V+“得”/“不”+“来”」構造は“出~~不~~去”と共起し、意味関係を結んでいる。この場合、“出~~不~~去”を削除すれば、例(1')のような不自然な表現になる。このことから、前置動詞が無意志動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造には、使用できる文環境と使用できない文環境があると認めなければならない。さらに、例(1)(1')から見れば、「V+“得”/“不”+“来”」構造は終止形として文を言い切ることができないという仮説が立てられる。

一方、前置動詞が意志動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造には、そのような構

文的制限がないと考えられる。

(2)清流答：“我做得来。”(亦舒《不羁的风》2005)(清流は「私ならできる」と答えた。)

例(2)の場合、“做”という意志動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に使われており、終止形として文を言い切っている。このことから、前置動詞が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造には、前置動詞が無意志動詞である場合のような構文的制限はないと考えられる。

そこで、本章では、例(2)のような前置動詞が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造を対象外とし、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造を研究対象として位置づけ、その構文的条件の解明を本章の目的とする。

2 先行研究の問題点と本章の立場

「V+“得”/“不”+“来”」構造に関する研究は刘月华(1998)、安本真弓(2009)などが挙げられる。刘月华(1998)は、「V+“得”/“不”+“来”」構造について、前置動詞と「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味関係について述べている。また、安本真弓(2009)では、「V+“得”/“不”+D」の意味・機能について述べており、無意志動詞自体が「V+“得”/“不”+D」には使えないと述べている。

以上のように、これまでの研究は主に「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能とその前置動詞の語彙的制限に関する研究であり、管見の限り、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造に関する研究はまだないようである。というより、これまでの研究では、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造自体が対象外とされてきた。

コーパスを調べた結果、確かに前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造の用例は、前置動詞が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造よりはるかに少ない。また、実際の用例を観察してみたところ、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造はすべての文環境において生起しうるわけではない。その構文的制限について、下記の例(3)(4)のような現象を見逃してはならない。

(3)下游比上游高了一丈多，水怎么过得来? (《株洲日报》2018年6月20日)(下流は上

流より1丈あまり高いのに、水が渡ってくるだろうか?)

(4)我告诉他们喀纳斯的第一场雪一般要到10月中旬才下得来。(康剑《聆听喀纳斯》2015)(私は彼らに「ハナスの初雪は普通10月中旬になってからはじめて降るものだ」と教えた。)

(3)* 下游比上游高了一丈多，水过得来。

(4)* 我告诉他们喀纳斯的第一场雪一般要到10月中旬下得来。

例(3)(4)の「V+“得”+“来”」構造の主語は無情物の「水」「雪」であり、「水が流れてくる」と「雪が降る」ことには意志性がないため、“过”と“下”は無意志動詞として認められる。例(3)の“过得来”は疑問文に使われており、例(4)の“下得来”は副詞の“才”と共に起している。この場合、例(3)を肯定文に変更し、例(4)の“才”を削除すれば、例(3')(4')のような不自然な表現になる。このことからみれば、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造には使用できる文環境と、使用できない文環境があると認めなければならない。いわば、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造を用いるためには、一定の構文的条件を満たす必要がある。例えば、例(3)のような疑問文に用いることや、例(4)のような肯定文において“才”と共に起することが、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造の構文的条件の一つだと推測できる。

一方、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造もすべての文環境において使用可能というわけではない。下記の例(5)(6)に示すように、「V+“不”+“来”」構造にも構文的制限があるように思われる。

(5)资金过不来，我就需要在大陆这边的银行贷款。(《人民网》2020年2月7日)(資金が渡ってこないなら、私は大陸側の銀行でお金を貸さないといけない。)

(6)有一年冬天特别冷，发醋的温度怎么都上不来。(张忠义《“母亲醋”的记忆》2019)(ある冬は特に寒く、発酵しようとした酢の温度はどうしても上がってこない。)

(5)* 资金过不来。

(6)* 有一年冬天特别冷，发醋的温度上不来。

例(5)(6)の“过”“上”の主語は「資金」「温度」という無情物であることから、無意志動詞として「V+“不”+“来”」構造に使われていると認めなければならない。例(5)の「V+“不”

＋“来”」構造は假定条件文の従属節として機能し、例(6)の「V＋“不”＋“来”」構造は「どうしても」を意味する中国語の“怎么都”と意味関係を結んでいる。この場合、例(5)という假定条件文の主節と、例(6)の“怎么都”を削除すれば、例(5')(6')のように不自然な表現になる。いわば、例(5)のような「V＋“不”＋“来”」構造が假定条件文の従属節として機能することや、例(6)のような“怎么都”と共起することが、「V＋“不”＋“来”」構造の構文的制限である可能性がある。

以上のように、これまでの研究では、前置動詞が無意志動詞である場合の「V＋“得”/“不”＋“来”」構造の現象について言及していない。そこで、本章では、このような無意志動詞である場合の「V＋“得”/“不”＋“来”」構造を研究対象として位置づけ、その構文的条件について考察する。また、用例を観察した結果、「V＋“得”＋“来”」の構文的条件は「V＋“不”＋“来”」の構文的条件とは異なるものと思われる。以下では、この仮説に基づき、3節では「V＋“得”＋“来”」の構文的条件について考察し、4節では「V＋“不”＋“来”」の構文的条件について考察する。5節では、まとめを行う。

3 「V＋“得”＋“来”」の構文的条件

本節では、前置動詞が無意志動詞である場合の「V＋“得”＋“来”」構造の構文的条件について考察する。2節では、前置動詞が無意志動詞である場合の「V＋“得”＋“来”」構造は単独で肯定文に使用できないのではないかという仮説を立ててきた。実際の用例を調べたところ、前置動詞が無意志動詞である場合の「V＋“得”＋“来”」構造の用例は、疑問文、否定を表す副詞“没”“没有”“未必”と共起する文、時間を表す副詞“才”と共起する文、対義語と共起する文²⁾に分布している。そのため、本節では、疑問文の場合、否定を表す副詞“没”“没有”“未必”と共起する場合、時間を表す副詞“才”と共起する場合、対義語と共起する場合にわけて、前置動詞が無意志動詞である場合の「V＋“得”＋“来”」構造の構文的条件について考察する。

3.1 疑問文の場合

用例を調べた結果、前置動詞が無意志動詞である場合の「V＋“得”＋“来”」が疑問文に生起している用例が見られた。このことから、前置動詞が無意志動詞である場合の「V＋“得”＋“来”」構造は疑問文に生起しうると推測できる。もっと具体的にいえば、疑問詞の“怎么”と意味関係を結ぶ場合と疑問詞の“哪里(哪)”と意味関係を結ぶ場合に分けられる。

まず、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造は、疑問詞の“怎么”と意味関係を結び、疑問文に生起しうると思われる。その裏付けとして以下の用例が挙げられる。

(7)水汽来源在东边、南边，吹的最多的风是西北风，这雪怎么下得来哦。(《人民网》2019年2月1日)(水蒸気の源が東側や南側にあり、一番よく吹く風は北西の風で、この雪はどのように降ることができる?)

(8)下游比上游高了一丈多，水怎么过得来? (例(3)を再掲)(下流は上流より1丈あまり高く、水は渡ってくるものか?)

(9)所以如果这时候您还喝牛奶，您想想，您的血压怎么下得来? (张悟本《把吃出来的病吃回去》2009)(だから、もしこんな時に牛乳を飲んだらどうなるか、考えてみてください。あなたの血圧は下がるのか?)

(10)只做这么几个，顶多几百个吧，成本怎么下得来? (《潇湘晨报》2012年3月8日)(ほんの何個かをつくる。せいぜい何百個くらいだろう。どうすればコストを下げることができるか?)

例(7)~(10)の「V+“得”+“来”」構造の主語は、「雪」「水」「血压」「コスト」という無情物であるため、前置動詞として使われている“下”“过”は無意志動詞として認められる。この場合、「V+“得”+“来”」構造は“怎么”という疑問詞と意味関係を結び、疑問文に使われている。

この場合、疑問詞の“怎么”を削除し、肯定文にすると、以下の例(7')~(10')のように、不自然な表現になる。

(7')*水汽来源在东边、南边，吹的最多的风是西北风，这雪下得来。

(8')*下游比上游高了一丈多，水过得来。

(9')*所以如果这时候您还喝牛奶，您想想，您的血压下得来。

(10')*只做这么几个，顶多几百个吧，成本下得来。

例(7')~(10')の「V+“得”+“来”」構造はいずれも“怎么”という疑問詞が現れていないがゆえに、不自然な表現として見なされる。このことからみれば、疑問詞の“怎么”と共起し、

疑問文に用いるという文環境は、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造が成り立つための構文的特徴として認めなければならない。

疑問詞の“怎么”と共起することが可能であれば、ほかの疑問詞と意味関係を結ぶことも可能だと思われる。下記の例(11)～(14)に示すように、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造は、疑問詞の“怎么”と意味関係を結び、疑問文に用いることが可能である。

(11)你们看，过去架起的管渠有的又被埋入地下，落差一米多，水哪里过得来啊？（《京华时报》2011年6月3日）（見てください。昔建てた水路はまた地下に埋められてしまった。段差は1メートルもあり、水が流れてくるはずないだろう。）

(12)殿下耍人也该有个限度，这青天白日的五月时节，哪里下得来雪？（小楼《卿卿辞》2019）（殿下、人をからかうにも限度というものがある。よく晴れ渡る五月に、雪が降るはずないだろう？）

(13)看样子，我也得照你这么做，不然哪出得来那种味道？（绫罗衫《秀湖美田》2012）（この様子から見ると、私も君と同じやり方でやる必要がある。そうでないと、あの味が出ないだろう。）

(14)不热药材的效果哪出得来，赶紧的，进去，不要浪费了我的药材！（枫舞碧空《重生之迷瞳》2017）（加熱しないと、薬草は効果が出ないだろう。急いで、入れよう、私の薬草を無駄にしないでください！）

例(11)～(14)の「V+“得”+“来”」構造は、「水」「雪」「味」「効果」という無情物の動きを指しているため、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造だと考えられる。

例(11)(12)の「V+“得”+“来”」構造は“哪里”という疑問詞と、例(13)(14)の場合は“哪”という疑問詞と意味関係を結び、疑問文に使われている。

この場合、疑問詞の“哪里”や“哪”を削除し、以下の例(11')～(14')のように肯定文にすると、不自然な表現になる。

(11')*你们看，过去架起的管渠有的又被埋入地下，落差一米多，水过得来。

(12')*殿下耍人也该有个限度，这青天白日的五月时节，下得来雪。

(13')*看样子，我也得照你这么做，出得来那种味道。

(14')* 不热药材的效果出得来，赶紧的，进去，不要浪费了我的药材！

例(11')～(14')の「V+“得”+“来”」は疑問詞の“哪里”や“哪”が現れていないがゆえに、不自然な表現として見なされる。このことから、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造が生起するためには、疑問詞の“哪里”や“哪”と共起し、疑問文に用いるという文環境が必要であると考えられる。

以上のことからみれば、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造は、疑問詞の“怎么”“哪里”“哪”と共起し、疑問文に生起しうるといえる。

3.2 否定を表す副詞“没”“没有”“未必”と共起する場合

この節では、否定を表す副詞“没”“没有”“未必”と共起する場合、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造は終止形として文を言い切ることができるかどうかについて考察する。

まず、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造は、否定を表す副詞“没”“没有”と共起する場合、終止形として文を言い切ることが可能である。その裏付けとして、下記の用例が挙げられる。

(15)前半夜看了几回，后半夜困得厉害了，我睡死再没醒得来嘛。(柳青《铜墙铁壁》

1976)(あの日の夜の前半は何回も見たが、夜中になると眠すぎて、死んだように眠ってしまって、その後目覚めることがなかった。)

(16)去年这会儿,鸡蛋价格都没超过 4 块钱的,今年年中涨上去之后,价格就再也没下得来。

(《金陵晚报》2013 年 12 月 18 日)(去年この頃、たまごの値段は 4 元を超えたことがなかったのに、今年の半ばあたりに値上がりした後、もう値下がりすることはなかった。)

(17)雷声很响，但是雨点没有下得来。(《人民网》2013 年 3 月 6 日)(雷の音が大きく鳴

ったが、雨粒は降ってこなかった。)

例(15)の「V+“得”+“来”」構造には、人の無意志動詞の“醒”が使われ、例(16)(17)の“下”は「値段」「雨粒」という無情物の動きを表しているため、例(15)の“醒得来”も例(16)(17)の“下得来”も前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造として認められる。例(15)(16)

の「V+“得”+“来”」は否定を表す副詞の“没”と意味関係を結び、例(17)の「V+“得”+“来”」構造は否定を表す副詞の“没有”と意味関係を結んでいる。この場合の「V+“得”+“来”」構造は終止形として文を言い切っている。このことから、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造は否定を表す副詞“没”“没有”と共起する場合、終止形として文を言い切ることができるかと認めなければならない。

さらに、この場合、否定を表す副詞“没”や“没有”を削除すると、次の例(15')(16')(17')のような不自然な表現になる³⁾。

(15')*前半夜看了几回,后半夜困得厉害了,我醒得来。

(16')*去年这会儿,鸡蛋价格都没超过4块钱的,今年年中涨上去之后,价格下得来。

(17')*雷声很响,雨点下得来。

例(15')(16')(17')の「V+“得”+“来”」は否定を表す副詞の“没”や“没有”と共起せず、単独で平叙文の肯定文に使われており、いずれも不自然な表現だと思われる。このことから、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造が、文を言い切るためには、否定を表す副詞の“没”や“没有”と共起する必要があるといえる。

次に、「～とは限らない」というモダリティのような意味を表す“未必”という副詞も否定を表す副詞として認められる。下記の用例に示すように、副詞の“未必”と共起する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造は終止形として機能することが可能である。

(18)政府采购定价低只是一个方面,提高了价格质量也未必上得来,一类疫苗实际上是垄断经营,没有竞争。(《中国财富》2013年9月10日)(政府による仕入れ価格は安いということもあって、仕入れ価格を上げたところで、品質も上がってくるとは限らない。ワクチンI類は実質上独占経営で、競争はない。)

(19)这么大的风,那雨却未必下得来,除非是风住了,雨才会丝丝缕缕的落下来。(沐夜璃《妃本惊华》2019)(こんなに大きい風が吹いているから、その雨が落ちてくるとは限らないだろう。でも、もしその風が止んだら、雨がちらちらと降ってくるだろう。)

(20)瞧这样子,会是一场大雪,但一时半会儿未必下得来。(柳暗花溟《金风玉露》2012)(こ

の様子だと、大雪になりそうだ。ただすぐに降ってくるとは限らない。)

(21)换了普通人，身体拧成麻花状也未必出得来百分之一的效果。(《新华网》2017年9月13日)(普通の人なら、体を「麻花(マーホア)」のようにねじられても、百分の一の効果すら出るとは限らない。)

例(18)~(21)の「V+“得”+“来”」構造には、方向を表す動詞の“上”“下”“出”が使われ、その主語に「品質」「雨」「雪」「効果」が立っているため、方向を表す動詞の“上”“下”“出”は無意志動詞として認められる。この場合、「V+“得”+“来”」構造は否定を表す副詞の“未必”と意味関係を結び、「V+“得”+“来”」構造は終止形として機能し、文を言い切っている。このことから、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造は否定を表す副詞の“未必”と意味関係を結ぶ場合、終止形として機能することができると認めなければならない。

この場合においても、次の例(18')~(21')に示すように、否定の意味を表す副詞の“未必”が現れなければ、不自然な表現になる。

(18')*政府采购定价低只是一个方面，提高了价格质量也上得来，一类疫苗实际上是垄断经营，没有竞争。

(19')*这么大的风，那雨却下得来，除非是风住了，雨才会丝丝缕缕的落下来。

(20')*瞧这样子，会是一场大雪，但一时半会儿下得来。

(21')*换了普通人，身体拧成麻花状也出得来百分之一的效果。

例(18')~(21')の「V+“得”+“来”」は平叙文の肯定文に使われ、否定の意味を表す副詞の“未必”と共起していないため、不自然な表現と見なされる。このことから、否定を表す副詞“未必”と共起することが、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造が終止形として機能するための必要な文環境として考えられる。

つまり、否定を表す副詞“没”“没有”“未必”と共起する場合、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造は終止形として文を言い切ることができる。

3.3 時間を表す副詞“才”と共起する場合

この節では、時間を表す副詞“才”と共起する場合、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”

+“来”」構造が終止形として機能することができるかどうかについて検証する。以下の用例が示すように、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」は時間を表す副詞の“才”と意味関係を結び、終止形として文を言い切ることが可能である。

(22)本来医生还说，不知道你要多久才醒得来呢。(邵薇《幸福烘焙坊》2004)(もともと医者さんは、あとどのぐらいで君が目覚めることができるのかわからないと言っていた。)

(23)我告诉他们喀纳斯的第一场雪一般要到10月中旬才下得来。(例(4)を再掲)(私は彼らに「ハナスの初雪は普通10月中旬になってからはじめて降るものだ」と教えた。)

(24)首先，得铲除多余角质，让水分乖乖留在肌肤内，养分也才进得来。(《新华网》2012年4月6日)(まず余分な角質を取り除き、水分をきちんと肌の中にとどまるようにし、栄養成分がはじめて入ることが可能になる。)

(25)用85摄氏度的水泡白茶最佳，味道才出得来。(《人民网》2018年7月12日)(85度のお湯で入れた白茶が一番いい。そうすると、味が初めて出てくる。)

例(22)～(25)における「V+“得”+“来”」構造の前置動詞の“醒”“下”“进”“出”は無意志的な動きを表しているため、無意志動詞として認められる。「V+“得”+“来”」構造は時間を表す副詞の“才”と共起し、終止形として機能し、文を言い切っている。

この場合、副詞の“才”と共起することが、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造が終止形として成り立つための条件だと推測できる。なぜならば、“才”の働きがないと、例(22)～(25)は次の例(22')～(25')のような不自然な表現になるからである。

(22')*本来医生还说，不知道你要多久醒得来。

(23')*我告诉他们喀纳斯的第一场雪一般要到10月中旬下得来。

(24')*首先，得铲除多余角质，让水分乖乖留在肌肤内，养分进得来。

(25')*用85摄氏度的水泡白茶最佳，味道出得来。

例(22')～(25')の「V+“得”+“来”」は時間を表す副詞の“才”が現れていないため、不自然な表現として見なされる。このことから、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”

+“来”」構造が終止形として文を言い切るためには、副詞の“才”を付け加える必要であるといえる。

つまり、時間を表す副詞の“才”と共起する場合、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造が終止形として機能することができる。

3.4 対義語と共起する場合

前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造が終止形として使用可能な文環境の一つとして、対義語と共起する場合が挙げられる。前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造と意味関係を結ぶ対義語には、「V+“得”/“不”+“去”」構造や「V+“得”+“出”」構造⁴⁾などが挙げられる。いわば、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造が対義語の「V+“得”/“不”+“去”」構造や「V+“得”+“出”」構造と共起する場合、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造は終止形として機能できると思われる。

実際の用例を観察した結果、対義語と共起する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造は使用可能であると思われる。次の例(26)～(29)はその裏付けである。

(26)萧风说,他这随身听,是极品,低音下得去,高音上得来,绕耳三日,余音不绝…

…(《北方文学》1999)(「このウォークマンは結構なもので、低音に下がることもできるし、高音に上がることもできる。これで流した音楽はずっと耳に残り、余韻を感じられる」と萧风は言った。)

(27)全力做好国际物流保通保畅保运保供各项工作,保障进出口货物进得来、出得去。

(《人民网》2020年5月20日)(国際郵便がスムーズに輸送され、提供されることを確保するための各仕事を全力で尽くし、輸出や輸入貨物が入ってくることと、送り出すことを確保する。)

(28)最初设计三门峡水库的苏联专家没意识到泥沙问题,结果泥沙进得来出不去。(例(1)

を再掲)(はじめに三门峡ダムを設計する段階で、ソ連の専門家は泥と砂の問題に気づかなかつたため、その結果泥と砂は入ってくることは可能であるが、出ることはない)

(29)日前,记者从椒江区“五水共治”办公室获悉,该区投资720万元,建设山体雨水引

流工程，实现清水进得来，雨水排得出。(台州日报 2017 年 4 月 4 日)(先日、本社の記者は、椒江区にある“五水共治”の事務室からこんな情報を手に入れた。この地域は 720 万元を投入し、山の雨水の引水工事を行い、きれいな水を引き入れ、雨水が排出できるようにしたいとのことである。)

例(26)～(29)の「V+“得”+“来”」構造は対義語と並列構造を構成している。例(26)における“上得来”の主語が「ウォークマンの音」であり、意志性がないため、無意志動詞だと思われる。“上得来”は対義語の“下得去”と並列構造を構成している。例(27)における“进得来”の主語が「貨物」であるため、無意志動詞である。“进得来”は対義語の“出得去”と並列構造を構成している。例(28)における“进得来”の主語が「泥と砂」であるため、無意志動詞として認められる。“进得来”は対義語の“出不得”と並列構造を構成している。例(29)における“进得来”の主語が「きれいな水」であるため、無意志動詞の役割を果たしている。“进得来”と対義語の“排得出”は並列構造を構成している。このことから、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造は、対義語と共起する文に生じうると認めなければならない。

この場合、対義語の「V+“得”/“不”+“去”」構造や「V+“得”+“出”」構造と共起することが例(26)～(29)の前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造が成り立つための文環境だと思われる。というのは、対義語の部分を削除すると、次の例(26')～(29')のような不自然な表現になる。

(26')* 萧风说，他这随身听，是极品，高音上得来，绕耳三日，余音不绝……

(27')* 全力做好国际物流保通保畅保运保供各项工作，保障进出口货物进得来。

(28')* 最初设计三门峡水库的苏联专家没意识到泥沙问题，结果泥沙进得来。

(29')* 日前，记者从椒江区“五水共治”办公室获悉，该区投资 720 万元，建设山体雨水引流工程，实现清水进得来。

例(26')～(29')の「V+“得”+“来”」は対義語が現れていないがゆえに、不自然な表現として見なされる。いわば、対義語の“下得去”“出得去”“出不得”という「V+“得”/“不”+“去”」構造や“排得出”という「V+“得”+“出”」構造と共起することで、「V+“得”+“来”」構造は終止形として機能することが可能になる。

このことから、対義語の「V+“得”/“不”+“去”」構造や「V+“得”+“出”」構造と共起する場合、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造は終止形として機能することができる。

3節をまとめると、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」構造は、疑問詞の“怎么”“哪里”“哪”と共起する疑問文、否定を表す副詞“没”“没有”“未必”と共起する文、時間を表す副詞“才”と共起する文、対義語の「V+“得”/“不”+“去”」構造や「V+“得”+“出”」構造と共起する文に生起しうる。

4 「V+“不”+“来”」の場合

前節では、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造が生起しうる文環境について考察してきた。本節では、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造の構文的条件について考察する。

コーパスを調べたところ、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造が単独で終止形として使われる用例はないようである。前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造の用例は、副用語の“怎么都”と共起する文、仮定条件文の従属節に用いられる文、時間を表す副詞の“迟迟”と共起する文、推量を表す副詞と共起する文に分布している。そのため、本節では、副用語の“怎么都”と共起する場合、仮定条件文の従属節の述語として機能する場合、時間を表す副詞の“迟迟”と共起する場合、推量を表す副詞と共起する場合にわけて、前置動詞が無意志動詞の「V+“不”+“来”」構造の構文的条件について考察する。

4.1 副用語の“怎么都”と共起する場合

前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造が使用可能な文環境の一つとして、副用語の“怎么都”と共起する場合が挙げられる。副用語の“怎么都”は、「どうしても」という意味を表す連用修飾語である。

用例を観察した結果、副用語の“怎么都”と共起する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は終止形として使用可能であると思われる。その裏付けとして下記の例(30)(31)(32)を挙げておく。

(30)朋友一下子慌了神，她拼命晃她，想唤醒小汪，可是小汪怎么都醒不来。(《人民网》)

2009年6月23日)(友人は急に慌て出した。彼女は必死に汪さんを揺らし、汪さんを起こしたい。しかし汪さんはどうしても目覚めることができない。)

(31)有一年冬天特别冷，发醋的温度怎么都上不来。(例(6)を再掲)(ある冬は特に寒く、発酵しようとした酢の温度はどうしても上がってこない。)

(32)我们三个赶紧跑到电梯口，却发现电梯就停在一楼，怎么都上不来。(天残《降头传说：灵异诡谈录》2017)(三人で急いでエレベーターに向かったが、一階に停まったまま、どうしても上がってこない。)

例(30)の「V+“不”+“来”」構造には、人の無意志動詞の“醒”が使われ、例(31)(32)の“上不来”の主語は「温度」「エレベーター」であるがゆえに、「V+“不”+“来”」構造の前置動詞は無意志動詞として機能していると認められる。この場合、「V+“不”+“来”」構造の“醒不来”“上不来”は、“怎么都”という副用語と意味関係を結んでおり、終止形として文を言い切っている。

この場合、副用語の“怎么都”と共に起する場合、前置動詞が無意志動詞の「V+“不”+“来”」構造が終止形として機能できると考えられる。なぜならば、例(30)(31)(32)の“怎么都”という部分を削除すると、次の例(30')(31')(32')のような不自然な表現になるからである。

(30')*朋友一下子慌了神，她拼命晃她，想唤醒小汪，可是小汪醒不来。

(31')*有一年冬天特别冷，发醋的温度上不来。

(32')*我们三个赶紧跑到电梯口，却发现电梯就停在一楼，上不来。

例(30')(31')(32')の「V+“不”+“来”」は副用語の“怎么都”と共に起せず、単独で終止形として使われており、不自然な表現である。いわば、副用語の“怎么都”と共に起することが、前置動詞が無意志動詞である「V+“不”+“来”」構造が終止形として機能するための文環境と考えられる。

このことから、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は、副用語の“怎么都”と共に起する場合に、終止形として機能することができる。

4.2 仮定条件文の従属節の述語として機能する場合

用例を調べたところ、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造が仮

定条件文の従属節の述語として使われる用例が見られる。仮定条件文の従属節の述語として機能する場合も、前置動詞が無意志動詞である「V+“不”+“来”」構造の構文的特徴の一つと思われる。

(33)夜里，疲倦沉重的人们一时醒不来，那锣声就会长久地响着，直到人们一个个哈欠连天地走来。(《人民网》2017年3月14日)(夜、ひどく疲れている人たちはすぐに目覚めることができない場合、ドラの音がジャンジャンと長く響き渡ってようやく人々はあくびをしながら、出てくる。)

(34)滩涂淤积到一定高度，潮水过不来，就没有多少鸟儿光顾了。(《人民网》2002年3月15日)(砂浜がある高度まで積もってくると潮水が渡ってこなくなり、鳥も来なくなるだろう。)

(35)资金过不来，我就需要在大陆这边的银行贷款。(例(5)を再掲)(資金が渡ってこないと、私は大陸側の銀行でお金を貸さないといけない。)

(36)如果发现出水管口处堵塞，热水下不来，要疏通出水管。(徐文钦《低碳节能生活指南》2015)(もし排水管の出口が塞がっていて、お湯が下へと流れてこなかったら、詰まりを取ることをおすすめする。)

例(33)の「V+“不”+“来”」構造には、人の無意志動詞の“醒”が使われ、例(34)(35)(36)の「V+“不”+“来”」構造の主語は「潮水」「資金」「お湯」であるため、「V+“不”+“来”」構造の前置動詞の“醒”“过”“下”は無意志動詞として認められる。例(33)(34)(35)の主節にある“就”という副詞と、例(36)の従属節にある接続詞の“如果”から見れば、例(33)～(36)は仮定条件文と思われる。いわば、この場合において、無意志動詞である「V+“不”+“来”」構造は仮定条件文の従属節の述語として機能している。

したがって、仮定条件文の従属節の述語として機能する場合、無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造が終止形として機能できると思われる。というのは、例(33)～(36)の仮定条件文の主節を削除し、前置動詞が無意志動詞の「V+“不”+“来”」構造を単文または主節の述語にすると、次の例(33')～(36')のように不自然な表現になる。

(33')*夜里，疲倦沉重的人们一时醒不来。

(34')*滩涂淤积到一定高度，潮水过不来。

(35') * 资金过不来。

(36') * 发现出水管口处堵塞, 热水下不来。

例(33')~(36')の「V+“不”+“来”」構造を従属節の述語ではなく、主節の述語や単文の述語にすると、不自然な表現になる。

このことから、仮定条件文の従属節の述語として機能する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は終止形として機能することができる。

4.3 時間を表す副詞の“迟迟”と共起する場合

中国語には、“迟迟”という時間を表す副詞がある。“迟迟”は日本語の「なかなか」と似通った意味を表し、話者が想像している時間より遅いという意味を表す副詞である。用例を調べてみると、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は、“迟迟”のような時間を表す副詞と意味関係を結ぶことが可能である。その裏付けとして下記の用例が挙げられる。

(37)那天有下雨的迹象, 天色晦暗, 但雨却迟迟下不来。(苏童《平静如水》1988)(その日雨が降りそうで、空も暗くなり、けれど雨はなかなか降ってこなかった。)

(38)卓楚悦望向窗户, 外面天空灰蓝, 似乎要下雨, 迟迟下不来。(傅宝珍《静候三餐》2019)(卓楚悦は窓の方向を見た。外では、空はねずみ色がかかった藍色になっていれ、雨が降りそうだが、なかなか降らなかった。)

(39)虽然车子中的暖气开到最大, 温度还是迟迟上不来。(南枫《血光: 长城抗战实录》2002)(車内のヒーターを最大まで上げていても、温度はなかなか上がってこない。)

(40)赛后, 由于正式成绩迟迟出不来, 苏炳添也不敢确定自己究竟跑了多少。(《人民网》2013年5月22日)(レース後、正規の結果がなかなか出てこないのので、苏炳添は自分がどれほどの時間を使ったのかがわからなかった。)

例(37)~(40)の「V+“不”+“来”」構造は「雨」「温度」「成績」という無情物の動きを表し、意志性がないため、例(37)~(40)の“下不来”“上不来”“出不了”は、前置動詞が無意志動詞の「V+“不”+“来”」構造として認められる。この場合、「V+“不”+“来”」構造は、

“迟迟”という時間を表す副詞と意味関係を結び、終止形として機能している。

このことから、時間を表す副詞の“迟迟”と共起する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は終止形として機能することができると思われる。その裏付けとして、例(37)~(40)の“迟迟”という副詞を削除すると、次の例(37')~(40')のように不自然な表現になる。

(37')*那天有下雨的迹象,天色晦暗,但雨却下不来。

(38')*卓楚悦望向窗户,外面天空灰蓝,似乎要下雨,下不来。

(39')*虽然车子中的暖气开到最大,温度还是上不来。

(40')*赛后,由于正式成绩出不了,苏炳添也不敢确定自己究竟跑了多少。

例(37')~(40')の「V+“不”+“来”」は時間を表す副詞の“迟迟”と共起せず、述語として機能しており、いずれも不自然な表現と認められる。つまり、時間を表す副詞の“迟迟”との共起することが、無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造が終止形として機能するための必要な文環境として認めなければならない。

このことから、時間を表す副詞の“迟迟”と共起する場合に、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は終止形として機能することができる。

4.4 推量を表す副詞と共起する場合

中国語には、“肯定”や“绝对”のような推量を表す副詞がある。“肯定”“绝对”は日本語の「きっと」という副詞と似通った役割を持っており、「~に違いない」という推測モダリティと似通った意味を表す。前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造の用例を調べてみると、“肯定”“绝对”のような推量を表す副詞と意味関係を結ぶことが可能である。その証拠として、次の例(41)~(44)が挙げられる。

(41)一些菜贩表示,进货价就高,零售价肯定下不来。(《人民网》2016年3月25日)(野菜の商人は、「そもそも仕入れ価格が高いから、小売り価格は低くなるはずがない」と言う。)

(42)在小的企业里,每个员工的一举一动都有可能关系公司的生死存亡,如果公司内部有两名员工因为互相配合不好而闹矛盾,两个人都带着情绪工作,效率肯定出不了。

(《人民网》2014年11月28日)(中小企業では、各従業員の一挙手一投足が会社の存続に影響を及ぼす可能性がある。もし会社内で二人の従業員がうまく連携できず、仲たがいになり、両者とも不満を抱きながら働いていると、効率は出るはずないだろう。)

(43)就算刮风下雨，这里也不会有影响，防护措施做得好嘛，地面都是拱形的，水绝对进不来。(宋喜《肥婆皇后》2009)(たとえ雨が降ってもここには影響はないだろう。なぜなら予防措置がしっかりできているからな。地面がアーチ状になっているため、水は絶対に入らないだろう。)

(44)因为就方英一个人在那里自说自话的，效果绝对出不来，方英不会答应的。(暖鸿《重生之我是松狮犬》2020)(なぜなら方英が自分一人で話を進めているから、絶対に効果が出ないだろう。方英は納得しないと思う。)

例(41)~(44)の「V+“不”+“来”」構造は「小売り価格」「効率」「水」「効果」という無情物の動きを表し、意志性がないため、「V+“不”+“来”」構造の前置動詞の“下”“出”“进”は無意志動詞として考えられる。例(41)(42)の「V+“不”+“来”」構造は“肯定”という推量を表す副詞と意味関係を結び、例(43)(44)の「V+“不”+“来”」構造は“絶対”という推量を表す副詞と意味関係を結んでいる。

この場合、推量を表す副詞の“肯定”“絶対”と共起する場合、無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造が終止形として機能することができるとされる。その裏付けとして、例(41)(42)の推量を表す副詞の“肯定”と、例(43)(44)の“絶対”を削除すると、次の例(41')~(44')のように不自然な表現になる。

(41')*一些菜贩表示，进货价就高，零售价下不来。

(42')*在小的企业里，每个员工的一举一动都有可能关系公司的生死存亡，如果公司内部有两名员工因为互相配合不好而闹矛盾，两个人都带着情绪工作，效率出不来。

(43')*就算刮风下雨，这里也不会有影响，防护措施做得好嘛，地面都是拱形的，水进不来。

(44')*因为就方英一个人在那里自说自话的，效果出不来，方英不会答应的。

例(41')~(44')の「V+“不”+“来”」は推量を表す副詞の“肯定”“絶対”と共起せずに述語

として機能しており、いずれも不自然な表現である。いわば、推量を表す副詞の“肯定”や“絶対”との共起が、無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造の構文的特徴の一つとして認められる。

このことから、推量を表す副詞の“肯定”“絶対”と共起する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造が終止形として機能することができる。

4節をまとめると、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は、副用語の“怎么都”と共起する文、仮定条件文の従属節、時間を表す副詞の“迟迟”と共起する文、推量を表す副詞の“肯定”“絶対”と共起する文の述部に生起しうる。

5 本章のまとめ

本章では、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造を研究対象として位置づけ、さらに「V+“得”+“来”」の場合と「V+“不”+“来”」の場合に分けて、「V+“得”/“不”+“来”」構造の構文的特徴について考察してきた。分析の結果を改めてまとめると、以下のようになる。

- ① 前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造には、使用できる文環境と使用できない文環境がある。
- ② 前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造は、疑問詞の“怎么”“哪里”“哪”と共起する疑問文、否定を表す副詞“没”“没有”“未必”と共起する文、時間を表す副詞“才”と共起する文、対義語の「V+“得”/“不”+“去”」構造や「V+“得”+“出”」構造と並列構造を構成する文に生起しうる。
- ③ 前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は、副用語の“怎么都”と共起する文、仮定条件文の従属節、時間を表す副詞の“迟迟”と共起する文、推量を表す副詞の“肯定”“絶対”と共起する文に生起しうる。

以上が本章のまとめである。本章では、「V+“得”/“不”+“来”」構造の構文的特徴を明らかにしたが、残される課題もある。

前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造には、なぜこのような構文的条件を必要とするのかという問題については、まだ明らかにしていない。考えられる理由としては、「V+“得”/“不”+“来”」構造は「認識の可能」であることに求められる。

「認識の可能」には常に話者が存在し、「実現可能かどうか」という話者の推測を表す。つまり、「V+“得”/“不”+“来”」構造には、常に話者の推測や意志が必要だと考えられる。

「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞は意志動詞が大半を占めたのも同じ理由だと考えられる。つまり、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造が成り立つためには、文脈に話者の推測や意志を表せる文環境が必要だからである。

そのため、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”+“来”」の場合、“怎么”“哪里”“哪”などの疑問詞との共起も、否定の意味を表す副詞の“没”“没有”“未必”との共起も話者の主張を示す役割を果たしているかもしれない。また、前置動詞が無意志動詞の「V+“不”+“来”」構造の構文的特徴として挙げた副用語の“怎么都”との共起も、時間を表す副詞の“迟迟”との共起も、推量を表す副詞の“肯定”“绝对”との共起も、すべては話者の主張を示すものとして捉えられる。つまり、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造が自然な表現であるために必要なのは、話者の主張や推測を示す文脈だと思われる。これを証明するためには、さらなる用例を集め、検証する必要があるため、また別の機会で述べることにする。

注

- 1) 本論文では不自然な表現に「*」をつける。
- 2) 対義語と共起する文とは、「V+“得”+“来”」と「V+“得”/“不”+“去”/“出”」と共起する文章のことを指す。この場合、「V+“得”+“来”」構造の前置動詞は、「V+“得”/“不”+“去”/“出”」構造の前置動詞と対義関係にある。さらに、「V+“得”+“来”」の“来”と“去”や“来”と“出”も対義関係である。この場合、“进得来出不了”などのような形式が挙げられる。
- 3) この場合、否定の意味を表す“没”や“没有”だけを削除すると、「V+“得”+“来”」を除いたその文自体が不自然な表現になるため、否定の意味と関係を結んでいる“再”なども削除する必要がある。
- 4) 「V+“得”/“不”+“去”」構造と「V+“得”/“不”+“出”」構造の前置動詞 V は、「V+“得”+“来”」構造の前置動詞と対義関係にある。この場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造の前置動詞は、方向を表す動詞しか見られないため、「V+“不”+“去”」構造と「V+“不”+“出”」構造の前置動詞は、反対の方向を示す動詞がほとんどである。いわば、ここでいう「V+“得”/“不”+“去”」構造と「V+“得”/“不”+“出”」構造は、その前置動詞が、「V+“得”+“来”」構造の前置動詞と対義関係にあるものだけを指す。それ以外の「V+“得”/“不”+“去”」構造と「V+“得”/“不”+“出”」構造は対象外とする。

第3章 「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関わりについて

1 はじめに

第1章では、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味・機能について考察し、第2章では、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」の構文的特点について考察してきた。この章では、「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関わりについて考察する。

中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造には、程度副詞と意味関係を結ぶ場合がある。しかし、すべての「V+“得”/“不”+“来”」構造が程度副詞と意味関係を結べるというわけではない。これと同様に、すべての程度副詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造と意味関係を結べるというわけでもない。さらに、具体的にどんな動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、程度副詞と意味関係を結ぶことが可能であるのか、またどんな程度副詞は「V+“得”/“不”+“来”」構造と意味を結ぶことが可能であるのかといった問題について、先行研究に示されたルールは十分とは言えない。そこで、本章では、この二つの問題の解明に向けて、「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関わりについて考察し、両者の意味関係のルールを示したい。

2 先行研究の問題点と本章の立場

「V+“得”/“不”+“来”」構造に関する研究は刘月华(1998)、安本真弓(2009)、丁飒飒(2017)などが挙げられる。安本真弓(2009)では、主に「V+“得”/“不”+“来”」構造の生起条件について考察し、中国語の可能表現の「“能”+V」構造との違いについて述べている。丁飒飒(2017)では、どんな動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞になりうるのかについて考察し、その意味・機能について述べている。「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関係性に関しては、安本真弓(2009)においても、丁飒飒(2017)においても、それに関する記述は見られない。

「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関係性について言及したのは、刘月华(1998)しかないようである。刘月华(1998: 59)では、「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関係性について、「表示融洽，可搭配的动词只有‘合、处、谈、说’等。动词前可以使用程度副词。」(仲が良いという意味を表し、前置動詞には“合”“处”“谈”“说”などが生起しうる。その動詞の前に程度副詞を使用することが可能である)と述べている。しかし、具体的に

どんな程度副詞を使用すること可能であるか、また“合”“处”“谈”“说”の以外に、どんな動詞が前置動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は、程度副詞と意味関係を結ぶことが可能であるのかという問題については言及していない。そこで、この章では、この二つの問題の解明に向けて、「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関係性について考察していく。

まず、一つ目の問題として、「V+“得”/“不”+“来”」の前に、どんな程度副詞を使用することが可能であるかという問題について、下記の例(1)(2)のような言語現象を無視してはならない。

(1)她们相貌惊人的相似，却非常合不来。(《西安晚报》2012年9月14日)(彼女たちの顔立ちは驚くほど似ているが、とてつもなく仲が悪い。)

(2)我们的性格有些合不来，我很感激你对我的好，但如果我们结婚，我怕你会后悔。(《人民日报》2001年7月2日)(私たちの性格はちょっと合わない。君がくれた優しさには感謝しているが、もし結婚することになったら、君が後悔するのではないかという心配がある。)

(1')她们相貌惊人的相似，非常合得来。

(2')*我们的性格有些合得来。

例(1)(2)における“合不来”は「V+“不”+“来”」構造として、程度副詞と意味関係を結んでいるにもかかわらず、例(1)(2)の“合不来”を、例(1')(2')のように肯定形の“合得来”に置き換えると、例(1')は自然な表現であるのに対し、例(2')は不自然な表現になる。というのは、程度副詞の“非常”と“有些”と関係があるように思われる。いわば、“合不来”は、程度副詞の“非常”と“有些”と意味関係を結ぶことが可能である。一方、その対義語の“合得来”は“非常”と意味関係を結ぶことが可能であるのに対し、“有些”と意味関係を結ぶことができない。このことから、「V+“得”+“来”」と意味関係を結ぶことが可能な程度副詞と、「V+“不”+“来”」と意味関係を結ぶことが可能な程度副詞の間には、ずれがあると認めなければならない。

つまり、「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関係性を明らかにするためには、上記の例(1)(2)のような「V+“得”+“来”」と「V+“不”+“来”」の違いについても視野に入れて考察する必要がある。そこで、本章では、刘月华(1998: 59)に挙げた“合”“处”“谈”“说”

を「付き合う」という意味を表す動詞としてみなし、次の3節にて、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関わりについて検討する。

次に、本章の解決すべき第二の問題として、“合”“处”“谈”“说”以外に、どんな動詞が前置動詞である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は、程度副詞と意味関係を結ぶことが可能であるのかについて、下記の例(3)のような用例が見られる。

(3)白百何出道的头几年，她一直很应付不来采访这件事。(《中国日报网》2017年4月24日)(白百何がデビューしたばかりの数年間、彼女はずっとインタビューということへの対応がとても苦手であった。)

例(3)の“应付不来”は「V+“得”/“不”+“来”」構造に当てはまり、程度副詞の“很”と意味関係を結んでいる。いわば、前置動詞が“应付”である場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は程度副詞と意味関係を結ぶことが可能である。このことからみれば、刘月华(1998: 59)に挙げた“合”“处”“谈”“说”などの動詞が前置動詞の「V+“得”/“不”+“来”」構造以外にも、程度副詞と共起できる「V+“得”/“不”+“来”」構造があると認められる。しかし、“合”“处”“谈”“说”以外に、具体的にどんな動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、程度副詞と意味関係を結ぶことが可能であるのかについて、未だ明らかにされていない。そこで、本章では、4節にて、“合”“处”“谈”“说”以外には、どんな動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、程度副詞と意味関係を結ぶことが可能であるのかについて考察する。

以上の二つの問題を解決するために、以下3節では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”/“不”+“来”」構造の程度副詞の分布について考察する。4節では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞以外の場合において、程度副詞と共起できる「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞の分布について考察する。5節ではまとめを行う。

3 Vが「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”/“不”+“来”」構造の程度副詞の分布

コーパスを調べたところ、程度副詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前に用いられる場

合、「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞は、主に“合”“处”“谈”“说”という「付き合う」という意味を表す動詞に分布している。いわば、「付き合う」という意味を表す動詞が前置動詞に立つ場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造は程度副詞と共起しやすいかもしれない。そのため、本節では、前置動詞Vが「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”/“不”+“来”」構造に焦点を絞り、この場合において「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関わりについて考察する。

また、2節で述べたように、「V+“得”+“来”」と「V+“不”+“来”」の間、意味関係を結ぶことが可能な程度副詞は全く同じであるというわけではないため、本節では、Vが「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”/“不”+“来”」構造の程度副詞の分布について次の三つの場合に分けて考察する。3.1では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」と意味関係を結ぶことが可能である程度副詞について考察する。3.2では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」と意味関係を結ぶことが可能である程度副詞について考察する。3.3では、両者と意味関係を結ぶことが可能である程度副詞の共通点と相違点について考察する。

3.1 「V+“得”+“来”」の場合

この節では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」がどんな程度副詞と意味関係を結ぶことが可能であるかどうかについて考察する。本章では、刘月华(1998:59)に挙げられた“合”“处”“谈”“说”の以外にも、“相处”“聊”なども「付き合う」という意味を表す動詞としてみなし、研究の対象とする。コーパスを調べてみたところ、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」は、程度副詞の“很”“特别”“非常”と意味関係を結ぶことが可能であると考えられる。以下では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“得”+“来”」とそれぞれの程度副詞との関わり合いについて考察する。

3.1.1 程度副詞の“很”と意味関係を結ぶ場合

この部分では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」は、程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能であるかどうかについて考察する。コーパスを調べたところ、程度副詞の“很”が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」の直前に使用される用例が見られる。つまり、程度副詞の“很”が「付き合う」という意味

を表す動詞の「V+“得”+“来”」と意味関係を結ぶことが可能である。これを証明するためには、すべての「付き合う」という意味を表す動詞が前置動詞に用いられる場合、「V+“得”+“来”」の直前に程度副詞の“很”が使用可能でなければならない。そこで、この部分では、それぞれの「付き合う」という意味を表す動詞が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」は程度副詞の“很”と共起できるかどうかについて考察する。

まず、用例を調べてみたところ、「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は、程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能である。その裏付けとして以下の用例が挙げられる。

- (4)在我刚上大学时,通过语言学习软件认识了一个克罗地亚朋友,她和我同龄,我们很聊得来。(《人民网》2019年4月8日)(私が大学に入学したばかりのとき、語学勉強のソフトウェアを通じて、あるクロアチア人と知り合った。彼女は私と同じ年齢で、私たちはとても話が合う。)
- (5)在中国读书的这段时间里,她交了很多中国朋友,由于文化相近,大家都很聊得来。(《人民网》2019年5月27日)(中国滞在中、彼女はたくさんの中国人の友達ができただ。文化も似ているところもあって、みんなとても話が合う。)
- (6)吕英发现现实中的他虽没有想象的帅气和幽默诙谐,但两人还是很聊得来。(《人民网》2002年12月18日)(吕英は、現実の彼は自分が思っているほど、ハンサムでユーモアのある人間ではないことに気づいた。それでも二人はとても話が合う。)
- (7)有的人聊两句你就知道很聊得来,有的人却不是这样。(《人民网》2009年9月25日)(ある人は少しだけ話ただけで、話の合う人間だと分かるが、そうでない人もいる。)

例(4)~(7)の「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”が用いられている。この場合、“聊得来”は、程度副詞の“很”と意味関係を結んでいる。いわば、「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”が前置動詞として機能する場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能であると認めなければならない。

次に、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞“合”である場合においても、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことができる。下記の例(8)~(11)

はその裏付けである。

- (8)虽然刚刚开学不久，崔同学已经明显感觉到与舍友们很合得来。(《人民网》2018年9月8日)(学校が始まったばかりだが、崔さんはもう明らかに、ルームメイトと仲良くなっていると感じた。)
- (9)周秀娜是双子座，跟我很合得来。(《人民网》2016年5月25日)(周秀奈は双子座で、私と相性がいい。)
- (10)她和他在工作中交集频繁，慢慢地，彼此觉得很合得来。(《人民网》2016年10月31日)(彼女と彼は仕事で、頻繁に交流し合う関係になり、徐々に、お互いは相性がいいと思うようになった。)
- (11)这也是为什么我们很合得来。(林国忠《揭秘不可估量的财富》2014)(これは私達が相性のいい理由でもある。)

例(8)~(11)の“合得来”は「V+“得”+“来”」構造として、程度副詞の“很”と意味関係を結んでいる。つまり、“合”という「付き合う」という意味を表す動詞が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は、程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能であると思われる。

さらに、「話す」や「語る」という意味を表す“谈”は「付き合う」という意味を表す動詞として機能し、「V+“得”+“来”」構造に使用することが可能である。この場合においても、程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能である。下記の例(12)~(15)はその証左として挙げておく。

- (12)两人很谈得来，成为朋友。(《福州晚报》2000年11月8日)(二人はとても話が合い、友人になった。)
- (13)我们都有辍学的经历，因此很谈得来。(《人民网》2004年9月6日)(私達は同じく学校を中退した経験があるから、話がよく合う。)
- (14)因为都有过失恋的经历，因为都还留恋着过去的感情，所以我与他很谈得来。(《人民网》2001年6月19日)(お互いに失恋した経験があり、お互いもまだ過去の恋に未練があるから、私は彼とはとても話が合う。)
- (15)敬托院有很多老年人，有共同话题，很谈得来。(《人民网》2013年12月27日)(老

人ホームには年寄りがたくさんいて、共通の話題もあり、とても話が合う。)

例(12)~(15)の“谈得来”は「付き合う」という意味を表す動詞として機能し、程度副詞の“很”と意味関係を結んでいる。このことから、「付き合う」という意味を表す動詞の“谈”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

また、「話す」や「語る」という意味を表す“说”という動詞も「付き合う」という意味を表す動詞の役割を果たす場合がある。この場合、次の例(16)~(19)に示すように、“说”が「V+“得”+“来”」構造のVとして機能する場合、程度副詞の“很”と共起することが可能である。

(16)20 天的时间，俩人感到很说得来。(《人民网》2002年11月22日)(20日の間、二人は、お互いにとても話が合うと感じた。)

(17)两人有相同的爱好，很说得来。(《人民网》2004年11月2日)(二人は、同じ趣味を持ち、とても話が合う。)

(18)他和罗玉子很说得来，常常说着说着就大笑起来，收也收不住。(殷健灵《游不走的鱼》2004)(彼は罗玉子ととても話が合い、二人はよく話しているうちに大笑いになってしまうし、やめようとしても笑いが収まらない。)

(19)秦桂贞很善良，和蓝苹很说得来，经常照顾蓝苹的生活。(《人民网》2012年4月6日)(秦桂贞はとても優しいし、蓝苹とはよく話があい、よく蓝苹の生活の面倒を見てくれている。)

例(16)~(19)の“说”は「付き合う」という意味を表す動詞としての役割を果たし、“说得来”という「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“很”と意味関係を結んでいる。このことから、「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞として機能する場合、程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能であると認めなければならない。

さらに、中国語の“处”も「付き合う」という意味を表す動詞としての役割を果たすことが可能である。コーパスを調べた結果、“处”が「V+“得”+“来”」構造の前置として機能する場合、その直前に程度副詞の“很”を入れることが可能である。次の例(20)(21)(22)はそ

の裏付けである。

(20)我看你和沈晓雪很处得来。(筱禾《彩绘坊》2019)(君は沈晓雪とはすごく話が合うと見受けしました。)

(21)刘老板他们俩很处得来。(时广《识宝镜》2018)(刘社長とその連れはとても話が合う。)

(22)这期间两个儿子回来过几回，他们也很喜欢这个刘哥，而且哥仨很处得来，刘哥手巧，总是能给两个弟弟做出烟口袋、钥匙链，两个弟弟每次回来也都给刘哥带上一一些物品，三个人处得简直就是一个人。(曹保明《棺材匠》2017)(この間、二人の息子は何回か帰ってきたことがあり、彼らも兄の刘さんのことが好きで、三人はとても話が合う。兄の刘さんは手先が器用で、いつも二人の弟のために、タバコのポケットとか、キーホルダーとかを作っていた。二人の弟も、帰ってくるたびに兄の刘さんにお土産を持ってくる。三人はまるで一心同体である。)

例(20)(21)(22)における“处得来”という「V+“得”+“来”」構造は、程度副詞の“很”と意味関係を結んでいる。つまり、「付き合う」という意味を表す動詞の“处”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞である場合、程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

それから、“处”と似通った意味を表す“相处”も「付き合う」という意味を表す動詞であると思われる。“处”と同じように、“相处”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能である。その証拠として、下記の例(23)(24)(25)を挙げておく。

(23)绵绵的性格不错，我们很相处得来。(梁不凡《王牌大高手》2019)(绵绵は性格がいいから、私たちはとても話が合う。)

(24)她与你倒是很相处得来，这也许是我惟一安慰的地方。(亦舒《独身女人》1986)(彼女は割に君ととても話が合い、それが私の唯一の慰めである。)

(25)刘夕瑶和郝雅莉俩人就是很相处得来，彼此也都挺关心对方。(恋赤北《今后开始喜欢你》2019)(刘夕瑶と郝雅莉はとにかくとても仲が良く、お互いに気遣っている。)

例(23)(24)(25)の“相处”も「付き合う」という意味を表す動詞として「V+“得”+“来”」構造に使われており、“相处得来”は程度副詞の“很”と意味関係を結んでいる。このことから、「付き合う」という意味を表す動詞の“处”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

以上のように、「付き合う」という意味を表す動詞としての役割を持つ動詞の“聊”“合”“谈”“说”“处”“相处”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能であるという結果を得られた。このことから、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造は、程度副詞の“很”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

3.1.2 程度副詞の“特别”と意味関係を結ぶ場合

この部分では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“得”+“来”」は、“特别”という程度副詞と意味関係を結ぶことが可能であるかどうかについて考察する²⁾。

コーパスを調べてみると、程度副詞の“特别”が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」の直前に使用される用例が見られる。このことから、程度副詞の“特别”が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」と意味関係を結ぶことが可能であると思われる。その証拠として、次の(26)～(29)のような「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に立ち、程度副詞の“特别”と意味関係を結んでいる用例が挙げられる。

(26)这个女生不仅人长得漂亮，而且和小吴还特别聊得来。(《人民网》2020年5月6日)

(この女の子はきれいだけでなく、吴さんとも特に話が合う。)

(27)女方表示：“我和他特别聊得来。”(《人民网》2019年1月30日)(その女性は「彼

とは特に話が合う」と述べた。)

(28)马林泉说：“我们都喜欢猎户座，所以特别聊得来。”(《人民网》2019年7月28

日)(「私たちはオリオン座が好きだから、とても話が合う」と马林泉は言った。)

(29)他也和片中演他姐姐的张子枫特别聊得来。(《人民网》2020年8月3日)(彼も映画

の中でお姉さんを演じている張子楓ととても話が合う。)

例(26)~(29)の「V+“得”+“来”」構造には、「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”が使われており、その直前に、程度副詞の“特别”が使われている。このことから、「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“特别”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

次に、「付き合う」という意味を表す動詞の“谈”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、程度副詞の“特别”と意味関係を結ぶことが可能である。下記の例(30)~(33)はその裏付けである。

(30)我们在一次活动上认识，特别谈得来。(《人民网》2018年12月15日)(私たちはあるイベントで知り合って、特に話が合う。)

(31)我们这一帮女人们都特别开朗活跃，都爱跳广场舞，也特别谈得来，彼此都很要好。(《人民网》2020年3月20日)(私たちのこの女性グループは、特に元気で明るく、「広場ダンス」が大好きで、特に話が合い、皆仲良くしている。)

(32)她们表示，虽然每人性格迥异，但对音乐都有着强烈的热爱，所以特别谈得来。(《人民网》2014年3月13日)(それぞれ性格は違うものの、音楽への愛が強いもので、特に話が合うと彼女たちは言う。)

(33)在这些店主中，开理发店的仙居人小徐心地善良，和老人特别谈得来。(《人民网》2015年8月12日)(これらの店主の中で、理髪店を経営する仙居人は心が優しく、老人と特に話が合う。)

例(30)~(33)の「V+“得”+“来”」構造には、「付き合う」という意味を表す動詞の“谈”が使われており、その直前に、程度副詞の“特别”が使われている。このことから、「付き合う」という意味を表す動詞の“谈”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“特别”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

それから、「付き合う」という意味を表す動詞の“合”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、程度副詞の“特别”と意味関係を結ぶことが可能である。その証左として以下の用例が挙げられる。

(34)直到小男孩上初一时，妈妈再婚了，新爸爸十分优秀，而且他们俩也特别合得来。(《人民网》2015年9月24日)(その男の子が中学一年生になるころ、母親が再婚

し、新しい父親も優秀な方で、二人は特に仲が良かった。)

(35)因为两人性格差不多，音乐风格也比较接近，所以他们特别合得来。(《人民网》2007年7月19日)(二人は性格が似ていて、音楽のスタイルも似ているので、特に相性が良い。)

(36)都是文体“骨干”，性格上也特别合得来。(《人民网》2017年9月10日)(彼らは、文芸と体育の「中堅」であり、性格的にも相性がいい。)

例(34)(35)(36)の場合、「付き合う」という意味を表す動詞の“合”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に立ち、程度副詞の“特別”と意味関係を結んでいる。いわば、「付き合う」という意味を表す動詞の“合”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“特別”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

さらに、「付き合う」という意味を表す動詞の“说”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、程度副詞の“特別”と意味関係を結ぶことが可能である。次の用例はその裏付けである。

(37)我们谈思想、谈文学，特别说得来。(2004年4月22日《中国青年报》)(私たちは思想や文学の話をしていて、特に話が合う。)

(38)赵玲和小丹在一个办公室，小丹大学毕业，才工作了两年，赵玲比小丹大8岁，却和小丹特别说得来。(《成都商报》2013年9月7日)(赵玲と丹さんは、同じオフィスに働いており、丹さんは大学卒業後、仕事を始めてから2年が経ったばかりであり、赵玲は丹さんより8歳も年上であるにもかかわらず、赵玲は丹さんと特に話が合う。)

(39)他们两个，一个是不愿当面说奉承话，一个是喜闻过而不喜闻功，因此反倒特别说得来。(吴越《特殊少将的特殊使命》1998)(彼ら二人のうち、一人は人の前でお世辞を言いたがらず、もう一人は長所よりも短所を聞きたがるので、かえって話が合う。)

例(37)(38)(39)の場合、「付き合う」という意味を表す動詞の“说”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に立ち、程度副詞の“特別”と意味関係を結んでいる。このことから、「付き合う」という意味を表す動詞の“说”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程

度副詞の“特別”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

以上のことから、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」は、程度副詞の“特別”と意味関係を結ぶことが可能であると認められる。

3.1.3 程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶ場合

用例を調べてみると、程度副詞の“非常”は、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“得”+“来”」と意味関係を結ぶことが可能であると思われる。次の(40)～(43)のような「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に使われる用例はその裏付けとして挙げられる。

(40)聊了几天后陈小姐就突然发觉，这个网友对宠物狗特别了解，而且跟自己非常聊得来。(《人民网》2014年12月18日)(何日間か話をしてみて、陈さんは急に気づいた。このネットで知り合った人は、ペットの犬に特に詳しいし、自分と非常に話が合う。)

(41)2011年年底，阿强添加阿玲为好友，两人非常聊得来，私下经常约会。(《人民网》2015年1月2日)(2011年末、强さんは玲さんをフレンド登録した。二人はとても話が合い、プライベートでよくデートをしていた。)

(42)我们认识时间不久，但非常聊得来。(《新华网》2015年12月21日)(私たちは知り合って間もないが、とても話が合う。)

(43)张嘉译也称赞王晓晨本身是很阳光的女孩，跟剧本里角色很像，二人非常聊得来。(《人民网》2016年4月21日)(张嘉译も、王晓晨ももともとはとても明るい女の子と褒められており、脚本の中の役柄とも似ていて、二人はとても話が合う。)

例(40)～(43)の“聊”は「付き合う」という意味を表す動詞としての役割を果たしており、「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に使われている。この場合、“聊得来”は程度副詞の“非常”と意味関係を結んでいる。いわば、「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

次に、「付き合う」という意味を表す動詞の“谈”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことが可能である。下記の例(44)～(47)

はその裏付けである。

- (44)我们每周在固定的时间一起练习舞蹈，我因此交到了几个非常谈得来的朋友。(《人民网》2018年5月29日)(私たちは毎週決まった時間に一緒にダンスの練習をしてきた。その結果、何人かとても話の合う友人ができた。)
- (45)上世纪80年代经过朋友介绍，我认识了谢晋导演，当时我们一见如故，非常谈得来。(《人民网》2008年10月26日)(1980年代に友人の紹介で、谢晋監督と知り合った。その時は古い友人と再会したように、特に話が合う。)
- (46)“blue”有位闺蜜，两人在兴趣爱好穿衣风格方面都非常谈得来。(《人民网》2013年3月20日)(「blue」には親友がいて、二人は趣味やファッションの話についてとても話が合う。)
- (47)当时我们先是在网上聊，后来打电话聊，非常谈得来。(海攀·一鸣《我在美军航母上的8年》2013)(その時は、最初はネットで、後に電話で話をして、とても話が合う。)

例(44)～(47)の“谈”は「付き合う」という意味を表す動詞としての役割を果たし、「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に使われている。この場合、“谈得来”は程度副詞の“非常”と意味関係を結んでいる。このことから、「付き合う」という意味を表す動詞の“谈”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

それから、次の例(48)～(51)に示すように、「付き合う」という意味を表す動詞の“合”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造も、程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことが可能である。

- (48)唐嫣和李敏镐都觉得彼此性格很像，所以非常合得来。(《新华网》2016年7月1日)(お互いの性格がとても似ているから、とても話が合うと、唐嫣もイ・ミンホも思っている。)
- (49)饭后，时光陪着丹丹一起玩儿，两人非常合得来。(《人民网》2016年12月1日)(食事の後、时光は丹丹と一緒に遊んでいる。二人はとても気が合う。)
- (50)进大学后，有一位关系很好的学长，年纪只比我大20天，同我都是巨蟹座，性格非

當合得来。(辛晓阳《有些人，在时光里》2016)(大学に入った頃、20日しか年の離れていない親しい先輩がいて、お互いに蟹座だったので、性格はとても合う。)

(51)水瓶座与双子座、天秤座非常當合得来。(高屹《观音闻色：音乐时光机》2014)(水瓶座は双子座や天秤座と非常に相性が良い。)

例(48)~(51)の“合”は「付き合う」という意味を表す動詞として、「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に使われている。この場合、“合得来”という「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“非常”と意味関係を結んでいる。いわば、「付き合う」という意味を表す動詞の“合”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことができる。

さらに、「付き合う」という意味を表す動詞の“说”が「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことが可能である。

(52)当时两人一同回到店里，非常说得来。(曾胡《警世通言赏析：现代白话本》1992)(その時、二人は一緒にお店に戻ってきて、とても話が合う。)

(53)奶奶把我母亲当自己的闺女，母亲也把奶奶当自己的母亲一样，两个人一有时间就会在一起唠嗑，家长里短，无话不说，而且非常说得来。(范景来《难忘那一家人》2020)(父側の祖母は、母を自分の娘として、母も祖母を自分の母親として慕い、二人は時間があれば、おしゃべりをする。お家の話や村の話など、何でも話し合う。それにとっても話が合う。)

(54)俩人的电影理念很相似，非常说得来。(胡柚《被前任看见一个人吃火锅》2020)(あの二人の映画の理念が非常に似ており、とても話が合う。)

例(52)(53)(54)の“说”は「付き合う」という意味を表す動詞として、「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に使われている。この場合、“说得来”という「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“非常”と意味関係を結んでいる。いわば、「付き合う」という意味を表す動詞の“说”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことができる。

それから、「付き合う」という意味を表す動詞の“处”が「V+“得”+“来”」構造の前置

動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことが可能である。

(55)和尚看到刘震云倒是没有再说什么, 毕竟他和这个家伙非常处得来。(孤帆远影《玄门第一相师》2020)(僧侶は刘震云を見て、これ以上は何も言わなかった。なにせ僧侶はこの男ととても話が合うからである。)

(56)擅长写小孩子, 是因为她欣赏小孩子, 喜欢观察小孩子, 而且跟小孩子非常处得来。(林海音《林海音儿童文学精品集》2015)(子どものことを書くのが得意なのは、彼女は子どものことが好きで、また子供を観察するのが好きで、それに子どもと話が合うからである。)

(57)通常我与其他人处得也都不错, 但很显然我与劳尔就非常处得来。(《足球报》2001年9月25日)(普段は他の人とよく付き合っているが、明らかにラウルとはとても話が合う。)

例(55)(56)(57)の“处”は「付き合う」という意味を表す動詞として、「V+“得”+“来”」構造の前置動詞に使われている。この場合、“处得来”という「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“非常”と意味関係を結んでいる。いわば、「付き合う」という意味を表す動詞の“处”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことができる。

つまり、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造は、程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

以上のように、3.1 をまとめると、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造は、程度副詞の“很”“特别”“非常”と意味関係を結ぶことが可能である。

3.2 「V+“不”+“来”」の場合

前節では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造が、どんな程度副詞と共起できるのかについて考察してきた。この節では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」構造がどんな程度副詞と意味関係を結ぶことが可能かどうかについて考察する。

コーパスを調べてみたところ、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞の“特別”“非常”“有些”“有点”と意味関係を結ぶことが可能であると思われる。そのため、以下では、程度副詞の“特別”と意味関係を結ぶ場合、程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶ場合、程度副詞の“有些”と意味関係を結ぶ場合、程度副詞の“有点”と意味関係を結ぶ場合という四つの場合に分けて、「V+“不”+“来”」構造と意味関係を結ぶことが可能な程度副詞について考察する。

3.2.1 程度副詞の“特別”と意味関係を結ぶ場合

用例を調べたところ、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“不”+“来”」は、程度副詞の“特別”と共起することが可能である。その裏付けとして、以下の例(58)～(61)が挙げられる。

(58)例如你发现你跟某个家人特别处不来，你就应该尽量别跟他单独相处。(韩良露《占星合盘的吸引力法则》2019)(もし家族の一員と特に相性が悪いと感じた場合、できる限りその人と二人きりにならないようにしてみてください。)

(59)不知道为什么，我跟博雅特别相处不来，或许就是在征战的时候留下的结。(陈小错《帝奴》2018)(なぜだかは知らないけれど、私と博雅は特に話が合わない。多分征伐の時、二人の間に小さなひびができたかもしれない。)

(60)那么多女生，每个人性格都不一样，碰到特别合不来的就惨了。(《人民网》2015年12月19日)(あれほどたくさんの女子がいて、みんな性格が違うし、特別に話の合わない人に会ったら、大変なことになる。)

(61)因为从小到大我俩都特别聊不来，一两句话就能冷场，说多了会吵起来，根本没有办法正常交流，所以保持沉默是最好的办法。(令九舟《婚后伤恋》2019)(子供の頃から、私たちは特に話が合わない。ちょっと会話を交わしただけで冷めた空気になるし、話しすぎると喧嘩になる。まともなコミュニケーションが取れない。だから、沈黙をキープするのが一番の方法だ。)

例(58)～(61)の「V+“不”+“来”」構造の前置動詞には「付き合う」という意味を表す動詞の“处”“相处”“合”“聊”が使われており、「V+“不”+“来”」構造の“处不来”“相处不来”“合不来”“聊不来”は程度副詞の“特別”と意味関係を結んでいる。

このことから、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞の“特別”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

3.2.2 程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶ場合

中国語の程度副詞の“非常”は、「非常に」「特に」というような意味を表す程度副詞である。この部分では、「V+“不”+“来”」が程度副詞の“非常”と共起できるかどうかについて考察する。下記の例(62)～(65)に示すように、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は、“非常”という程度副詞と意味関係を結ぶことが可能である。

(62)她们相貌惊人的相似，却非常合不来。(例(1)を再掲)(彼女たちの顔立ちは驚くほど似ているが、とてつもなく仲が悪い。)

(63)只是有一点纪精微和她非常聊不来，因为那小姑娘经常拉着她聊沈世林的事情，每次听到她无比爱慕沈世林的语气出来后，纪精微就觉得哪儿哪儿都不舒服。(旧月安好《春风也曾笑我》2018)(ただあることに関しては、纪精微と彼女はとても話があわない。それは彼女がよく、纪精微に沈世林の話をするからである。沈世林を慕っている彼女の口調を聞くたびに、纪精微はどこか不快に感じていた。)

(64)一共四个，虽然是同一个寝室的，和马峰算是接触最近的，但是关系非常不好，非常相处不来。(张天宇《业余侠》2019)(合わせて四人で、寮も同じ部屋で、私は、马峰とは一番よく連絡を取っている身近な存在ではあるが、马峰と非常に仲が悪く、非常に話が合わない。)

(65)在朝廷中，张缙与一个名叫何敬容的非常处不来。(《长沙晚报》2006年2月5日)(朝廷では、张缙は何敬容という人とは、非常に仲が悪い。)

例(62)～(65)の「V+“不”+“来”」構造には、「付き合う」という意味を表す動詞の“合”“聊”“相处”“处”が使われており、“合不来”“聊不来”“相处不来”“处不来”という「V+“不”+“来”」構造は程度副詞の“非常”と意味関係を結んでいる。

このことから、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」は、程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

3.2.3 程度副詞の“有些”と意味関係を結ぶ場合

中国語の“有些”は、日本語の「すこし」「多少」「ちょっと」と似通った意味を表す副詞である。この部分では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」構造が程度副詞の“有些”と意味関係を結ぶことが可能かどうかについて考察する。

用例を観察した結果、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞の“有些”と共起することが可能である。以下の用例はその裏付けである。

(66)我们的性格有些合不来，我很感激你对我的好，但如果我们结婚，我怕你会后悔。

(例(2)を再掲)(私たちの性格はちょっと合わないのだ。君がくれた優しさに感謝はしているが、でももし結婚することになったら、君が後悔するのではないかと心配だ。)

(67)太子一般都拥有自己的“私人”对父亲的“私人”不太感冒，因此顺宗还在做太子的时候，跟俱文珍就有些合不来。(何文韬《大唐帝国的黄昏》2008)(皇太子は普通自分の「私人」(自分だけの使用人)を持っていて、父の「私人」をあまり気にしていないため、順宗がまだ皇太子の頃は、俱文珍とはあまり仲が良くなかった。)

(68)我觉得跟潇潇有些谈不来。(谭佳宾《为什么孩子不听话》2018)(私は潇潇とはちょっと話が合わない。)

(69)如胶似漆的甜蜜日子再次归于平淡，汪女士又一次发现和现任丈夫有些谈不来。(《三秦都市报》2018年2月23日)(離れられないほどの甘い日々は再び平淡な日常に戻り、汪さんはもう一度、現在の夫とはちょっと話が合わないと気づいた。)

例(66)~(69)の「V+“不”+“来”」構造には、「付き合う」という意味を表す動詞の“合”“談”が使われており、“合不来”“谈不来”という「V+“不”+“来”」構造は程度副詞の“有些”と意味関係を結んでいる。

このことからみれば、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」は、程度副詞の“有些”と意味関係を結ぶことが可能であると認められる。

3.2.4 程度副詞の“有点”と意味関係を結ぶ場合

前述した程度副詞の“有些”と似通った意味を表す程度副詞として、“有点”が挙げられる。

“有些”は前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」と意味関係を結ぶことが可能であれば、“有点”も同じ傾向にある可能性が高い。そこで、この部分では、「V+“不”+“来”」構造が程度副詞の“有点”と意味関係を結ぶことが可能であるかどうかについて考察する。

下記の例(70)~(73)に示すように、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞の“有点”と意味関係を結ぶことが可能であると思われる。

(70)我感觉, 小张和小李和我们有点聊不来, 就把他俩移出群了。(李佩云《全村拆迁没有我》2020)(張さんと李さんは、私たちとちょっと話が合わない気がしたので、あの二人をこのチャットグループから削除した。)

(71)不行, 商姑娘境界太高, 有点聊不来。(任秋溟《这个刺客有毛病》2020)(いや、商さんはレベルが高すぎて、ちょっと話が合わない。)

(72)但我和他年龄太接近, 性格有点合不来。(刘凤霞《她在海那边: 中国留美女性生存实录》2005)(しかし彼と私は歳が近すぎて性格がちょっと合わない。)

(73)赵廷仅仅在一周之内就发现他跟这些人好像有点谈不来。(接卡口《托身白刃里, 浪迹红尘中》2018)(赵廷は、わずか一週間で、この人たちとはちょっと話が合わないと感じた。)

例(70)~(73)のV+“不”+“来”構造に、「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”“合”“谈”が前置動詞としての役割を果たしている。“聊不来”“合不来”“谈不来”という「V+“不”+“来”」構造は程度副詞の“有点”と意味関係を結んでいる。このことから、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞の“有点”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

つまり、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞の“特别”“非常”“有些”“有点”と意味関係を結ぶことが可能である。

3.3「V+“得”+“来”」構造と「V+“不”+“来”」構造と共起可能な程度副詞の共通点と相違点

以上では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造と意味関係を結ぶことが可能な程度副詞と、「V+“不”+“来”」構造と意味関係を結ぶこと

が可能な程度副詞に分けて考察してきた。

この節では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関わりの全容を解明するために、「V+“得”+“来”」構造とも「V+“不”+“来”」構造とも共起できる程度副詞、「V+“得”+“来”」構造としか共起できない程度副詞、「V+“不”+“来”」構造としか共起できない程度副詞に分けて考察し、その全容を明らかにする。

3.3.1 「V+“得”+“来”」構造とも「V+“不”+“来”」構造とも共起できる程度副詞

この部分では、「V+“得”+“来”」構造とも「V+“不”+“来”」構造とも意味関係を結ぶことが可能な程度副詞について考察する。3.1 と 3.2 の分析結果に基づいて言えば、程度副詞の“非常”“特別”は「V+“得”+“来”」構造とも「V+“不”+“来”」構造とも共起できると思われる。

まず、“非常”という程度副詞は、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造とも「V+“不”+“来”」構造とも意味関係を結ぶことが可能である。その裏付けとして以下の用例を挙げておく。

- (74)聊了几天后陈小姐就突然发觉,这个网友对宠物狗特别了解,而且跟自己非常聊得来。(例(34)を再掲)(何日間話をしてみて、陈さんは急に気づいた。このネットで知り合った人は、特にペットの犬に特に詳しいし、自分と非常に話が合う。)
- (75)唐嫣和李敏镐都觉得彼此性格很像,所以非常合得来。(例(48)を再掲)(お互いの性格がとても似ているから、とても話が合うと、唐嫣もイ・ミンホも思っている。)
- (76)只是有一点纪精微和她非常聊不来,因为那小姑娘经常拉着她聊沈世林的事情,每次听到她无比爱慕沈世林的语气出来后,纪精微就觉得哪儿哪儿都不舒服。(例(63)を再掲)(ただあることに関しては、纪精微と彼女はとても話が合わない。それは彼女がよく、纪精微に沈世林の話をするからである。沈世林を慕っている彼女の口調を聞くたびに、纪精微はどこか不快に感じていた。)
- (77)她们相貌惊人的相似,却非常合不来。(例(1)を再掲)(彼女たちの顔立ちは驚くほど似ているが、とてつもなく仲が悪い。)

例(74)(75)の「V+“得”+“来”」構造の前置動詞には、「付き合う」という意味を表す動

詞の“聊”“合”が使われており、例(76)(77)の「V+“不”+“来”」構造にも、「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”“合”は前置動詞の役割を果たしており、例(74)(75)の「V+“得”+“来”」構造も例(76)(77)の「V+“不”+“来”」構造も、程度副詞の“非常”と意味関係を結んでいる。

このことからみれば、「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造も「V+“不”+“来”」構造も、程度副詞の“非常”と意味関係を結ぶことが可能であると認めなければならない。

次に、程度副詞の“特別”も、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造とも「V+“不”+“来”」構造とも意味関係を結ぶことが可能であると思われる。次の(78)～(81)はその証左として挙げられる。

(78)女方表示：“我和他特别聊得来。”(例(27)を再掲)(女性は「彼とは特に話が合う」と述べた。)

(79)因为两人性格差不多，音乐风格也比较接近，所以他们特别合得来。(例(35)を再掲)(二人は性格が似ていて、音楽のスタイルも似ているので、特に相性が良い。)

(80)因为从小到大我俩都特别聊不来，一两句话就能冷场，说多了会吵起来，根本没有办法正常交流，所以保持沉默是最好的办法。(例(61)を再掲)(子供の頃から、私たちは特に話が合わない。ちょっと会話を交わしただけで冷めた空気になるし、話しすぎると喧嘩になる。まともなコミュニケーションが取れない。だから、沈黙をキープするのが一番の方法だ。)

(81)那时候貌似张翰跟她还不熟，不仅不熟还特别合不来。(《人民网》2015年7月6日)(あの頃、張翰はまだ彼女と親しくないみたいで、それにすごく仲が悪い。)

例(78)(79)の「V+“得”+“来”」構造には、「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”“合”が使われており、例(80)(81)の「V+“不”+“来”」構造にも、同じく「付き合う」という意味を表す動詞の“聊”“合”が前置動詞として機能している。この場合、“聊得来”“合得来”という「V+“得”+“来”」構造も、“聊不来”“合不来”という「V+“不”+“来”」構造も、程度副詞の“特別”と意味関係を結んでいる。

つまり、「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造も、「V+“不”+“来”」構造も、程度副詞の“特別”と意味関係を結ぶことが可能であると認めなければならない。

ない。

この部分をまとめると、程度副詞“非常”“特別”は、「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造とも、「V+“不”+“来”」構造とも意味関係を結ぶことが可能である。

3.3.2 「V+“得”+“来”」構造としか共起できない程度副詞

この部分では、「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造としか共起できない程度副詞について考察する。

用例を観察した結果、程度副詞の“很”は「V+“得”+“来”」構造と意味関係を結ぶことが可能であるのに対し、「V+“不”+“来”」構造とその意味関係を結ぶことができないと思われる。以下の用例はその裏付けである。

(82)因为都有过失恋的经历,因为都还留恋着过去的感情,所以我与他很谈得来。(例(14)

を再掲)(お互いに失恋した経験があり、お互いもまだ過去の恋に未練があるから、私は彼とはとても話が合う。)

(82)*因为都有过失恋的经历,因为都还留恋着过去的感情,所以我与他很谈不来。

(82'')因为都有过失恋的经历,因为都还留恋着过去的感情,所以我与他谈不来。

(83)我看你和沈晓雪很处得来。(例(20)を再掲)(沈晓雪とはすごく話があうと見受けする。)

(83)*我看你和沈晓雪很处不来。

(83'')我看你和沈晓雪处不来。

例(82)(83)における“谈得来”“处得来”という「V+“得”+“来”」構造は程度副詞の“很”と意味関係を結んでいる。この場合、例(82)(83)の「V+“得”+“来”」構造を“谈不来”“处不来”という「V+“不”+“来”」構造に置き換えると、例(82')(83')のように不自然な表現になる。さらに、例(82')(83')が不自然というのは、もともとこの文章の意味には相応しくないというわけではなく、例(82')(83')にある程度副詞の“很”を削除すると、例(82'')(83'')のように自然な表現になる。いわば、例(82')(83')が不自然であるというのは、“谈不来”“处不来”自体が不自然ではなく、「V+“不”+“来”」構造が程度副詞の“很”と共起しているから、不自然な表現になったと考えられる。

以上のことから、程度副詞の“很”は「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造としか共起できないといえる。

3.3.3 「V+“不”+“来”」構造としか共起できない程度副詞

この部分では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」構造としか共起できない程度副詞について考察する。用例を観察した結果、「V+“不”+“来”」構造とは意味関係を結ぶことが可能であるが、「V+“得”+“来”」構造とは意味関係を結ぶことができない程度副詞として、“有些”“有点”などが挙げられる。

まず、程度副詞の“有些”は、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造と共起することができず、「V+“不”+“来”」構造としか共起できないと思われる。下記の用例はその裏付けである。

(84)我们的性格有些合不来，我很感激你对我的好，但如果我们结婚，我怕你会后悔。

(例(2)を再掲)(性格は多少対立していますし、親身になってくれるのはありがたいのですが、結婚したら後悔するのではないかと心配です。)

(84')*我们的性格有些合得来。

(84'')我们的性格合得来。

(85)我觉得跟潇潇有些谈不来。(例(68)を再掲)(潇潇とは仲良くなれそうにない。)

(85')*我觉得跟潇潇有些谈得来。

(85'')我觉得跟潇潇谈得来。

例(84)(85)の“合不来”“谈不来”という「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞の“有些”と意味関係を結んでいる。この場合、「V+“不”+“来”」を“谈得来”“处得来”に置き換えると、例(84')(85')のように不自然な表現になる。さらに、例(84')(85')における“有些”を削除すると、例(84'')(85'')のように自然な表現になるということから、例(84')(85')が不自然であるのは、“谈得来”“处得来”という「V+“得”+“来”」構造が程度副詞の“有些”と共起しているからである。

このことから、程度副詞の“有些”は前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」構造としか共起できないといえる。

また、コーパスを調べたところ、程度副詞の“有点”も前置動詞が「付き合う」という意

味を表す動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造としか共起できないようである。下記の用例はその裏付けである。

(86)我感觉，小张和小李和我们有点聊不来，就把他俩移出群了。(例(70)を再掲)(張さんと李さんは、私たちとちょっと話が合わない気がしたので、あの二人をこのチャットグループから削除した。)

(86')*感觉，小张和小李和我们有点聊得来。

(86'')感觉，小张和小李和我们聊得来。

(87)赵廷仅仅在一周之内就发现他跟这些人好像有点谈不来。(例(73)を再掲)(赵廷は、わずか一週間で、この人たちとはちょっと話が合わないと気づいた。)

(87')*赵廷仅仅在一周之内就发现他跟这些人好像有点谈得来。

(87'')赵廷仅仅在一周之内就发现他跟这些人好像谈得来。

例(86)(87)の“聊不来”“谈不来”は程度副詞の“有点”と意味関係を結んでいる。この場合においても、「V+“不”+“来”」構造を“聊得来”“谈得来”に置き換えると、例(86')(87')のように不自然な表現になる。また、“有些”を削除すると、例(86'')(87'')のように、“聊得来”“谈得来”が自然な表現になることから、“聊得来”“谈得来”は、程度副詞の“有点”と共起しないと思われる。

以上のことから、程度副詞の“有点”は「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」構造としか共起できないといえる。

3節をまとめると、程度副詞の“非常”“特别”は、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造とも「V+“不”+“来”」構造とも意味関係を結ぶことが可能である。程度副詞の“很”は前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造としか共起できない。程度副詞の“有些”“有点”は前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」構造としか共起できない。

4 程度副詞と共起できる「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞の分布

前節では、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”/“不”+“来”」構造がどんな程度副詞と共起できるのかという問題の解明に向けて考察してきた。前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“得”+“来”」構造と「V+“不”+

“来”構造と共起できる程度副詞は異なる分布をなしていることが判明した。本節では、視点を変え、「付き合う」という意味を表す動詞以外に、程度副詞と共起できる「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞はどのように分布しているのかという問題について考察し、先行研究の補足を行う。

実際の用例を調べてみると、程度副詞と意味関係を結んでいる「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞は、約八割が前節に論じた「付き合う」という意味を表す動詞であり、残りの二割は「V+“不”+“来”」構造に集中している。用例を調べた結果、程度副詞と意味関係を結ぶことが可能であるのは、前置動詞が“回”である場合の「V+“不”+“来”」構造、前置動詞が“干”である場合の「V+“不”+“来”」構造と前置動詞が“应付”である場合の「V+“不”+“来”」構造である。以下では、この三つの場合に分けて、それぞれが程度副詞との関わりについて考察する。

4.1 前置動詞が“回”の「V+“不”+“来”」構造の場合

中国語の“回”は「戻る」という意味を表す動詞であり、移動の意味を表す動詞である。用例を調べてみると、前置動詞が移動を表す動詞の“回”である場合、「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞の“有点”“有些”と共起することが可能である。下記の例(88)(89)(90)はその裏付けとして挙げられる。

(88)后面有点回不来了，前面好像冲得太快了，今天压力有点大。(《人民网》2016年8月10日)(最後のところは、ちょっと戻れないみたいで、前半が急すぎたかもしれない。今日は、ちょっとプレッシャーが重い。)

(89)南昌的思想还在宏观的世界里，猛一听陈卓然提到某人的命运，有点回不来，虽然这人是身边的至亲，但因是至亲，就不会想到“命运”这个词。(王安忆《启蒙时代》2007)(「南昌」の思想は、まだマクロの世界にあるが、陈卓然が誰かの運命について語るのを聞くと、ちょっと戻れない気がして、この人が自分の肉親であり、肉親であるがゆえに、「命運」という言葉を思わずにはいられなかった。)

(90)程博衍拿过瓶子喝了口矿泉水，本来他是想唱的，但现在他的情绪似乎被项西唱得有些回不来，突然就不想再开口了。(巫哲《格格不入》2018)(程博衍はペットボトルをとり、ミネラルウォーターを一口飲んだ。もともと程博衍は歌おうとしていたが、项西の歌を聞いて、その情緒にちょっと戻れないみたい。急に声を出した

くなくなった。)

例(88)(89)(90)の「V+“不”+“来”」構造の前置動詞には、“回”という前置動詞が使われている。例(88)(89)の場合、“回不来”は程度副詞の“有点”と意味関係を結んでおり、例(90)の場合、“回不来”は程度副詞の“有些”と意味関係を結んでいる。

このことから、前置動詞が“回”である場合の「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞と共に共起することが可能であると認められる。

4.2 前置動詞が“干”の「V+“不”+“来”」構造の場合

用例を調べてみると、「する」「やる」という意味を表す中国語の“干”である場合の「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞の“有点”“有些”と共に共起することが可能である。その証左として以下の用例を挙げておく。

(91)不过,随着时间的推移,濮哥在以后几年的采访中多次谈到自己更看重的名字是“演员”,对当官不感兴趣,也有点干不来。(《人民网》2015年7月10日)(しかし、時間が経つにつれ、濮さんは数年後のインタビューで、彼が大事に思っているのは「俳優」という肩書きであると、何度も言っていた。彼は役人になることに興味がなく、ちょっとできないという面もある。)

(92)在下游走于七国间,单身独行惯了,让人侍候的事,有点干不来。(齐霁《荆轲前传》2017)(拙者は七つの国に渡り、独りでいることに慣れていて、誰かに仕えてもらうことは、ちょっとできないのである。)

(93)这文雅的事,他实在是有点干不来,原本沈青墨泡茶时营造出的气氛,也是让陈煜那拙劣的品茶技术给破坏的一干二净。(陈氏刀客《从士兵突击开始的征程》2019)(こんな上品なこと、彼にはちょっと無理がある。沈青墨がお茶を入れるときに醸し出した雰囲気も、陈煜の下手なお茶の飲み方に台無しにされてしまった。)

(94)自从念高中以来,他就再没有做过农活了,这种力气活的确是有些干不来。(黑白《逍遥小村医》2019)(高校の頃から、彼は農作業から離れていた。このような力仕事は彼にとって、ちょっと大変である。)

例(91)~(94)における「V+“不”+“来”」構造には“干”という前置動詞が使われており、

程度副詞と共起している。例(91)(92)(93)における“干不来”は程度副詞の“有点”と意味関係を結び、例(94)における“干不来”は程度副詞の“有些”と意味関係を結んでいる。

このことから、前置動詞が“干”である場合の「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞と共起することが可能であるといえる。

4.3 前置動詞が“应付”の「V+“不”+“来”」構造の場合

用例を調べてみると、前置動詞が「対応する」を意味する“应付”という動詞である場合の「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞と意味関係を結ぶことが可能である。以下の用例はその裏付けである。

(95)谢楠盯着水杯不吭声,她实在是有点应付不来这种自来熟了。(青衫落拓《和你一起住下去》2018)(谢楠は水の入ったグラスを見つめて何も言わなかった。彼女は本当にこういう馴れ馴れしい人間には苦手である。)

(96)我猜想可能是因为这个家在过去只有她一个孩子,突然间来了这么多人,她要学着跟每一个人相处,有点应付不来。(毕莫《我家也是联合国》2015)(この家は昔から子供は彼女一人しかいなかったから、急にこんなに人が増え、彼女はみんなとの付き合い方を覚えなれないといけなないので、ちょっと対応できないと私は推測した。)

(97)可是多了一个孩子,原先的车就有些应付不来了,那么换一辆什么样的车来满足全家出行的问题呢?(《人民网》2015年12月24日)(しかし子供が一人増えて、もともとの車はちょっと対応できなくなった。それではどんな車なら一家全員のお出かけという問題に対応できるのか?)

(98)白百何出道的头几年,她一直很应付不来采访这件事。(例(3)を再掲)(白百何がデビューしたばかりの数年間、彼女はずっとインタビューということへの対応がとても苦手であった。)

例(95)~(98)における「V+“不”+“来”」構造の前置動詞に“应付”という動詞が立ち、程度副詞と共起している。例(95)(96)における“应付不来”という「V+“不”+“来”」構造は程度副詞の“有点”と意味関係を結び、例(97)における“应付不来”という「V+“不”+“来”」構造は程度副詞の“有些”と意味関係を結び、例(98)における“应付不来”という「V+“不”+“来”」構造は程度副詞の“很”と意味関係を結んでいる。

このことから、前置動詞が“应付”である場合の「V+“不”+“来”」構造は、程度副詞と共起することが可能であるといえる。

本節をまとめると、程度副詞と共起できる「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞は、「付き合う」という意味を表す動詞以外にも、“回”“干”“应付”がある。ただし、程度副詞と共起できるのは、前置動詞が“回”“干”“应付”の「V+“不”+“来”」構造に限る。

5 本章のまとめ

本章では、「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関わりについて、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」構造は、どんな程度副詞と意味を結ぶことが可能であるのか、また「付き合う」という意味を表す動詞以外には、どんな動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に立つ場合、程度副詞と意味関係を結ぶことが可能であるのかという二つの問題の解明に向けて考察してきた。分析の結果を改めてまとめると、以下のようになる。

- ① 前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造と「V+“不”+“来”」構造と共起できる程度副詞は異なる分布をしている。
- ② 程度副詞の“非常”“特別”は、前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造とも、「V+“不”+“来”」構造とも意味関係を結ぶことが可能である。
- ③ 程度副詞の“很”は「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」構造としか共起できない。
- ④ 程度副詞の“有些”“有点”は「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“不”+“来”」構造としか共起できない。
- ⑤ 程度副詞と共起できる「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞は、「付き合う」という意味を表す動詞以外にも、“回”“干”“应付”が挙げられる。ただし、「V+“不”+“来”」構造に限る。

以上が本章のまとめである。本章において、「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関わりについて考察してきたが、未だ解明できていない点もある。

前置動詞が「付き合う」という意味を表す動詞の「V+“得”+“来”」と「V+“不”+“来”」

と共起できる程度副詞が異なるのはなぜか、“回”“干”“应付”が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞になる場合、なぜ「V+“不”+“来”」の場合だけ、程度副詞と共起できるのかなどの問題について、未だ解明できていない。これらの問題を解明するためには、おそらく否定と程度副詞との関わりに求められる。「V+“得”/“不”+“来”」構造と共起できる程度副詞に焦点を絞り、それらの副詞は、程度副詞の役割を果たすほかに、陳述副詞(または呼応副詞)としての役割を果たすことが可能であるかどうかについて考察する必要がある。本論文は、あくまでも「V+“得”/“不”+“来”」構造という可能補語を研究の対象としているため、これらの問題についてはまたの機会で論じることにする。

注

- 1) 「付き合う」という意味を表す動詞とは、「付き合う」という意味を表す動詞であり、相手との関係を保つために行うための動作を指す。「付き合う」という意味を表す動詞には、“相处”“处”“谈”“说”“聊”“合”などが挙げられる。
- 2) 3.1.1 の分析結果に基づき、本章では、“聊”“合”“谈”“说”“处”“相处”が「付き合う」という意味を表す動詞として「V+“得”+“来”」構造の V として機能する場合、同じ程度副詞と意味関係を結ぶことが可能であると見なす。そこで、3.1.2 からは、“聊”“合”“谈”“说”“处”“相处”を区別せず、全体としての「付き合う」という意味を表す動詞がどんな程度副詞と共起できるのかについて考察する。いわば、3.1.2 からは、それぞれの“聊”“合”“谈”“说”“处”“相处”の用例を挙げるのではなく、「付き合う」という意味を表す動詞の特徴が捉えやすい用例だけを挙げていく。

第4章 「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について

1 はじめに

第1章から第3章は、中国語の可能補語の「V+“得”/“不”+“来”」構造について、その意味・機能、構文的特徴、程度副詞との関わりについて考察してきた。第4章からは、可能補語の「V+“得”/“不”+“了”」構造について考察していく。本章では、「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察する。

中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造は、可能補語として知られている。「V+“得”/“不”+“了”」構造には目的語が付く場合と目的語が付かない場合がある。目的語が付く場合と付かない場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の表す意味は、必ずしも同じであるとは限らない。また、目的語が付く場合においても、目的語の含みによって、「V+“得”/“不”+“了”」構造は異なる意味を表すケースもある。いわば、目的語と「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能との間には何らかの関連性が見られる。しかし、これまでの研究では、目的語と「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能の関係について、未だ明確なルールが示されていない。そこで、本章では、目的語との関係性に焦点を照らし、「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能を明らかにする。

2 先行研究の問題点と本章の立場

「V+“得”/“不”+“了”」構造に関する研究は、刘月华(1980)、李宗江(1994)、黄文龙(1998)、安本真弓(2010)、卢英顺(2010)などが挙げられる。刘月华(1980)では、“V 得/不了”構造には“了”が本来の「完了、終了」の意味を表す場合と、そうではない場合があると述べている。李宗江(1994)は、それに基づき、“V 得了”と“V 不了”には“V 得了 1”と“V 得了 2”という二つの意味があり、“V 得了 1”は“V 实现‘了’这一结果的可能性”(V が完了という結果を実現する可能性)を表しているのに対し、“V 得了 2”は“V 实现的可能性”(V という動作の実現の可能性)を表していると述べられている。

また、黄文龙(1998)では、“V 不了”の意味について、“V 不了 1”の意味(李宗江(1994)でいう“V 得了 1”の意味に当たる)を表す場合、“V 不了 2”の意味(李宗江(1994)でいう“V 得了 2”の意味に当たる)を表す場合のほかに、後続する量を表す補語を否定するという“V 不了 3”の意味があると述べている。

さらに、卢英顺(2010)では、“V 不了(O)”の意味・機能について、①“不能”または“无法”

(V という動作ができない) という意味を表す場合、②“推测”(推测) という意味を表す場合、③“V 不完”(V という動作が完成できない)の意味を表す場合、④“不需要”(必要ない)の意味を表す場合という四つの意味にまとめられている。

以上のように、これまでの先行研究は、主に「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味解明に関するものであり、それぞれの意味を表す場合、V がどういう動詞であるかについて述べている。いわば、「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞とその意味・機能の関係性について述べている。しかし、実際の用例を観察してみたところ、卢英顺(2010)にまとめられた動詞の種類だけでは、「V+“得”/“不”+“了”」構造の表す意味を特定することができないように思われる。例えば、卢英顺(2010:pp44-45)では、“V 不了(O)”構造に“不需要”(必要ない)という意味の場合、“用”“要”“需要”などが用いられるとされている。確かに“用不了多久”というような用例の場合、“V 不了(O)”は「それほど時間を必要としない」という中国語でいう“不需要”の意味を表しているかもしれない。しかし、下記の例(1)(2)(3)が示すように、すべての“用不了”が“不需要”(必要ない)という意味を表しているというわけではない。

- (1)公司就在村里，从家里到工作车间，用不了五分钟。(《人民网》2020年6月9日)(会社は村の中にあり、自宅から作業場までは5分も必要ない。)
- (2)在平民百姓之家，一年吃饭也用不了这么多银子！(姚雪垠《李自成第二卷》1978)(平民のお家では、一年間の食事もこんなたくさんの銀塊を使い切れない。)
- (3)但日前有市民去一些超市购物却发现，如果不下载超市 APP 扫码，连手推车都用不了。(《人民网》2020年1月22日)(しかし、最近では、市民がスーパーに買い物に行っても、スーパーのアプリをダウンロードして、QRコードをスキャンしないと、ショッピングカートも使えない。)

例(1)(2)(3)には“用不了”が使われているが、全く同じ意味を表しているとは認めがたい。例(1)の“用不了”は「必要ない・かからない」という意味を表し、例(2)の“用不了”は「使い切れない」という意味を表し、例(3)の“用不了”は「使えない」という意味を表している。このことから、たとえ前置動詞が同じ動詞であっても、“V 不了(O)”構造が必ずしも同じ意味を表しているとは限らないと認めなければならない。つまり、卢英顺(2010)の“V 不了(O)”の意味・機能に関する記述は不十分と言わざるを得ない。これまでの研究にまとめら

れた前置動詞と「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能に関するルールは、必ずしもすべての用例に通用するというわけではないと言わざるを得ない。

この場合、例(1)(2)(3)の意味の違いはおそらく「V+“不”+“了”」構造の前置動詞というより、「V+“不”+“了”」構造に後続する目的語に関係していると考えられる。例(1)の目的語には時間を表す名詞が立ち、例(2)の目的語には“这么多银子”という大量を表す副詞と具体的なものが使われている。更に例(3)の場合、目的語が顕現していない。そのため、例(1)(2)(3)の“用不了”は異なる意味を表しているのではないかと考えられる。また、目的語と“V 不了(O)”構造の意味との関係について、卢英顺(2010:45)においても若干の記述がある。しかし、具体的にどんな目的語が顕現する場合、“V 不了(O)”構造はどんな意味を表すのか、また目的語が顕現しない場合の“V 不了(O)”構造の意味との違いはどこにあるのかというような問題については言及していない。

以上のように、これまでの研究では、「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能の全容がまだ明らかにされていないと認められる。そこで、この章では、目的語がつく場合と、目的語が顕現しない場合に分けて、「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察していく。

以下3節では、目的語がつく場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について、どんな目的語が顕現する場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造がどんな意味を表すのかについて考察する。4節では、目的語が顕現しない場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察する。5節では、まとめを行う。

3 目的語がつく場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能

本節では、目的語がつく場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察する。具体的にいえば、どんな目的語が顕現する場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造がどんな意味を表すのかについて考察する。

用例を観察してみたところ、「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能は主に四つにまとめられる。それは、目的語が時間を表す場合、目的語に数量詞が含まれる場合、目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合という三つの場合と、目的語が無標²⁾である場合である。この四つの場合において、「V+“得”/“不”+“了”」構造は異なる意味を表すものと見なされる。そこで、本節では、この四つの場合において、「V+“得”/“不”+“了”」構造はそれぞれ異なる意味を表すという仮説を提案する。以下では、この四つの場合に分けて「V

+“得”/“不”+“了” 構造の意味・機能について考察する。

3.1 目的語が時間を表す場合

この節では、目的語が時間を表す場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察する。「V+“得”/“不”+“了”」構造の目的語が時間を表す場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に“用”“等”などの動詞が使われている場合が多い。

まず、「使用」という意味を表す“用”が「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立ち、目的語が時間を表す場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「必要であるかどうか」・「かかるかどうか」という意味を表していると思われる。以下の例(4)～(7)はその裏付けとして挙げておく。

(4)坐这趟车哪儿用得了 30 分钟, 我提前 20 分钟就够了。(《人民网》2017 年 5 月 26 日)(このバスに乗るなら、30 分もかかる(必要)だろうか？私は 20 分ほど早く出発すればいいだけだ。)

(5)有人说刷牙怎么用得了 3 分钟, 我 1 分钟就可以。(《人民网》2019 年 8 月 30 日)(歯磨きは 3 分も必要(かかる)かと言う人もいるが、私は 1 分で充分である。)

(6)看到他每天背回一个空空的书包, 语文、数学作业最多不过是两页纸, 回到家三下五除二就做完了, 总共用不了 10 分钟。(《人民网》2004 年 8 月 5 日)(彼は毎日空っぽのリュックを背負い、国語と数学の宿題もせいぜい紙二枚くらいであり、家に帰るとぱっぱと終わらせて、合計 10 分もかからなかった。)

(7)公司就在村里, 从家里到工作车间, 用不了五分钟。(例(1)を再掲)(会社は村の中にあり、自宅から作業場までは 5 分も必要ない。)

例(4)～(7)の「V+“得”/“不”+“了”」構造には動詞の“用”が使われており、目的語には“30 分钟”“3 分钟”“10 分钟”“五分钟”という時間を表す名詞が生起している。この場合、例(4)(5)の“用得了”という「V+“得”+“了”」構造は「かかる」「必要である」という意味を表している。例(6)(7)の“用不了”という「V+“不”+“了”」構造は「必要ない」「かからない」という意味を表している。

このことから、“用”が「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立ち、目的語が時間を表す場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「必要であるかどうか」・「かかるかどうか」とい

う意味を表すといえる。

また、用例を調べた結果、目的語が時間を表す場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に“等”という「待つ」という意味を表す動詞も使用可能である。ただし、この場合において、“等得了”という「V+“得”+“了”」構造は見られるものの、“等不了”という「V+“不”+“了”」構造の用例はないようである³⁾。この場合、「V+“得”+“了”」構造は、前置動詞が“用”である場合と異なり、「待ってられる」という意味を表す。

(8)有几个人等得了十五年? (王旭烽《茶人三部曲》2004)(15年も待ってられる人は何人もいるだろうか?)

(9)我们曾联系上小吃城老板,他说让给他两年时间,慢慢还我们30万营业款,可我们都是小本买卖,哪儿等得了两年。(《人民网》2017年11月21日)(スナック街のオーナーに連絡を取っていたが、彼は2年待ってくれれば、30万の営業額を返済すると言った。しかし、私たちは、2年も待ってられるのか。)

(10)一个严重的先天性心脏病患者怎么能等得了八年? (张雅文《走过伤心地》2011)(重度の先天性心疾患の患者は、8年も待ってられるのか?)

(11)我妈是癌症啊,等得了三个月吗?(《人民网》2019年12月24日)(母はガンなのだ。3ヶ月も待ってられるのか?)

例(8)~(11)の「V+“得”+“了”」構造には動詞の“等”が使われ、目的語には“十五年”“两年”“八年”“三个月”という時間を表す名詞が使われている。この場合、“等得了”という「V+“得”+“了”」構造は「待ってられる」という意味を表している。このことから、“等”が「V+“得”+“了”」構造の前置動詞に立ち、目的語が時間を表す場合、「V+“得”+“了”」構造は「待ってられる」という意味を表すといえる。

つまり、目的語が時間を表す場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞には“用”“等”が使用可能である。“用”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「必要であるかどうか」・「かかるかどうか」という意味を表す。“等”が前置動詞に立つ場合、「V+“不”+“了”」構造がなく、「V+“得”+“了”」構造は「待ってられる」という意味を表す。

3.2 目的語に数量詞が含まれる場合

この部分では、「V+“得”/“不”+“了”」構造の目的語に数量詞が含まれる場合において、

「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察する。この場合、「使う」という意味を表す“用”が前置動詞に立つ場合が挙げられる。次の(12)～(15)に示すように、目的語に数量詞が含まれ、“用”が前置動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は、「使い切ることができるかどうか」という意味を表す。

(12)这得忙成什么样,才能用得了 1600 斤冰块! (《人民网》2020 年 6 月 15 日)(それはどれほど忙しくなるものか、1600 斤の氷を使いきることができる!)

(13)另外,即使打车,用得了 2400 元吗? (《人民网》2004 年 9 月 10 日)(また、たとえばタクシーを呼ぼうとすると、2400 元を使い切ることができるのか?)

(14)戴女士很疑惑:孩子坐公交的次数并不多,平时一个多月都用不了 20 元,钱哪去了? (《人民网》2013 年 6 月 24 日)(戴さんは戸惑っている。子供がバスに乗る回数は多くない。普段一ヶ月以上経っても、20 元を使い切れない。お金はどこに行ってしまったのだろうか?)

(15)乡里需要供水的有 9000 多户,但 2/3 的人都出去打工了,很多户确实用不了 48 吨水。(《人民网》2013 年 4 月 19 日)(町内には水を必要とする世帯が 9000 世帯以上あるが、その 3 分の 2 が出稼ぎに行った。確かに多くの世帯は 48 トンの水を使い切れない。)

例(12)～(15)の「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞には動詞の“用”が使われ、目的語には“1600 斤”“2400 元”“20 元”“48 吨」という数量詞が含まれている。この場合、例(12)(13)の“用得”という「V+“得”+“了”」構造は「使い切ることができる」という意味を表し、例(14)(15)の“用不”という「V+“不”+“了”」構造は「使い切れない」という意味を表している。

このことから、“用”が前置動詞に立ち、目的語に数量詞が含まれる場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「使い切ることができるかどうか」という意味を表すといえる。

3.3 目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合

「V+“得”/“不”+“了”」構造の目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合、飲食を表す動詞の“吃”“喝”と、「使う」という意味の“用”が前置動詞に生起しうる。この節では、それぞれの場合において、「V+“得”/“不”+“了”」構造はどんな意味を表しているのかに

ついて考察する。

まず、“吃”という飲食を表す動詞が「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立ち、目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造はどんな意味を表すかについて考察する。用例を観察した結果、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「食べることができるかどうか」という意味を表すと思われる。下記の例(16)～(19)はその裏付けである。

- (16)就想问一句，严宽你一个人吃得了这么多吗？(《人民网》2016年3月23日)(一つだけをお聞きしたいが、严宽さんは一人でこんなに多くのものを食べきれるのか？)
- (17)皇后她吃得了那么多猪肉吗？(《人民网》2013年3月13日)(皇后さまはそんなに多くの豚肉を食べきれるのか？)
- (18)我吃不了这么多。(陌安凉《我路过你的世界》2015)(私は、こんなに多くのものを食べきれない。)
- (19)最近胃不好，吃不了那么多。(《人民网》2015年7月2日)(最近お腹の調子が悪く、あんなに多くのものを食べきれない。)

例(16)～(19)の「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞には、飲食を表す動詞の“吃”が使われ、目的語には“这么”“那么”という指示詞が含まれている。この場合、例(16)(17)の“吃得了”という「V+“得”+“了”」構造は「食べられる」という意味を表しており、例(18)(19)の“吃不了”という「V+“不”+“了”」構造は「食べ切れない」という意味を表していると思われる。

このことから、“吃”が前置動詞に立ち、目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「食べることができるかどうか」という意味を表すといえる。

次に、「V+“得”/“不”+“了”」構造の目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合において、“喝”という飲食を表す動詞も前置動詞に生起する。“喝”も飲食を表す動詞であるので、“吃”の場合と似通った意味を表していると推測できる。下記の例(20)～(23)に示すように、“喝”が「V+“得”/“不”+“了”」構造に生起し、目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「飲みることができるかどうか」という意

味を表している。

(20)他一愣,问道:“我怎么能喝得了这么多汤?”(陈荣赋《成长大于成功, 选择重于努力》2014)(彼はすぐに反応できなかった。「こんなに大きな鍋のスープが飲みきれると思うか?」と聞いた。)

(21)太多啦,鸟儿喝得了那么多水吗?(孙幼军《孙幼军文集》2015)(これは多すぎる。鳥がこんなにいっぱいの水を飲みきれるのか?)

(22)您一个人喝不了那么多。(《人民网》2017年2月22日)(お一人様なら、こんなに多くのものは飲みきれない。)

(23)这些细节,是我们后来听说的,他根本喝不了这么多酒。(《人民网》2011年9月9日)(これらの詳細は、後で聞いたもので、彼はこんなに多くの酒を飲みきれない。)

例(20)~(23)の「V+“得”/“不”+“了”」構造には、飲食を表す動詞の“喝”が使われており、目的語には“这么”“那么”という指示詞が含まれている。例(20)(21)の“喝得了”という「V+“得”+“了”」構造は「飲みきれる」という意味を表し、例(22)(23)の“喝不了”という「V+“不”+“了”」構造は「飲みきれない」という意味を表している。

このことから、“喝”が前置動詞に生起し、目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「飲みきることができるかどうか」という意味を表すといえる。

さらに、「V+“得”/“不”+“了”」構造の目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合において、“用”という使用の意味を表す動詞もその前置動詞に生起しうる。“用”が「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立ち、目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「使いきることができるかどうか」という意味を表す。その証左として、下記の用例を挙げておく。

(24)小学能用得这么多笔吗?(《人民网》2013年6月4日)(小学生に、これだけのペンを使い切れるのか?)

(25)我问他:“你用得这么多纸吗?”(《人民网》2013年6月24日)(「これほど多くの紙は、使い切れるのか?」と私は彼に聞いた。)

(26)马女士老两口带着一个小孙子在家,根本用不了这么多水。(《人民网》2016年9月

- 19日)(马さん夫婦は幼い孫と一緒に家にいて、これほどのお水は使い切れない。)
- (27)我一个人住养老院，用不了那么多钱。(《人民网》2015年5月12日)(一人で老人ホームに暮らすのだから、そんなに多くのお金は使いきれない。)

例(24)～(27)の「V+“得”/“不”+“了”」構造に、“用”という動詞が前置動詞に生起し、目的語には“这么”“那么”という指示詞が含まれている。この場合、例(24)(25)の“用得了”という「V+“得”+“了”」構造は、「使いきれる」という意味を表し、例(26)(27)の“用不了”という「V+“不”+“了”」構造は「使いきれない」という意味を表している。

このことから、“用”が前置動詞に立ち、目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「使い切ることができるかどうか」という意味を表すと認めなければならない。

つまり、目的語に“这么”“那么”という指示詞が含まれる場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞には“吃”“喝”“用”が生起しうる。「V+“得”/“不”+“了”」構造は、「～きることができるかどうか」という意味を表す。

3.4 目的語が無標である場合

この節では、目的語が無標である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察する。いわば、「V+“得”/“不”+“了”」構造の目的語に、3.1～3.3のような特徴を見られない場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造はどんな意味を表すのかという問題について考察する。

まず、目的語が無標である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞には、「比べる」を意味する“比”という動詞が生起しうる。コーパスを調べたところ、“比”が前置動詞に生起する場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「敵うかどうか」という意味を表すと思われる。次の例(28)～(31)はその裏付けである。

- (28)司令员比得了你? (莫应丰《将军吟》1980)(司令官は君に敵うわけあるか。)
- (29)要说文艺，那没有任何一个城市比得了杭州。(《人民网》2011年11月17日)(文化
的かどうかでいうと、杭州に敵う都市はない。)
- (30)挂号拼手速，我们抢号的速度根本比不了年轻人。(《人民网》2019年9月24日)(病
院のネット受付手続きの番号を取るのは、手の速さで勝負するものであり、私た

ちの番号を取る速さは若者には敵わない。)

(31)我的战斗力高只是相对于女棋手来说的，还比不了高水平男棋手。(《人民网》2017年3月30日)(私の戦闘力の高いというのは、あくまでも女流棋士としては高いということであり、ハイレベルの男棋士には敵わない。)

例(28)~(31)の「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に“比”という動詞が生起し、目的語には時間を表す名詞も、数量詞も、指示詞も含まれていないため、無標であると認められる。この場合、例(28)(29)の“比得了”という「V+“得”+“了”」構造は、「敵う」という意味を表し、例(30)(31)の“比不了”という「V+“不”+“了”」構造は「敵わない」という意味を表している。

このことから、“比”が前置動詞に生起し、目的語が無標である場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「敵うかどうか」という意味を表すといえる。

また、目的語が無標である場合、“对付”という対応の意味を表す動詞も「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立つことが可能である。この場合、“比”が「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立つ場合と似通った意味を表す。下記の例(32)~(35)に示すように、“对付”が「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立つ場合、「敵うことができるかどうか」という意味を表す。

(32)两个人又怎样？两个人照样对付得了他们！(刘斯奋《白门柳》1984)(あの二人はどうだろう？二人でもまだ敵うことができる！)

(33)顺着这个故事想想，什么方法才对付得了野猪？(《人民网》2012年12月13日)(この話の続きで、どんな方法ならイノシシに敵うことができるのか。)

(34)毕竟白川凜不是普通人，常人根本对付不了他。(《人民网》2017年8月24日)(やはり白川凜はただ者ではない。普通の人では敵うできない。)

(35)我试着请了一个又一个的小姑娘来帮忙，可是她们就是对付不了她。(《人民网》2013年10月18日)(次から次へと小さな女の子に助けを求めてきたが、どうしても彼女に敵うできない。)

例(32)~(35)の“对付”という動詞が「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立ち、目的語は無標と見られる。この場合、例(32)(33)の“对付得了”という「V+“得”+“了”」構造は、

「敵うことができる」という意味を表し、例(34)(35)の“对付不了”という「V+“不”+“了”」構造は「敵うことができない」という意味を表している。

このことから、“对付”が前置動詞に生起し、目的語が無標である場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「敵うことができるかどうか」という意味を表すと認められる。

次に、目的語が無標である場合、実行を表す動詞の“干”も「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞として機能することが可能である。この場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「できるかどうか」という意味を表すと見なされる。その裏付けとして以下の用例を挙げておく。

(36)大学生干得了民工的活吗? (《人民网》2014年2月21日)(大学生は、出稼ぎ労働者の仕事もできるのか?)

(37)我如今已经干不了体力劳动了，但是还干得了脑力劳动，请给我工作。(《人民网》2014年5月27日)(今はもう力仕事ができないが、頭脳労働ならまだできるので、仕事をください。)

(38)姜学永的妻子患有心脏病，干不了重活。(《人民网》2020年6月28日)(姜学永の妻は心臓病を患っており、重労働ができない。)

(39)人家都愿意要年轻人，我这年纪，除了保姆和保洁，别的啥也干不了。(《人民网》2013年7月12日)(ほかの人は若い人が優先的に採用される。この歳になると家政婦と清掃員の仕事以外何もできない。)

例(36)~(39)の“干”という動詞が「V+“得”/“不”+“了”」構造に入り、目的語には3.1から3.3のような特徴がなく、無標だと思われる。この場合、例(36)(37)の“干得了”という「V+“得”+“了”」構造は、「できる」という意味を表し、例(38)(39)の“干不了”という「V+“不”+“了”」構造は「できない」という意味を表している。

つまり、“干”が前置動詞に立ち、目的語が無標である場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「できるかどうか」という意味を表すといえる。

それから、コーパスを調べたところ、目的語が無標である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞には、無意志動詞も生起しうる。以下では、“下”という無意志動詞が前置動詞に生起する場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察する。“下”が無意志動詞として「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立つ場合、「V+“得”/“不”+“了”」

構造は「～可能性があるかどうか」という意味を表す。

(40)刮风未必就下得了雨。(高峰《天下粮仓》2002)(風が吹いても、雨が降る可能性はあるとは限らない。)

(41)这……能下得了雨吗? (西子情《京门风月》2015)(この場合は、雨が降る可能性はあるのか?)

(42)而本周六的晚上有充足的水汽,但又不够冷,所以也下不了雪。(《人民网》2019年11月13日)(しかし、今週の土曜日の夜は湿気が十分にあるが寒くはない。だから、雪が降る可能性はない。)

(43)我知道那是客套话,我说:“不碍事,下不了雨。”(相裕亭《小站不留客》2011)(それが建前であることは知っている。私は、「構わない。雨は降るわけがない。」と言ってみました。)

例(40)~(43)の“下”という動詞は目的語の「雪」「雨」と意味関係を結んでいるため、無意志動詞として認められる。例(40)(41)の“下得了”という「V+“得”+“了”」構造は、「降る可能性がある」という意味を表し、例(42)(43)の“下不了”という「V+“不”+“了”」構造は「降る可能性がない」「降るわけがない」という意味を表している。つまり、無意志動詞が前置動詞に立ち、目的語が無標である場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vが現れる可能性があるかどうか」という意味を表すと認められる。

この部分をまとめると、目的語が無標である場合、“对付”“干”などの意志動詞が前置動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vできるかどうか」という意味を表し、“下”という無意志動詞が前置動詞に立つ場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「VP可能性があるかどうか」という意味を表す。比較関係を表す動詞の“比”が前置動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「敵うかどうか」という意味を表す。

3節では、目的語がつく場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察してきた。分析の結果をまとめると、主に次のようになる。

目的語が時間を表す場合、前置動詞が“用”である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「必要であるかどうか」や「かかるかどうか」という意味を表し、前置動詞が“等”である場合の「V+“得”+“了”」構造は「待ってられる」という意味を表す。目的語に数量詞が含まれる場合及び目的語に“这么”“那么”という指示詞が含まれる場合、前置動詞が

“吃”“喝”“用”である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は、「V+きることができるかどうか」という意味を表す。

さらに、目的語が無標である場合、“对付”“干”などの意志動詞が前置動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「V できるかどうか」という意味を表し、前置動詞が“下”などの無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「V が現れる可能性があるかどうか」という意味を表す。比較関係を表す動詞の“比”が前置動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「敵うかどうか」という意味を表す。

4 目的語が顕現しない場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能

本節では、目的語が顕現しない場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察する。用例を調べてみると、目的語が顕現しない場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は、目的語が無標である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造と似通った意味・機能を果たしていると推測できる。さらに、前置動詞が意志動詞の場合と前置動詞が無意志動詞の場合において、「V+“得”/“不”+“了”」構造は異なる意味を表すという仮説が立てられる。そこで、本節では、前置動詞が意志動詞の場合と前置動詞が無意志動詞の場合に分けて、「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察する。

4.1 前置動詞が意志動詞である場合

この節では、目的語が顕現しない場合、前置動詞が意志動詞の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察する。用例を観察してみると、意志動詞が前置動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「V できるかどうか」という意味を表すと思われる。この場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞は“用”“等”“应付”“干”などの動詞に分布している。

まず、目的語が顕現しない場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に“用”が使用可能である。この場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「使えるかどうか」「使用できるかどうか」という意味を表す。

(44)其实，不用着急，到时候人家好的东西想不拿也不行，只是现在人家在用的东西咱们还不一定用得了。(《人民网》2001年3月2日)(実は、急ぐ必要はない。その時になれば、人のよいものは取らないといけない。ただし、今その人が使っている

ものは私たちも使えるとは限らない。)

(45)除了速度，可靠性也是影响乘客体验的重要因素，要始终保持系统的稳定性与可靠性，让乘客用得了。(《人民网》2019年9月12日)(速度以外にも、信頼性も乗客の体験に影響を与える重要な要素であり、システムの安定性と信頼性をずっとキープして、乗客に使えるようにさせる。)

(46)看了文字后，他坚持试了试，确实用不了。(《人民网》2006年3月8日)(文章を読んだ後、どうしても試してみたいと言いつつ張ったが、確かに使えないのであった。)

(47)但日前有市民去一些超市购物却发现，如果不下载超市 APP 扫码，连手推车都用不了。(例(3)を再掲)(しかし、最近では、市民がスーパーに買い物に行っても、スーパーのアプリをダウンロードして、QRコードをスキャンしないと、ショッピングカートも使えない。)

例(44)~(47)の「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に“用”という動詞が生起し、「V+“得”/“不”+“了”」構造の後に目的語が顕現していない。この場合、例(44)(45)の“用得了”という「V+“得”+“了”」構造は、「使える」という意味を表し、例(46)(47)の“用不了”という「V+“不”+“了”」構造は「使えない」という意味を表している。このことから、“用”が前置動詞に立ち、目的語が顕現しない場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「使えるかどうか」という意味を表すといえる。

また、目的語が顕現しない場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に、「待つ」という意味を表す“等”という動詞も使用可能である。次の例(48)~(51)に示すように、前置動詞に“等”が立ち、目的語が顕現しない場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「待つことができるかどうか」という意味を表す。

(48)我们哪里等得了? (《人民网》2020年3月11日)(私たちは待っていられると思うか?)

(49)没关系，你去找人给鉴定吧！我等得了！(《人民网》2004年9月2日)(大丈夫！誰かに鑑定してもらっておこう！私は待っていられるよ。)

(50)尽管心疼、体谅疲劳的同事们，但周婵明白，病人等不了。(《人民网》2020年2月10日)(疲れている同僚をいたわるという思いやりはあるが、患者が待っていられないことを周婵は知っている。)

(51)引水管道受损严重,鱼苗会缺氧,一刻也等不了。(《人民网》2020年7月10日)(水管の損傷がひどく、稚魚の酸素が足りなくなるため、一刻も待ってられない。)

例(48)~(51)の「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞には動詞の“等”が使われており、「V+“得”+“了”」構造の後に目的語が顕現していない。この場合、“等得了”は「待ってられる」という意味を表している。このことから、“等”が「V+“得”+“了”」構造の前置動詞に立ち、目的語が顕現しない場合、「V+“得”+“了”」構造は「待つことができるかどうか」という意味を表すと認められる。

さらに、目的語が顕現しない場合、“应付”という意志動詞も「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞になりうる。この場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「対応できるかどうか」という意味を表す。

(52)初级的东西,教小朋友,我一个人还应付得了。(《人民网》2014年4月4日)(子供に初級の知識を教えるなら、私一人で対応できる。)

(53)她非常失望,不过还应付得了。(《人民网》2002年4月30日)(彼女は非常に失望していたが、まだなんとか対応できる。)

(54)崔永刚回忆说,一位居住在附近闻讯而来的老乡也在山上救火,但是火势凶猛,他一人应付不了。(《人民网》2019年9月5日)(崔永刚は思い出しながら話していた。近くに住んでいる老人が火事のことを聞き、すぐ山に登って消火の手伝いをしているが、炎が勢いを増しており、彼一人では対応できない。)

(55)现在这么大的规模,这么复杂的情况,应付不了。(《人民网》2015年3月17日)(今これほど大きな規模になり、これほど複雑な状況になると、これに対応できない。)

例(52)~(55)の“应付”という意志動詞は、目的語が顕現していない「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に使われている。この場合、例(52)(53)の“应付得了”という「V+“得”+“了”」構造は、「対応できる」という意味を表し、例(54)(55)の“应付不了”という「V+“不”+“了”」構造は「対応できない」という意味を表している。このことから、“应付”が前置動詞に立つ場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「対応できるかどうか」という意味を表すといえる。

それから、目的語が顕現しない場合、“干”という意志動詞も「V+“得”/“不”+“了”」構

造の前置動詞に立つことが可能である。“干”という意志動詞が前置動詞に立ち、目的語が顕現しない場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「できるかどうか」という意味を表す。下記の例(56)～(59)はその裏付けである。

(56)这点活不算啥，我还干得了。(《人民网》2013年7月4日)(大した仕事ではないので、私はまだできる。)

(57)考古的活儿太辛苦，在一个大坑一蹲就是好几年，女同志哪里干得了。(《人民网》2010年1月4日)(考古学の仕事は大変すぎる。大きな堅穴に何年も入り込んで、女性ができるわけがない。)

(58)这个工作我可没做过，干不了。(《人民网》2015年4月15日)(この仕事はやったことないため、私にはできない。)

(59)身体不好的人还真干不了。(《人民网》2003年6月11日)(体が丈夫でない人には、これはできないだろうね。)

例(56)～(59)の“干”という意志動詞が「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立ち、目的語は「V+“得”/“不”+“了”」構造のあとに顕現していない。この場合、例(56)(57)の“干得了”という「V+“得”+“了”」構造は、「できる」という意味を表し、例(58)(59)の“干不了”という「V+“不”+“了”」構造は「できない」という意味を表している。このことから、“干”が前置動詞に立ち、目的語が顕現しない場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「できるかどうか」という意味を表すといえる。

以上の言語事実が示すように、意志動詞が「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立つ場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「V できるかどうか」という意味を表す。ただし、「V+“得”/“不”+“了”」構造の後に、目的語が顕現しない場合においても、すべての「V+“得”/“不”+“了”」構造が「V できるかどうか」という意味を表しているとは限らない。その例外として、深層の目的語が“都”や“也”と共起し、「V+“得”/“不”+“了”」構造の前に立つ場合が挙げられる。

深層の目的語が“都”や“也”と共起する場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は、その目的語の特徴によって、3節に述べた目的語が時間である場合や、目的語に数量詞が含まれる場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造と似通った意味を表す。下記の例(60)～(63)はその裏付けである。

(60)记者注意到，整个行程用了 30 分钟时间，而司机告诉记者，如果所有车辆让道的话，15 分钟都用不了。(《人民网》2003 年 4 月 11 日)(その記者は気づいた。全行程は 30 分がかかった。しかし、運転手は記者に「すべての車が道を開けてくれるなら、15 分も必要ない」と話していた。)

(61)处理狼崽还用得着讨论吗，喝完茶你们来看我的，两分钟也用不了。(《人民网》2020 年 6 月 30 日)(狼の子を処分することに討論する必要はないだろう。このお茶を飲み終わったら、私の見せ場だ。2 分も必要ない。)

(62)单纯就建设一个门户网站就花 5600 万而言，这个钱都花到个人腰包里了吧，200 万都用不了。(《人民网》2020 年 6 月 30 日)(ただ一つのポータルサイトの建設に 5600 万も費やしたとは、このお金は全て個人の財布に収まっているだろう。200 万も使いきれないだろう。)

(63)以前拉果蔬一般去山东、临汾等地，去那里一趟的开支就得 2000 多元，现在来方山拉果蔬连 500 元也用不了，而且拉回去的果蔬每天都是一抢而空。(《人民网》2018 年 8 月 24 日)(昔果物や野菜を車に載せ、山東や临汾などのところに送っていく。一回の費用は 2000 元以上かかるが、今、方山に来て、果物や野菜を仕入れるには 500 元も使い切れない。それに仕入れた果物や野菜はすぐに売り切れる。)

例(60)~(63)の“用不了”という「V+“得”/“不”+“了”」構造の後に目的語が顕現していないにもかかわらず、この場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造が「V できるかどうか」という意味を表しているとは認めがたい。例(60)(61)の“用不了”という「V+“得”+“了”」構造は「必要ない」という意味を表し、例(62)(63)の“用不了”という「V+“不”+“了”」構造は「使いきれない」という意味を表している。というのは、この場合の“用不了”の前に、深層の目的語が“都”や“也”と共起しているからと考えられる。その目的語の特徴によって、意味の違いが生じたと推測できる。

この場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能も 3 節で述べた目的語と意味の関係性に求められる。いわば、例(60)(61)の“用不了”の前の目的語は時間を表しているから、“用不了”は、目的語が時間である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造と同じように、「必要ない」という意味を表している。例(62)(63)の“用不了”の前の目的語に数量詞が含まれているため、“用不了”は目的語に数量詞が含まれる場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造と同

じように「使いきれない」という意味を表していると考えられる。このことは、「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能は目的語の違いによって変化するという本論文の主張の裏付けにもなりうる。

つまり、目的語が「V+“得”/“不”+“了”」構造の後に顕現しない場合、意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「V できるかどうか」という意味を表す。ただし、深層の目的語が“都”や“也”と共起し、「V+“得”/“不”+“了”」構造の前に立つ場合はその限りではない。

4.2 前置動詞が無意志動詞である場合

この節では、目的語が顕現しない場合、前置動詞が無意志動詞の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察する。この場合において、「V+“得”/“不”+“了”」構造は、「V が現れる可能性があるかどうか」という意味を表す。次の例(64)~(67)はその裏付けである。

(64)日子一天一天地过了，雪还是时断时续地下着，真不知何时停得了。(余岱宗《镜子的背面》2015)(日の経つにつれ、雪が断続的に降り続け、いつになったら止むだろう。)

(65)房价降得了吗? (《21 世纪经济报道》2018 年 4 月 19 日)(不動産の取引価格は下がるだろうか?)

(66)昆明主城区这几天的雨是停不了了。(《人民网》2016 年 9 月 5 日)(昆明の主要部にここ数日、雨は止みそうにない。)

(67)这段路比两端道路要低，就像酒窝一样凹在路上，一有点雨水就排不了。(《人民网》2017 年 6 月 11 日)(この道は、両端の道路よりも低い位置にあり、笑窪みたいに道路の凹みになっている。少しの雨水も排出しないだろう。)

例(64)~(67)の「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に、“停”“降”“停”“排」という動詞が使われている。この場合の主体は「雪」「不動産の取引価格」「雨」「雨水」に分布しており、意志性が感じ取れないため、無意志動詞として認められる。例(64)の“停得了”は、「雨が止む可能性がある」という意味を表し、例(65)の“降得了”は「不動産の取引価格は下がる可能性がある」という意味を表している。例(66)の“停不了”は「雨が止む可能性が

ない」という意味を表し、例(67)の“排不了”は「雨水が排出する可能性がない」という意味を表している。これを、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vが現れる可能性があるかどうか」という意味を表すと認められる。このことから、無意志動詞が前置動詞に立ち、目的語が顕現しない場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vが現れる可能性があるかどうか」という意味を表すと認められる。

本節をまとめると、目的語が「V+“得”/“不”+“了”」構造の後に顕現しない場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vできるかどうか」という意味を表し、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vが現れる可能性があるかどうか」という意味を表す。ただし、深層の目的語が“都”や“也”と共起し、意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の前に立つ場合はその限りではない。

5 本章のまとめ

本章では、目的語と「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能との関係性について考察してきた。どんな目的語と意味関係を結ぶ場合に「V+“得”/“不”+“了”」構造はどんな意味・機能を表しているかというルールを示した。分析の結果を改めてまとめると、下記の通りである。

- ① 目的語が時間を表す場合、前置動詞が“用”である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「必要であるかどうか」・「かかるかどうか」という意味を表す。前置動詞が“等”である場合の「V+“得”+“了”」構造は「待ってられる」という意味を表す。
- ② 目的語に数量詞が含まれる場合及び目的語に“这么”“那么”という指示詞が含まれる場合において、前置動詞が“吃”“喝”“用”である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は、「V+きることができるかどうか」という意味を表す。
- ③ 目的語が無標である場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vできるかどうか」という意味を表し、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vが現れる可能性があるかどうか」という意味を表す。
- ④ 目的語が無標である場合、比較関係を表す動詞の“比”が前置動詞である場合の

「V+“得”/“不”+“了”」構造は「敵うかどうか」という意味を表す。

- ⑤ 目的語が「V+“得”/“不”+“了”」構造の後に顕現せず、前置動詞が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vできるかどうか」という意味を表し、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vが現れる可能性があるかどうか」という意味を表す。ただし、深層の目的語が“都”や“也”と共起し、意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の前に立つ場合はその限りではない。

以上が本章のまとめである。本章では、「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能と目的語の関係について解明してきたが、「V+“得”/“不”+“了”」構造に関しては、まだ十分に解決できていない部分がある。用例を観察していると、「V+“得”/“不”+“了”」構造が疑問詞と意味関係を結ぶ用例が多数見られた。この場合の「V+“得”+“了”」と「V+“不”+“了”」の構文的特徴についてこれまでの研究ではまだ解決できていないようである。この問題については、次章にて改めて論じることとする。

注

- 1) 本章でいう目的語は、深層の目的語ではなく、表層の目的語のことを指す。表層の目的語とは中国語でいうと動詞の後に位置する目的語のことであり、深層の目的語とは、動詞の意味関係にある目的語のことである。例えば、“这个酒我喝不了几天。”という文の場合、“喝”(飲む)という動詞の項構造は「喝(Agent <theme)」である。“这个酒”(この酒)は“喝”という動詞と意味関係にあるため、深層の目的語であり、“几天”は動詞“喝”の後の目的語の位置にあるため、表層の目的語として認められる。
- 2) 目的語が無標である場合とは、本章に挙げている目的語が時間を表す場合、目的語に数量詞が含まれる場合、目的語に指示詞の“这么”“那么”が含まれる場合という三つの場合に対し、これらの特徴を持っていないものが「V+“得”/“不”+“了”」構造の目的語に立つ場合のことを指す。
- 3) 本章では、中国の新聞サイトから抽出した“V 得了”計 2,383 例、“V 不了”計 12,418 例と、小説などの文学作品から収集した“V 得了”計 483 例、“V 不了”計 3,412 例の合計 18,759 例を調べた結果に基づく。さらに、“等不了多久”という目的語に“多久”という時間を表す表現もあるが、“多久”はすでにある語彙として定着し、具体的な時間を表しているとは認めがたいため、本章では、“多久”が「V+“得”/“不”+“了”」構造の目的語に立つ場合の用例を対象外とする。

第5章 「V+“得”/“不”+“了”」構造と疑問詞との関わりについて

1 はじめに

前章では、中国語の可能補語の「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について考察してきた。しかし、「V+“得”/“不”+“了”」構造の構文的分布について触れていなかった。そこで、本章では、「V+“得”/“不”+“了”」構造の構文的特徴の一つとして、疑問詞と意味関係を結ぶ場合の構文的特徴について考察する。

中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造¹⁾は、疑問詞と意味関係を結ぶことができる。しかし、「V+“得”/“不”+“了”」構造が疑問詞と意味関係を結ぶ場合、「V+“得”+“了”」と「V+“不”+“了”」は、必ずしも同じ構文的分布をなしているとは限らない。両者は具体的にどんな疑問詞と意味関係を結ぶことが可能であり、どんな疑問詞と意味関係を結ぶことができないかという問題についても、まだ十分に明らかにされていない。そこで、本章では、統語論の観点と意味論の観点から、疑問詞と意味関係を結ぶ場合に焦点を絞り、「V+“得”/“不”+“了”」構造と疑問詞との関わりについて考察する。

2 先行研究の問題点と本論文の立場

「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能に関する研究は李宗江(1994)、黄文龙(1998)、卢英顺(2010)、安本真弓(2010)などが挙げられる。李宗江(1994:375)は、「V+“得”/“不”+“了”」構造には二つの意味があると述べている。また、黄文龙(1998)では、“V 不了”には三つの意味があると述べている。さらに、卢英顺(2010:pp41-42)では、“V 不了(O)”の意味について、四つにまとめている。一方、安本真弓(2010:pp46-47)では、荒川清秀(2008:117-132)の主張を支持し、「V+“得”/“不”+“了”」構造の“了”は「完了」の意味しか表すことができないと述べている。これらの先行研究はいずれも“V 得了”と“V 不了”の意味解明に関するものであり、疑問詞と意味関係を結ぶ場合の“V 得了”と“V 不了”の構文的特徴については言及していない。

一方、“V 得了”と“V 不了”の語彙的制限に関する研究は、季艳(2005)、王明洲(2019)などが挙げられる。季艳(2005:70-71)では、“抱怨”“放弃”“服务”“等待”などの動詞は“V 不了”構造のVにはならないとされている。しかし、用例を調べてみたところ、下記の例(1)~(4)のような季艳(2005)の主張と相容れない用例がみられる。

- (1)“你该抱怨谁呢？你谁都抱怨不了。”(《财经》2019年3月15日)(君はそれを誰のせいにするのか。誰のせいでもないだろうが。)
- (2)你看，当年我们都对博客那么热爱，任谁都放弃不了的样子。(刘同《谁的青春不迷茫》2012)(ほら、当時の私たちはみんなブログが大好きで、誰もやめられない様子であった。)
- (3)但仅凭单个零售店，也服务不了更多的客户。(《人民网》2017年7月19日)(しかし、小売店一つだけでは、もっとたくさんのお客様にサービスを提供できないだろう。)
- (4)一个又一个问号使这个孩子一刻也等待不了，他要去追寻答案。(冯苓植《马背上的孩子》1978)(一つまた一つの疑問符は、この子を一刻も待つことができない状態にして、彼は答えを見つけに行くのだ。)

上記の例(1)～(4)において、季艳(2005:70-71)において使用不可とされている“抱怨”“放弃”“服务”“等待”が“V 不了”構造の V 項に使われている。このことから、季艳(2005)の“V 不了”の語彙的制限に関する記述は事実に合わないと言わざるを得ない。というのは、“V 不了”が使われている文環境に関係しているかもしれない。筆者が所持している用例においても、単文の平叙文に“抱怨”“放弃”“服务”“等待”が“V 不了”構造の V として機能する用例は確かになかった。ということは、“V 不了”構造が使用されている例(1)～(4)の文環境に注目すべきだと考えられる。いわば、例(1)(2)のような疑問詞の“谁”と共起する場合や、例(3)(4)のような“也”と共起する場合において、季艳(2005:pp70-71)の主張は通用しないと云わざるを得ない。

一方、王明洲(2019:28)では、“V 不了/得”を研究対象として位置づけ、“像”などの無限構造動詞²⁾は、“V 不了/得”構造の V として機能することができないとされている。“V 不得”は本論文の研究対象ではないため、また別の機会を検討することにするが、“像”は“V 不了”構造に使用することができないという王明洲(2019:28)の主張は、次の例(5)(6)からみれば、事実に合わないと思えなければならない。

- (5)陈妍希不笑时像俞灏明，笑起来又撞脸鹿晗了，不过无论如何撞脸，都像不了“不食人间烟火”的小龙女。(《人民网》2014年12月11日)(陈妍希が笑わない時は俞灏明に似ている。笑い出す時はまた鹿晗に似てきた。しかし、どんなに有名人と顔

が似ていたとしても、「世間知らず」の“小龙女”というキャラクターには似ていない。))

(6)演得真的是一点也像不了，我自己都心虚。(《人民网》2013年3月6日)(ちっとも演じようとしているキャラと似ていないので、私自身も心細い。)

例(5)(6)の“像”は“V 不了”構造に使われている。このことから、王明洲(2019:28)でいう“像”は“V 不了”構造に使用することができないという主張は事実には合わないと言わざるを得ない。この場合においても、“V 不了”構造の直前の“都”や“也”と関係していると考えられる。

以上のように、「V+“得”/“不”+“了”」構造に関する研究は、主にその意味・機能と語彙的制限に関する考察である。しかし、「V+“得”/“不”+“了”」構造が具体的にどんな疑問詞と意味関係を結ぶことが可能であるのかについて、まだ明確なルールが示されていないといえる。

さらに、「V+“得”/“不”+“了”」構造が疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶ場合、下記の例(7)のような現象も見逃してはならない。

(7)十几家人共用一个厨房，东家长西家短，谁瞒得了谁。(《人民网》2003年11月27日)(十何戸の家庭が一つの台所を共用していて、お互いの知られたくない事情など、誰が隠し事なんてできるか。)

(7')*十几家人共用一个厨房，东家长西家短，谁瞒不了谁。

(7'')十几家人共用一个厨房，东家长西家短，谁(也/都)瞒不了谁。

例(7)の“瞒”は“V 得了”構造に使われており、さらに疑問詞の“谁”と意味関係を結んでいる。この場合、“瞒得了”を“瞒不了”に置き換えると、例(7')のような不自然な表現になる。しかし、“也瞒不了”または“都瞒不了”に置き換えると、例(7'')のように自然な表現になり、しかも例(7)と似通った意味を表している。

なぜこのような現象が生じているのかについて、これまでの研究では、まだ明らかにされていない。このことからみれば、「V+“得”/“不”+“了”」構造が疑問詞と意味関係を結ぶ場合、“V 得了”構造と“V 不了”構造の構文的特徴は必ずしも一致するとは限らないと認められる。

そこで、本章では、この問題の解明に向けて、疑問詞と意味関係を結ぶ場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造の構文的分布に焦点を絞り、「V 得了」構造の場合と「V 不了」構造の場合に分けて、それぞれの構文的特徴について考察し、両者の共通点と相違点を浮き彫りにする。

以下、3節では疑問詞と意味関係を結ぶ場合の「V+“得”+“了”」構造の構文的特徴について考察し、4節では疑問詞と意味関係を結ぶ場合の「V+“得”+“了”」構造の構文的特徴について考察する。5節では疑問詞と意味関係を結ぶ場合の両者の構文的特徴の共通点と相違点について考察し、6節ではまとめを行う。

3 疑問詞と意味関係を結ぶ場合の「V+“得”+“了”」構造の構文的特徴

本節では、疑問詞と意味関係を結ぶ場合の「V+“得”+“了”」構造の構文的特徴について考察する。具体的に、「V+“得”+“了”」構造がどんな疑問詞と意味関係を結ぶことが可能であるかについて考察し、さらにその疑問詞と意味関係を結ぶ場合、疑問詞は「V+“得”+“了”」構造の主語の位置に立っているか、それとも目的語の位置に立っているかについて考察する。

コーパスを調べた結果、疑問詞と意味関係を結ぶ「V+“得”+“了”」構造は、「谁」と共起する文、「哪」と共起する文、「怎么」と共起する文、「为什么」と共起する文に分布している。そのため、本節では、「谁」と意味関係を結ぶ場合、「哪」と意味関係を結ぶ場合、「怎么」と意味関係を結ぶ場合、「为什么」と意味関係を結ぶ場合の四つの場合に分けて、「V+“得”+“了”」構造の構文的分布について考察する。

3.1 “谁”と意味関係を結ぶ場合

この節では、「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶことが可能であるかどうかについて考察する。

用例を調べてみると、疑問詞の“谁”は「V+“得”+“了”」構造と共起することが可能であるという仮説が立てられる。さらに、疑問詞の“谁”が「V+“得”+“了”」構造の主語の位置に立っている用例も、疑問詞の“谁”が「V+“得”+“了”」構造の目的語の位置に立っている用例も、また疑問詞の“谁”が同時に主語と目的語の位置に立つ用例も見られる。

そこで、この部分では、“谁”が主語として機能する場合、“谁”が目的語として機能する場合、“谁”が同時に「V+“得”+“了”」構造の主語と目的語に立つ場合という三つの場

合に分けて、「V+“得”+“了”」構造の構文的特徴について考察する。

3.1.1 “谁”が主語として機能する場合

この部分では、「V+“得”+“了”」構造の主語に疑問詞の“谁”が立つことが可能であるかどうかについて考察する。用例を調べた結果、「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶ場合、“谁”は「V+“得”+“了”」構造の主語になりうることを突き止めた。以下のような用例はその裏付けである。

(8)不行，动刀动枪，万一有个失闪，谁顾得了你！（李国文《冬天里的春天》1981）（だめだ！刀や槍などを使うことになると、もしもの場合、誰が君のことをかまっていられるか！）

(9)这个谁受得了。（《人民网》2014年7月21日）（誰がこれに耐えられるか？）

(10)初犯就如此大胆，若不严加惩罚，往后翅膀硬了，谁还管得了他！（熊召政《张居正》2007）（初犯でこの大胆さ、今回厳しく処罰しないと、今後力をつけたら、誰が彼を制御できるか！）

(11)自行车道仅 10 厘米，在此车道骑车犹如特技表演，没有高超的技术谁能骑得了？（《人民网》2011年7月25日）（自転車道はわずか10センチ、この道を自転車で走るのはまるで特技の披露会みたいで、優れた技術がないと、誰がこの道を自転車で走れるか！）

例(8)～(11)の“顾得了”“受得了”“管得了”“骑得了”は「V+“得”+“了”」構造に当てはまり、その主語は疑問詞の“谁”が用いられている。このことから、“谁”は、“V 得了”の主語に生起しうる。この場合、“谁+V 得了”は反語的な意味を表し、反語的な疑問文³⁾として、「誰もVができない」という意味を表している。

また、例(8)(9)の疑問詞の“谁”と「V+“得”+“了”」構造が直接つながっているのに対し、例(10)の“谁”と“V 得了”の間に“还”が用いられ、例(11)の“谁”と“V 得了”の間に“能”が使われている。この場合、“还”と“能”は、疑問詞の“谁”と「V+“得”+“了”」構造が意味関係を結ぶための必須条件ではないと思われる。なぜならば、例(10)の“还”と例(11)の“能”を削除していても、例(10)(11)のように、例(10)(11)の表す意味とさほど変わらない結果になる。

(10)“初犯就如此大胆，若不严加惩罚，往后翅膀硬了，谁管得了他!”

(11)自行车道仅 10 厘米，在此车道骑车犹如特技表演，没有高超的技术谁骑得了?

例(10)(11)の“谁”はそのまま“V 得了”と意味関係を結び、例(10)(11)と同じ意味を表している。このことから、“还”や“能”は“谁”と“V 得了”の間に使われているか否かは、“谁+V 得了”構文の必須条件ではないといえる。

以上のことから、「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶ場合、“谁”は「V+“得”+“了”」構造の主語になりうる。

3.1.2 “谁”が目的語として機能する場合

この部分では、「V+“得”+“了”」構造の目的語に疑問詞の“谁”が立つことが可能であるかどうかについて考察する。コーパスを調べた結果、疑問詞の“谁”は「V+“得”+“了”」構造の目的語に立つことが可能であると思われる。下記の用例はその裏付けとして挙げられる。

(12)他是得病死的，你说怨得了谁? (《人民网》2016 年 6 月 27 日)(彼は病死みたいで、それは誰のせいになるのだろうか。)

(13)这种自欺欺人的虚伪的表演又能骗得了谁呢? (《人民网》2009 年 3 月 20 日)(このような人を欺き、自分をも欺くような偽りのショーは、誰を騙すことができるのか。)

(14)试问，这些雕虫小技又能骗得了谁? (《人民网》2007 年 8 月 28 日)(誰がこんな手口で騙されるのか?)

(15)你帮得了谁? (席维亚《暧昧越过界》2012)(君は誰かを助けることができるのか。)

例(12)~(15)の“怨得了”“骗得了”“帮得了”は「V+“得”+“了”」構造であり、その目的語に疑問詞の“谁”が立っている。この場合、“V 得了+谁”も反語的な疑問文であり、「誰に対しても V ができない」という意味を表している。

このことから、疑問詞の“谁”は「V+“得”+“了”」構造の目的語に立つことが可能であるといえる。

3.1.3 “谁+V 得了+谁”構造の場合

コーパスを調べた結果、「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶ場合、疑問詞の“谁”が同時に「V+“得”+“了”」構造の主語と目的語に立つ用例がみられる。本章では、このような用例を“谁+V 得了+谁”構造として扱う。

次の例(16)～(19)に示すように、疑問詞の“谁”は同時に「V+“得”+“了”」構造の主語と目的語に立つことが可能である。

(16)十几家人共用一个厨房，东家长西家短，谁瞒得了谁。(例(7)を再掲)(十何戸の家庭が一つの台所を共用していて、お互いの知られたくない事情とか、誰が隠し事なんてできるか。)

(17)“怕什么呀！现在这年头谁管得了谁呀！”(莫应丰《将军吟》1980)(「何を怖がっているのか。今どき、誰が他の人を構ってられるのか。」)

(18)一大堆孩子在一起，真出了事，三更半夜的，谁救得了谁? (《人民网》2006年3月31日)(大人数の子供が集まって、なにかあったら、真夜中に、誰が他の人を助けるのか。)

(19)我主要想看看，谁改变得了谁。(《人民网》2000年12月1日)(誰が誰を変えることができるのか、私は見てみたい。)

例(16)～(19)の“瞒得了”“管得了”“救得了”“改变得了”は「V+“得”+“了”」構造として認められる。その主語と目的語に疑問詞の“谁”が生起している。この場合においても“谁+V 得了+谁”は反語的な意味であり、「誰もVができない」という意味を表している。このことから、“谁”は、「V+“得”+“了”」構造の主語と目的語に同時に立つことができるといえる。

この節をまとめると、“谁”は「V+“得”+“了”」構造の主語にも目的語にもなりうる。また、“谁+V 得了+谁”構造として機能する場合もある。この場合、「V+“得”+“了”」構造は“谁”の影響により、反語的な意味を表す。

3.2 “哪”と意味関係を結ぶ場合

この節では、「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“哪”と意味関係を結ぶことが可能であるかどうかについて考察する。さらに、この場合、疑問詞の“哪”は「V+“得”+“了”」構造

にどんな影響を表しているのかについて考察する。

コーパスを調べた結果、「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“哪”と意味関係を結ぶことが可能である。疑問詞の“哪”は「V+“得”+“了”」構造の直前に生じうる。この場合において、“哪”は本来の「どこ」という意味ではなく、相手に反論を言うような「できると思うか」という意味を表し、言外に「できるわけないだろう」という否定的な意味が含まれていると思われる。この主張は下記の例(20)~(23)によって支持される。

(20)如果光靠种地，哪应付得了家里那么多开销？(《人民网》2008年10月13日)(農耕だけを頼りに、お家のやりくりを維持できると思うか?)

(21)喜劇是世界上最高级的艺术啊，我哪弄得了? (《人民网》2013年3月8日)(コメディイは世界最高級の芸術だろう。私にできると思うか?)

(22)他们说失踪要满 24 小时才能报案，我哪等得了那么久？(风羽《你家有熊猫吗》2009)(失踪は24時間経たないと通報できないと言われた。私はそんな長く待ってられると思うか?)

(23)太浪费钱了，我们哪用得着那么多？(《人民网》2015年7月29日)(お金がもっていない。私たちは、あれほど多くのものを使い切れると思うか?)

例(20)~(23)の“应付得了”“弄得了”“等得了”“用得着”は「V+“得”+“了”」構造であり、その直前に疑問詞の“哪”が使われている。例(20)の「V+“得”+“了”」構造は「お家のやりくりを維持できるわけないだろう」という意味を表し、例(21)の「V+“得”+“了”」構造は「私ができるわけないだろう」という意味を表し、例(22)の「V+“得”+“了”」構造は「そんな長くは待てるわけないだろう」という意味を表し、例(23)の「V+“得”+“了”」構造は「使いきれないわけないだろう」という意味を表していることから、“哪”は「V+“得”+“了”」構造の直前に現れる場合、反語的な疑問文として見なされる。

このことから、「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“哪”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。疑問詞の“哪”は「V+“得”+“了”」構造の直前に現れる場合、言外に「できるわけないだろう」という否定的な意味を表す。

3.3 “怎么”と意味関係を結ぶ場合

この節では、「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“怎么”と意味関係を結ぶ場合の意味・用

法について考察する。さらに、この場合、疑問詞の“怎么”は「V+“得”+“了”」構造にどんな影響を与えているのかについて考察する。

用例を観察した結果、「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“怎么”と意味関係を結ぶことが可能である。下記の例(24)~(27)に示すように、この場合も疑問詞の“哪”と意味関係を結ぶ場合と同じように、言外に「できるわけないだろう」という否定的な意味が含まれていると認められる。

(24)我一个拿锄头的，怎么学得了马云的姿势动作？(《人民网》2018年7月5日)(私のような鋤を扱う人間が、「馬雲」のような姿勢や動作を真似できるか。)

(25)长年累月做假戏，人怎么受得了呀？(陈忠实《白鹿原》1993)(長年偽物の芝居を務めて、人が耐えられると思うか？)

(26)这种质量怎么可能抵挡得了高空坠物？(《人民网》2019年4月18日)(このような品質では、高層住宅の落下物に対応できるのか？)

(27)才6岁的孩子，刚刚读小学一年级，怎么受得了大人的巴掌！(《人民网》2016年9月27日)(まだ6歳で小学1年生になったばかりの子供が大人からビンタを受けたら、耐えられると思うか？)

例(24)~(27)の“学得了”“受得了”“抵挡得了”は「V+“得”+“了”」構造であり、その前に疑問詞の“怎么”が生起している。例(24)の「V+“得”+“了”」構造は「真似できるわけがないだろう」という意味を、例(25)の「V+“得”+“了”」構造は「耐えられるわけがないだろう」という意味を、例(26)の「V+“得”+“了”」構造は「対応できるわけがないだろう」という意味を、例(27)の「V+“得”+“了”」構造は「耐えられるわけがないだろう」という意味を表している。

このことから、「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“怎么”と意味関係を結ぶことが可能であると認めなければならない。疑問詞の“怎么”は「V+“得”+“了”」構造の直前に現れる場合、言外に「できるわけないだろう」という否定的な意味を表す。

3.4 “为什么”と意味関係を結ぶ場合

この節では、「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“为什么”と意味関係を結ぶことが可能であるかどうかについて考察する。

コーパスに基づき、「V+“得”+“了”」構造は疑問詞の“为什么”と意味関係を結ぶことが可能であると思われる。しかし、この場合、“谁”“哪”“怎么”と意味関係を結ぶ場合のような反語的な否定の意味合いはなく、“为什么”は「なぜ」という意味を表す。その証左として下記の例(28)～(31)を挙げておく。

(28)赵子龙为什么跑得了? 因为曹操爱才, 他想活捉赵子龙, 想收服他。(《人民网》2008年3月28日)(趙子龍はなぜ逃げられるのか? それは、曹操が人材を欲しがっているからだ。曹操は趙子龍を生け捕りにし、自分の傘下に入れておきたいと思っている。)

(29)俗话说“一日夫妻百日恩”, 陈某为什么下得了如此毒手? (《人民网》2012年1月31日)(ことわざに曰く「一日夫妻百日恩」、陳はなぜそこまでひどい仕打ちができるのか。)

(30)孙行者为什么治得了猪八戒, 他也受过八戒的愚弄, 但他摸透八戒那臭脾气, 有办法治他。(《人民网》2011年2月23日)(孫行者はなぜ猪八戒をなんとかできるのか。それは彼も猪八戒にからかわれたことがあり、八戒の性分をよく知っているから、なんとかできたのである。)

(31)就连录音的乐队有时候都会嚷嚷着好冷, 然后出来走动一下, 但是红老师没有出来过, 我都不知道她为什么受得了。(《广州文史(八十辑)》2017)(レコーディングをしに来たバンドでも「寒い」と言い、外に出てしばらく歩いて体を動かしてみたりすることもあったけど、紅先生は一度も外に出たことがなく、なぜ耐えられるのか。)

例(28)～(31)の“跑得了”“下得了”“治得了”“受得了”は「V+“得”+“了”」構造として認められる。「V+“得”+“了”」構造の前に疑問詞の“为什么”が使われている。この場合、“为什么”は「なぜ」という意味を表し、「V+“得”+“了”」構造と、答えを必要とする一般的な疑問文を構成している。

このことから、「V+“得”+“了”」構造は“为什么”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。“为什么”と「V+“得”+“了”」構造は、一般的な疑問文を構成し、「なぜ V できる」という意味を表す。

第3節をまとめると、「V+“得”+“了”」構造は疑問詞の“谁”“哪”“怎么”“为什么”と意味

関係を結ぶことが可能である。ただし、“谁”“哪”“怎么”と意味関係を結ぶ場合、「V+“得”+“了”」構造は反語的な意味を表し、“为什么”と意味関係を結ぶ場合には反語的な意味が含まれていない。

4 疑問詞と意味関係を結ぶ場合の「V+“不”+“了”」構造の構文的特徴

本節では、疑問詞と意味関係を結ぶ場合の「V+“不”+“了”」構造の構文的特徴について考察する。具体的に、「V+“不”+“了”」構造がどんな疑問詞と意味関係を結ぶことが可能であるかについて考察し、さらにその疑問詞と意味関係を結ぶ場合、疑問詞は「V+“得”+“了”」構造の主語に立っているか、それとも目的語に立っているかという問題について考察する。

コーパスを調べた結果、疑問詞と意味関係を結ぶ「V+“不”+“了”」構造は、“谁”と共起する文、“怎么”と共起する文、“为什么”と共起する文に分布しているから、本節では、“谁”と意味関係を結ぶ場合、“怎么”と意味関係を結ぶ場合、“为什么”と意味関係を結ぶ場合に分けて、「V+“不”+“了”」構造の構文的分布について考察する。

4.1 “谁”と意味関係を結ぶ場合

以下では、疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶ場合の「V+“不”+“了”」構造の構文的分布について考察する。コーパスを調べた結果、「V+“不”+“了”」構造が疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶ場合は、“谁”が「V+“不”+“了”」構造の主語として機能する文、“谁+V 不了+谁”構造の文に分布している。そのため、この節では、“谁”が「V+“不”+“了”」構造の主語として機能する場合と、“谁+V 不了+谁”構造の場合にわけて「V+“不”+“了”」構造の構文的特徴について考察する。

4.1.1 “谁”が「V+“不”+“了”」構造の主語として機能する場合

コーパスを調べた結果、「V+“不”+“了”」構造が疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶ場合、“谁”は「V+“不”+“了”」構造の主語に生起することが可能である。この場合、「誰もVができない」という完全否定の意味を表している。下記の用例はその裏付けである。

(32)唐季礼表示,自己确实希望培养动作明星的接班人,但成龙是谁也代替不了的。(《人民网》2020年1月20日)(唐季礼は、自分は確かにアクションスターの育成に力

- を入れようとしている。しかし誰もジャッキー・チェンのかわりにはならない。)
- (33)这两件事，谁也帮不了我，老师不能，父母也不能。(《人民网》2006年10月19日)(この2件に関しては、私に協力することは誰にもできない。先生にもできず、両親にもできない。)
- (34)这样一来，除非所有牢门都被打开，否则谁也走不了。(何马《藏地密码》2003)(こうすれば、すべての牢屋のドアを開けない限り、誰も外には行けない。)
- (35)每年的这个时候，谁也抵挡不了竹笋的诱惑。(《人民网》2019年8月3日)(この時期になると、誰もタケノコの誘惑に負けてしまう。)

例(32)~(35)の“代替不了”“帮不了”“走不了”“抵挡不了”は「V+“不”+“了”」構造として機能している。その主語に疑問詞の“谁”が立っている。この場合、「誰もVができない」という完全否定の意味を表している。このことから、疑問詞の“谁”は「V+“不”+“了”」構造の主語になりうるといえる。

さらに、例(32)~(35)の場合、“谁”と“V 不了”の間には“也”が使われている。この場合、“也”は、疑問詞の“谁”は「V+“不”+“了”」構造の主語に立つための必要な構文的条件として考えられる。なぜならば、例(32)~(35)の“也”を削除すると、次の例(32')~(35')のように不自然な表現になる。

- (32')*唐季礼表示，自己确实希望培养动作明星的接班人，但成龙是谁代替不了的。
- (33')*这两件事，谁帮不了我，老师不能，父母也不能。
- (34')*这样一来，除非所有牢门都被打开，否则谁走不了。
- (35')*每年的这个时候，谁抵挡不了竹笋的诱惑。

例(32')~(35')に示すように、“谁”と「V+“不”+“了”」構造の間に“也”が使われていないがために、不自然な表現と見なされる。このことからみれば、疑問詞の“谁”は「V+“不”+“了”」構造の主語に立つためには、副詞の“也”の助けが必要であると認めなければならない。

さらに、下記の例(36)~(39)のような、疑問詞の“谁”は「V+“不”+“了”」構造の主語に立ち、その間に副詞の“都”が使われている用例が挙げられる。この場合も、疑問詞の“谁”は「V+“不”+“了”」構造の主語に立つためには副詞の“都”が必要であるかどうかについて

て検証する。

(36)女儿懂事后,我们就经常对她说,自己的前途要靠自己去奔,谁都帮不了你。(《人民网》2006年5月22日)(娘が物心ついた時から、「自分の未来は自分でつかみ取れ!誰も君の助けにはならない」と私たちは何度も伝えていた。)

(37)上百只信鸽整天咕咕咕叫,长此以往,谁都受不了。(《人民网》2019年8月16日)(百羽以上の鳩が一日中ずっとポッポーと鳴いていて、この状況がずっと続くと、誰も耐えられない。)

(38)他认准的理,谁都改变不了。(陈政华《一世枭雄》2012)(彼が正しいと認めた考えは、誰にも変えられない。)

(39)“我好辛苦,谁都帮不了我。”(《人民网》2014年12月26日)(「私は辛い。誰も助けてくれない。」)

例(36)~(39)の“帮不了”“受不了”“改变不了”“帮不了”は「V+“不”+“了”」構造であり、その主語に疑問詞の“谁”が使われている。さらに、“谁”と“V 不了”の間には助詞の“都”が使われている。このような場合、「V+“不”+“了”」構造は「誰もVができない」という形で完全否定の意味を表している。

ただし、副詞の“都”の働きを無視してはならない。例(36)~(39)の“都”の役割がないと、下記の例(36')~(39')のように不自然な表現になる。

(36')*女儿懂事后,我们就经常对她说,自己的前途要靠自己去奔,谁帮不了你。

(37')*上百只信鸽整天咕咕咕叫,长此以往,谁受不了。

(38')*他认准的理,谁改变不了。

(39')*“我好辛苦,谁帮不了我。”

例(36')~(39')の“谁”が「V+“不”+“了”」構造の主語に立ち、その間に“都”が使われておらず、いずれも不自然な表現として認められる。このことから、疑問詞の“谁”が「V+“不”+“了”」構造の主語に立つためには、副詞の“都”の助けが必要であると認めなければならない。

この部分をまとめると、疑問詞の“谁”は「V+“不”+“了”」構造の主語に立つことが可

能である。ただし、副詞の“也”や“都”の助けが必要である。この場合、「誰もVができない」という完全否定の意味を表している。

4.1.2 “谁+V 不了+谁”構造の場合

疑問詞の“谁”は“谁+V 不了+谁”のような意味関係を構成することがある。コーパスを調べた結果、疑問詞“谁”が単独で「V+“不”+“了”」構造の目的語に使われる用例はみられなかった⁴⁾。ただし、疑問詞の“谁”が同時に「V+“不”+“了”」構造の主語と目的語に立つ“谁+V 不了+谁”構造の用例はみられる。

用例を調べた結果、“谁+V 不了+谁”構造は、「誰もVができない」という完全否定の意味を表す。この場合においても、“谁”が「V+“不”+“了”」構造の主語に立つ場合と同じように、主語の“谁”と「V+“不”+“了”」構造の間に、“也”や“都”が必要だと思われる。以下の用例はその裏付けである。

- (40)大家都知根知底，谁是什么人，什么脾气秉性，谁也瞒不了谁。(《人民网》2019年7月13日)(皆はお互いをよく知っていて、誰がどういう人で、どういう性分なのか、誰も相手に対して隠し事ができない。)
- (41)写作是孤独的，谁也帮不了谁。(《人民网》2010年10月8日)(文章を書くことは孤独であり、誰も相手への協力はできない。)
- (42)不分高低，谁也管不了谁。(林汉达《上下五千年》1991)(優劣がつけられず、だれも相手のことを制御することはできない。)
- (43)这样的观点来来回回碰撞了很多回，但谁也说服不了谁。(《人民网》2019年7月25日)(こういう観点は何度もぶつかり合ってきたが、誰も納得できる人はいない。)

例(40)～(43)の“瞒不了”“帮不了”“管不了”“说服不了”は「V+“不”+“了”」構造として機能している。その主語と目的語に疑問詞の“谁”が立っている。この場合、「誰もVができない」という完全否定の意味を表している。このことから、疑問詞の“谁”は同時に「V+“不”+“了”」構造の主語と目的語に立つことが可能であるといえる。

さらに、例(40)～(43)の場合、“谁”と“V 不了”の間には“也”が使われている。この場合においても、疑問詞の“谁”が「V+“不”+“了”」構造と意味関係を結ぶためには、副詞の“也”

の助けが必要だと思われる。というのは、例(40)～(43)における“也”を削除すると、次の例(40')～(43')のように不自然な表現になる。

(40')*大家都知根知底, 谁是什么人, 什么脾气秉性, 谁瞒不了谁。

(41')*写作是孤独的, 谁帮不了谁。

(42')*不分高低, 谁管不了谁。

(43')*这样的观点来来回回碰撞了很多回, 但谁说服不了谁。

例(40')～(43')に示すように、主語の“谁”と「V+“不”+“了”」構造の間に“也”が使われていないため、いずれも不自然な表現と見なされる。このことから、副詞の“也”は、疑問詞の“谁”が「V+“不”+“了”」構造と意味関係を結ぶための必要な構文的条件と認めなければならない。

一方、疑問詞の“谁”が同時に「V+“不”+“了”」構造の主語と目的語に立ち、その間に副詞の“都”が使われている用例もみられる。このような場合、副詞の“都”を伴う“谁+V 不了+谁”は完全否定の意味を表すものである。

(44)两方的争论无休无止, 谁都说服不了谁。(《人民网》2005年3月29日)(両者の論争は終わらず、誰も相手を説得できない。)

(45)我们真是各奔东西, 谁都顾不了谁。(齐翔安《遥远而温馨的回忆》1990)(私達は本当にみなおのおの別のところへ行き、誰も相手を構うことができない。)

(46)人各有命, 谁都帮不了谁。(鬼面《仙人传奇》2004)(人にはそれぞれ歩むべき道があり、誰も他人を助けることができない。)

(47)说到底,他们都是他们自己,他们谁都代替不了谁。(魏微《薛家巷》2012)(結局のところ、彼らは彼ら自身にしかならない。誰にもその代わりにならない。)

例(44)～(47)の“说服不了”“顾不了”“帮不了”“代替不了”は「V+“不”+“了”」構造としてとらえられ、その主語も目的語も疑問詞の“谁”によって担われている。この場合、主語の“谁”と「V+“不”+“了”」構造の間に“都”が使われている。この場合、「誰もVができない」という完全否定の意味を表している。

また、疑問詞の“谁”が「V+“不”+“了”」構造と意味関係を結ぶためには、副詞の“都”の

助けが必要であるかどうかについて検証する。例(44)～(47)の“都”を削除すると、下記の例(44')～(47')のように不自然な表現になる。

(44')* 两方的争论无休无止, 谁说服不了谁。

(45')* 我们真是各奔东西, 谁顾不了谁。

(46')* 人各有命, 谁帮不了谁。

(47')* 说到底,他们都是他们自己,他们谁代替不了谁。

例(44')～(47')の場合、主語の“谁”と“V 不了”の間に“都”が使われておらず、不自然な表現になる。このことから、疑問詞の“谁”が「V+“不”+“了”」構造の主語に立つためには、副詞の“都”の助けが必要であると認められる。

この部分をまとめると、疑問詞の“谁”が「V+“不”+“了”」構造の主語に立つことも、疑問詞の“谁”が同時に「V+“不”+“了”」構造の主語と目的語に立つことが可能である。ただし、副詞の“也”や“都”の助けが必要である。この場合、「誰もVができない」という完全否定の意味を表している。

4.2 “怎么”と意味関係を結ぶ場合

この節では、「V+“不”+“了”」構造が疑問詞の“怎么”と意味関係を結ぶことが可能であるかどうかについて考察する。さらに、そのような構造において、疑問詞の“怎么”が「V+“不”+“了”」構造にどんな影響を与えているのかについて考察する。

用例を観察してみたところ、「V+“不”+“了”」構造が疑問詞の“怎么”と意味関係を結ぶことが可能である。この場合はさらに反語的な意味を表す場合と、一般的な疑問の意味を表す場合に分けられる。次の例(48)～(51)において、「V+“不”+“了”」構造は疑問詞の“怎么”とともに反語的な疑問文を構成している。

(48)我怎么负不了责? 我已经过了 18 岁, 是一个成年人了! (江新《长发飞扬的日子》

2011)(私はどこが責任をとれないと言うの? 私はもう 18 歳で、もう立派な大人だから!)

(49)你长脑子了么? 你怎么忘不了吃饭呀? (《人民网》2004 年 3 月 17 日)(あなたはバカなのか? ご飯を食べることはなぜ忘れられないのか?)

(50)别人能吃得了的苦，咱怎么吃不了? (《人民网》2016年5月31日)(他人が耐えられる辛さなら、私はなぜ耐えられないのか。)

(51)“妈妈,你们能受得了,我怎么受不了?”(王桂凤《天涯追梦》2013)(ママ、君たちは我慢できるのに、なぜ私が我慢できないと決めつけるのか?)

例(48)~(51)の“受不了”“忘不了”“吃不了”“受不了”は「V+“不”+“了”」構造であり、その直前に疑問詞の“怎么”が使われている。この場合は反語的な疑問文として認められる。例(48)の「V+“不”+“了”」構造は「私がちゃんと責任を取れる」という意味を、例(49)の「V+“不”+“了”」構造は「ご飯はちゃんと覚えている」という意味を、例(50)の「V+“不”+“了”」構造は「私は耐えられる」という反対の意味を、例(51)の「V+“不”+“了”」構造は「私は耐えられる」という反対の意味を表している。

また、次の(52)~(55)に示すように、「V+“不”+“了”」構造が疑問詞の“怎么”と意味関係を結ぶ場合、反語的な意味を表しているのではなく、“怎么”が一般的な疑問の意味を表す場合もある。

(52)这歉意不是因为自己说错了,而是觉得自己怎么控制不了自己的愤怒呢? (《人民网》2015年1月21日)(申し訳ないと感じたのは自分が言い間違えたからではなく、自分はなぜ怒りをコントロールできないのかと思ったからである)

(53)现在你们都上班了, 怎么办不了事呢? (《人民网》2013年2月22日)(君たちは今もう出勤中だったら、なぜこれができないのか。)

(54)我们怎么做不了这么好吃? (江暖《我们曾经年轻》2006)(私たちはなぜこんなにおいしくできないのか。)

(55)你怎么解决不了问题? (《人民网》2013年1月29日)(なぜ問題を解決できないのか?)

例(52)~(55)の“控制不了”“办不了”“做不了”“解决不了”は「V+“不”+“了”」構造として機能し、疑問詞の“怎么”と意味関係を結んでいる。この場合、“怎么”は「なぜ」という意味を表し、例(52)~(55)は一般的な疑問文として認められる。

このことから、「V+“不”+“了”」構造が疑問詞の“怎么”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。この場合、反語的な意味を表す場合も一般的な疑問の意味を表す場合があ

るといえる。

4.3 “为什么”と意味関係を結ぶ場合

この節では、「V+“不”+“了”」構造が疑問詞の“为什么”と意味関係を結ぶことが可能であるかどうかについて考察する。さらに、この場合、疑問詞の“为什么”は「V+“不”+“了”」構造にどんな影響を表しているのかについて考察する。

コーパスを調べた結果、「V+“不”+“了”」構造は疑問詞の“为什么”と意味関係を結ぶことが可能であることが明らかである。この場合、“为什么”は「なぜ」という意味を表し、一般的な疑問の意味を表しているのではないかと思われる。次の例(56)～(59)はその裏付けである。

(56)我为什么当不了CEO? (《人民网》2000年11月15日)(私はなぜCEOになれないのか?)

(57)我买的手机上也有很多预装软件,为什么卸载不了? (《人民网》2014年1月27日)(私の買ったスマホにもたくさんのアプリが入っていて、なぜ削除できないのか。)

(58)定好的票,为什么上不了机呢? (《人民网》2018年4月28日)(ちゃんと予約したチケットなのに、なぜ飛行機に乗れないのか。)

(59)为什么去不了北京? (《人民网》2020年3月9日)(なぜ北京に行けないのか?)

例(56)～(59)の“当不了”“卸载不了”“上不了”“去不了”は「V+“不”+“了”」構造に当てはまる。“V 不了”の前に疑問詞の“为什么”が使われている。この場合、「なぜVできない」という一般的な疑問の意味を表している。

このことから、「V+“不”+“了”」構造が疑問詞の“为什么”と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。この場合、反語的な意味を表す場合も一般的な疑問の意味を表す場合もあるといえる。

第4節をまとめると、「V+“不”+“了”」構造は疑問詞の“谁”“怎么”“为什么”と意味関係を結ぶことが可能である。“谁”と意味関係を結ぶ場合、完成否定の意味を表し、副詞の“也”や“都”の助けが必要である。“怎么”と意味関係を結ぶ場合、反語的な意味を表す場合と一般的な疑問の意味を表す場合に分けられる。“为什么”と意味関係を結ぶ場合は一般的な疑

問の意味を表す。

5 「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の構文的分布の共通点と相違点

本節では、3節で明らかにした「V+“得”+“了”」構造と疑問詞との関係と4節で得られた「V+“不”+“了”」構造と疑問詞との構文的分布に基づき、“谁”と意味関係を結ぶ場合、“哪”と意味関係を結ぶ場合、“怎么”と意味関係を結ぶ場合、“为什么”と意味関係を結ぶ場合に分けて、「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の共通点と相違点を明らかにする。

5.1 “谁”と意味関係を結ぶ場合

この節では、疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶ場合、「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の共通点と相違点について浮き彫りにする。

両者の共通点として、下記の例(60)～(63)に示すように、疑問詞の“谁”は「V+“得”+“了”」構造の主語として機能することも、「V+“不”+“了”」構造の主語としても機能することができる。

(60)不行，动刀动枪，万一有个失闪，谁愿得了你！(例(8)を再掲)(だめだ！刀や槍などを使うことになると、もしもの場合、誰が君のことをかまってくれるか！)

(61)这个谁受得了。(例(9)を再掲)(誰がこれに耐えられるか？)

(62)这样一来，除非所有牢门都被打开，否则谁也走不了。(例(34)を再掲)(こうすれば、すべての牢屋のドアを開けない限り、誰も外には行けない。)

(63)他认准的理，谁都改变不了。(例(38)を再掲)(彼が正しいと認めた考えは、誰にも変えられない。)

例(60)(61)の場合、疑問詞の“谁”は「V+“得”+“了”」構造の主語として機能し、例(62)(63)の場合、疑問詞の“谁”は「V+“不”+“了”」構造の主語として機能している。このことから、疑問詞の“谁”は「V+“得”+“了”」構造の主語としても「V+“不”+“了”」構造の主語としても機能することができるといえる。ただし、疑問詞の“谁”が「V+“不”+“了”」構造の主語として機能するためには、副詞の“也”や“都”の助けが必要である。

また、「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の共通点として、“谁”が同時に

主語と目的語に立つ“誰+V 得了+誰”構造と“誰+V 不了+誰”構造も挙げられる。そのような場合の「V+“不”+“了”」構造には、副詞の“也”や“都”の助けが必要であるのに対して、「V+“得”+“了”」構造にはそのような制限が見られなかった。

そのため、本章の2節に挙げている例(7)のような現象が生じたのではないかと考えられる。

(64)十几家人共用一个厨房，东家长西家短，谁瞒得了谁。(例(7)を再掲)(十何戸の家庭が一つの台所を共用していて、お互いの知られたくない事情など、誰が隠し事なんてできるか。)

(64')*十几家人共用一个厨房，东家长西家短，谁瞒不了谁。

(64'')十几家人共用一个厨房，东家长西家短，谁(也/都)瞒不了谁。

例(64)の“瞒得了”という「V+“得”+“了”」構造は疑問詞の“誰”と意味関係を結び、「誰も隠し事ができない」という反語的な意味を表し、例(64'')の“瞒不了”という「V+“不”+“了”」構造は、疑問詞の“誰”という意味関係を結び、同じく「誰も隠し事ができない」という完全否定の意味を表している。そのため、“誰+V 得了+誰”構造と“誰+V 不了+誰”構造は似通った意味を表している。また、例(64')が不自然な表現であるのは、4節で証明した通り、“V 不了”構造は“也”や“都”の助けがないと、“誰”と意味関係を結ぶことができないからである。

一方、疑問詞の“誰”と意味関係を結ぶ場合、「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の相違点として、疑問詞の“誰”は、「V+“得”+“了”」構造の目的語に立つことが可能であるが、単独で「V+“不”+“了”」構造の目的語に立つことができないということが挙げられる。

(65)试问，这些雕虫小技又能骗得了谁？(例(14)を再掲)(誰がこんな手口で騙されるのか？)

(66)你帮得了谁？(例(15)を再掲)(君は誰かを助けることができるのか。)

(65')*这些雕虫小技又能骗不了谁。

(66')*你帮不了谁。

例(65)(66)の“骗得了”と“帮得了”という「V+“得”+“了”」構造の目的語に疑問詞の“谁”が立っている。この場合、“骗得了”“帮得了”を“骗不了”“帮不了”という「V+“不”+“了”」構造に置き換えると、不自然な表現になる。このことから、疑問詞の“谁”は単独で「V+“得”+“了”」構造の目的語として機能できるが、単独で「V+“不”+“了”」構造の目的語として機能することはできないといえる。

この節をまとめると、疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶ場合、疑問詞の“谁”は「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の主語に使用することが可能である。また、疑問詞の“谁”は同時に両者の主語と目的語に立つことが可能である。ただし、「V+“不”+“了”」構造の場合には、副詞の“也”や“都”の助けが必要である。一方、疑問詞の“谁”は単独で「V+“得”+“了”」構造の目的語として機能できるが、単独で「V+“不”+“了”」構造の目的語として機能することはできない。

5.2 “哪”と意味関係を結ぶ場合

この節では、疑問詞の“哪”と意味関係を結ぶ場合、「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の共通点と相違点について考察する。

「V+“得”+“了”」構造が疑問詞の“哪”と意味関係を結ぶ用例はみられるのに対し、「V+“不”+“了”」構造が“哪”と意味関係を結ぶ用例はみられなかった。「V+“不”+“了”」構造は“哪”と意味関係を結ぶことができないと考えられる。

(67)如果光靠种地，哪应付得了家里那么多开销？(例(20)を再掲)(農耕だけを頼りに、お家のやりくりを維持できると思うか?)

(68)喜剧是世界上最高级的艺术啊，我哪弄得了？(例(21)を再掲)(コメディは世界最高級の芸術だろう。私にできると思うか?)

(67)*如果光靠种地，哪应付不了家里那么多开销？

(68)*喜剧是世界上最高级的艺术啊，我哪弄不了？

例(67)(68)の“应付得了”“弄得了”という「V+“得”+“了”」構造は、疑問詞の“哪”と意味関係を結んでいる。そのような場合の“应付得了”“弄得了”は“应付不了”“弄不了”という「V+“不”+“了”」構造に置き換えると不自然な表現になる。

このことから、疑問詞の“哪”は「V+“得”+“了”」構造と意味関係を結ぶことが可能で

あるのに対し、「V+“不”+“了”」構造と意味関係を結ぶことはできないと認めなければならない。

5.3 “怎么”と意味関係を結ぶ場合

この節では、疑問詞の“怎么”と意味関係を結ぶ場合、「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の共通点と相違点について考察する。この場合、下記の例(69)～(72)に示すように、「V+“得”+“了”」構造も「V+“不”+“了”」構造も“怎么”と意味関係を結ぶことが可能である。

(69)我一个拿锄头的，怎么学得了马云的姿势动作？(例(24)を再掲)(私のような鋤を扱う人間が、「馬雲」のような姿勢や動作を真似できるか。)

(70)长年累月做假戏，人怎么受得了呀？(例(25)を再掲)(長年偽物の芝居を務めて、人が耐えられると思うか？)

(71)我怎么负不了责？我已经过了18岁，是一个成年人了！(例(48)を再掲)(私はどこが責任をとれないと言うの？私はもう18歳で、立派な大人だから！)

(72)别人能吃得了的苦，咱怎么吃不了？(例(50)を再掲)(他人が耐えられる辛さなら、私がなぜ耐えられないだろうか。)

例(69)(70)の“学得了”“受得了”は「V+“得”+“了”」構造として機能し、例(71)(72)の“负不了”“吃不了”は「V+“不”+“了”」構造として機能し、疑問詞の“怎么”と意味関係を結んでいる。

このことから、疑問詞の“怎么”は、「V+“得”+“了”」構造とも「V+“不”+“了”」構造とも意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

5.4 “为什么”と意味関係を結ぶ場合

この節では、疑問詞の“为什么”と意味関係を結ぶ場合、「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の共通点と相違点について考察する。次の例(73)～(76)に示すように、「V+“得”+“了”」構造も「V+“不”+“了”」構造も疑問詞の“为什么”と意味関係を結ぶ事が可能である。

(73)赵子龙为什么跑得了? (例(28)を再掲)(趙子龍はなぜ逃げられるのか?)

(74)孙行者为什么治得了猪八戒, 他也受过八戒的愚弄, 但他摸透八戒那臭脾气, 有办法治他。(例(30)を再掲)(孫行者はなぜ猪八戒をなんとかできるのか。それは彼も猪八戒にからかわれたことがあり、八戒の性分をよく知っているから、なんとかできたのである。)

(75)我为什么当不了CEO? (例(56)を再掲)(私はなぜCEOになれないのか?)

(76)定好的票, 为什么上不了机呢? (例(58)を再掲)(ちゃんと予約したチケットなのに、なぜ飛行機に乗れないのか。)

例(73)(74)の“跑得了”“治得了”は「V+“得”+“了”」構造として機能し、例(75)(76)の“负不了”“吃不了”は「V+“得”+“了”」構造として機能し、疑問詞の“为什么”と意味関係を結んでいる。このことから、疑問詞の“为什么”は、「V+“得”+“了”」構造とも「V+“不”+“了”」構造とも意味関係を結ぶことが可能であるといえる。

本節をまとめると、疑問詞の“谁”“怎么”“为什么”は「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造と意味関係を結ぶことが可能である。疑問詞の“哪”は「V+“得”+“了”」構造と意味関係を結ぶことが可能であるのに対し、「V+“不”+“了”」構造と意味関係を結ぶことができない。

さらに、疑問詞の“谁”は「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の主語に立つことも、同時に主語と目的語に立つことが可能である。ただし、「V+“不”+“了”」構造が疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶためには、副詞の“也”や“都”の助けが必要である。一方、疑問詞の“谁”は単独で「V+“得”+“了”」構造の目的語として機能できるが、単独で「V+“不”+“了”」構造の目的語として機能することができない。

6 本章のまとめ

本章では、「V+“得”/“不”+“了”」構造が疑問詞と意味関係を結ぶ場合、「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造は、具体的にどんな疑問詞と意味関係を結ぶことが可能であるかについて考察し、「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造と共起できる疑問詞の共通点と相違点を浮き彫りにしてきた。分析の結果を改めてまとめると、以下のようになる。

- ① 「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造は、疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶことが可能である。
- ② 疑問詞の“谁”は「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造の主語に立つことも、同時に主語と目的語に立つことも可能である。ただし、「V+“不”+“了”」構造が疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶためには、副詞の“也”や“都”の助けが必要である。一方、疑問詞の“谁”は単独で「V+“得”+“了”」構造の目的語として機能できるが、単独で「V+“不”+“了”」構造の目的語として機能することができない。
- ③ 「V+“得”+“了”」構造は、疑問詞の“哪”と意味関係を結ぶことが可能であるのに対し、「V+“不”+“了”」構造はそれと意味関係を結ぶことができない。
- ④ 「V+“得”+“了”」構造も「V+“不”+“了”」構造も疑問詞の“怎么”と意味関係を結ぶことが可能である。「V+“得”+“了”」構造は疑問詞の“怎么”と反語的疑問文しか構成できないのに対し、「V+“不”+“了”」構造は疑問詞の“怎么”と反語的な疑問文も一般的な疑問文も構成できる。
- ⑤ 「V+“得”+“了”」構造も「V+“不”+“了”」構造も疑問詞の“为什么”と意味関係を結ぶことが可能である。

以上の①～⑤は本章のまとめである。これまでに中国語の可能補語の「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能と構文的特徴について考察してきた。今後の課題であるが、日本語の可能の意味を表す複合動詞についても注目する必要がある。次章からは、日本語の「V+得る」という複合動詞について考察する。

注

- 1) 本章では、“下得了手”というような“下手”という動詞フレーズに“得了”や“不了”を挿入するタイプも「V+“得”/“不”+“了”」構造とみなし、研究の対象とする。ただし、“好”のような形容詞が V として機能する“好得了”“好不了”のようなケースは、異なる意味を表しているものとみなし、本論文の対象外とする。
- 2) 「無限構造動詞」(“无限结构动词”)とは、始まりも終わりもなく、それなりの結果が生じない動詞のことである。詳しくは王明洲(2019:28)を参照されたい。
- 3) 「反語的な疑問文」は安達(2005)の pp.35を参照されたい。
- 4) 「V+“得”/“不”+“了”」の目的語に疑問詞の“谁”が使われ、主語の位置に疑問詞の“谁”がない用例について、筆者が所持している“V 不了”の15,830例中1例も見られなかった。そのため、取り上げられるほどの数を満たしていないとみなし、本章では対象外とする。

第6章 「V+得る」構造の意味・機能について

1 はじめに

第1章から第5章は、中国語の可能補語の「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能とその構文的特徴について考察してきた。本章からは、日本語の可能の意味を表す複合動詞の「V+得る」構造の意味・機能とその構文的条件について考察していく。

「V+得る」は、可能を表す複合動詞として知られている。「V+得る」には、終止形として文末に使われる場合と、連体形として修飾語としての役割を果たす場合がある。それぞれの場合において、「V+得る」は同じ意味を表しているというわけではない。これまでの研究では、このような「V+得る」の意味・機能の違いについて、未だ十分に明らかにされていないようである。そこで、本章では、統語論と意味論の観点から、終止形として機能する場合と連体形として機能する場合という二つの場合に分けて、「V+得る」の¹⁾意味・機能について考察する。

2 先行研究の問題点と本章の立場

「V+得る」の意味・機能に関する研究は、金子尚一(1980)、渋谷勝己(1986)、日本語記述文法研究会(2009)に散見される。渋谷勝己(1986:pp107-108)では、金子尚一(1980)に基づき、「V+得る」を「認識の可能」として位置づけ、「肯定形の場合『～スルカモシレナイ』の意に近い」とされている²⁾。しかし、実際の用例を観察してみると、確かに「V+得る」が連体修飾語として機能する場合、「戦い得る人」は「戦うかもしれない人」として解釈できるかもしれない。しかし、次の例(1)(2)のような「V+得る」が終止形として文末に使われる場合において、「V+得る」は単純に「～スルカモシレナイ」として解釈できるとは認めがたい。

- (1)この装置のつくり出す空間なら、あの防衛機構のエネルギーを一瞬でも排除し得るだろう。(菊地秀行『妖戦地帯1』1985)
- (2)臨床的な、そういう過失の体験を経てはじめて、この病人にはこれ程と適量の劇薬を調合し得る。(五味康祐『刺客』1989)

例(1)(2)の「排除し得る」「調合し得る」は「V+得る」構造であり、終止形として条件文の主節の文末に使われている。しかし、例(1)における「排除し得る」は「排除できる可能性がある」という意味を表し、例(2)における「調合し得る」は「調合できる可能性がある」という意味を表している。いずれも渋谷勝己(1986)でいう「～スルカモシレナイ」という解釈では、カバーできないと思われる。このことから、渋谷勝己(1986)解釈は不十分だと言わざるを得ない。

また、例(1)(2)から見れば、この場合の「V+得る」の意味は「V できる可能性がある」と思われる。しかし、「V+得る」は統語的複合動詞³⁾であるため、「得る」の作用域は前置動詞までではなく、前置動詞を含む動詞述語文までであるため、「V+得る」の意味は「V できる可能性がある」というより、「VP できる可能性がある」という方が適切であると考えられる。

さらに、例(1)(2)の条件節の「この装置のつくり出す空間なら」「臨床的な、そういう過失の体験を経てはじめて」という部分を削除すれば、次の例(1')(2')のようなやや不自然な表現になる⁴⁾。

(1')?あの防御機構のエネルギーを一瞬でも排除し得るだろう。⁵⁾

(2')?この病人にはこれ程と適量の劇薬を調合し得る。

例(1')(2')の「排除し得る」「調合し得る」は終止形として肯定文の文末に使われている。この場合、例(1')(2')はやや不自然な表現として認められる。このことから見れば、「V+得る」の意味・機能にはその条件節が必要であるかもしれない。さらに、その条件節を細分化してみると、VP できる可能性がある「主体」という内容が含まれているため、「V+得る」には、その「主体」が必要であると考えられる。

以上のような手順をふまえてみると、「V+得る」の前置動詞が意志動詞である場合の意味は「あのもの(手段、人、物)には、VP できる可能性がある」という仮説を新たに提案することができる。

一方、日本語記述文法研究会(2009:283)では、「V+得る」について、「『(し)うる』『(し)える』は動作が起こる可能性があることを表す」とされている。確かに「発生し得る」のような前置動詞が無意志動詞の場合、「V+得る」は動作が起こる可能性があることを表しているかもしれない。しかし、下記の例(3)(4)のような前置動詞が意志動詞である場合の「V+

得る」は、「動作が起こる可能性がある」ことを表しているとは認め難い。

(3)庄九郎だけが、この大平野に強力な軍事国家をつくり得るだろうと思っているのである。(司馬遼太郎『国盗り物語』1966)

(4)辺境の人間なら呼吸まで調節し得る。(菊地秀行『吸血鬼ハンター12』2000)

例(3)(4)における「つくり得る」「調節し得る」は日本語記述文法研究会(2009)でいう「(し)うる」「(し)える」の形式をしているにもかかわらず、例(3)の「つくり得る」は「将来、庄九郎がこの大平野に強力な軍事国家をつくる」という動作が起こる可能性があるという意味ではなく、「庄九郎にはこの大平野に強力な軍事国家をつくれる可能性がある」という意味を表しているように思われる。例(4)の「調節し得る」も「(いざという時、)辺境の人間は呼吸を調節する」という動作が起こる可能性があるというより、むしろ「辺境の人間には呼吸を調節できる可能性がある」という意味を表しているように思われる。このことから、日本語記述文法研究会(2009)の記述は、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の意味をカバーすることができないといえる。

以上のように、これまでの研究は、複合動詞の「V+得る」の意味・機能の全容が未だ十分に明らかにされていないといえる。そこで、本論文では、「V+得る」の意味・機能について、終止形として機能する場合と、連体形として機能する場合に分けて、次の(5)のように新たに提案する。

(5)「V+得る」は主に四つの意味に要約できる。終止形として機能する場合、Vが意志動詞の「V+得る」は、「あのもの(手段、人、物)には、VPできる可能性があるかどうか」の意味を表し、前置動詞が無意志動詞の「V+得る」は、「ある状況では、VPが起こる可能性があるかどうか」の意味を表す。一方、連体形として機能する場合、Vが意志動詞の「V+得る」は、「Vできる可能性があるかどうか」という意味を表し、前置動詞が無意志動詞の「V+得る」は、「VPが起こる可能性があるかどうか」という意味を表す。

上記の(5)は本論文の仮説である。以下では、仮説の(5)の妥当性を検証する。具体的に言えば、3節では、「V+得る」が終止形として機能する場合の意味・機能を明らかにし、

4節では、「V+得る」が連体形として機能する場合の意味・機能を明らかにする。5節では、本章のまとめを行う。

3 「V+得る」が終止形として機能する場合の意味・機能

本節では、「V+得る」が終止形として文末に現れる場合の意味・機能について考察し、(5)の仮説を検証する。用例を観察した結果、前置動詞が意志動詞であるかそれとも無意志動詞であるかによって、「V+得る」の表す意味に影響が生じると思われるため、本節では、さらに前置動詞が意志動詞の場合と前置動詞が無意志動詞の場合に分けて、「V+得る」の意味・機能について考察する。

3.1 前置動詞が意志動詞である場合

この節では、終止形として機能する場合、V が意志動詞である場合の「V+得る」の意味・機能について考察する。用例を観察してみると、仮説の(5)に提案した通り、「V+得る」は「あのもの(手段、人、物)なら VP できる可能性がある」という意味を表していると思われる。ここでは、さらに「V+得る」の場合と「V+得ない」の場合に分け、それぞれの意味・機能について考察する。

3.1.1 「V+得る」の場合

この部分では、終止形として機能する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の意味・機能について考察する。この場合、「V+得る」は「あのもの(手段、人、物)なら VP できる可能性がある」という意味を表す。

本論文では、その可能性を持つもの、すなわち素質の持ち主を「主体」として見なす。その主体の違いによって、さらに主体が人物である場合、主体が物である場合、主体が手段である場合、主体が状況である場合に分けられる。以下では、それぞれの場合において、仮説の(5)が通用するかどうかについて考察する。

まず、用例を調べた結果、ある人物がその可能性を持つ主体として機能することができる。この場合、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は終止形として文を言い切ることが可能であり、「V+得る」は「あの人物には、VP できる可能性がある」という意味を表すと思われる。下記の用例はその裏付けである。

- (6)辺境の人間なら呼吸まで調節し得る。(例(4)を再掲)
- (7)貴族に血を吸われた者は、同時に貴族の記憶や現在眼にしている光景すら同時体験し得る。(菊地秀行『吸血鬼ハンター17b』2005)
- (8)もちろん、ロビンソンは畑を耕したり狩をしたりさらには自分の肉体および精神力を鍛練したりして、彼の周囲および内部の環境を変更しうる。(岩井克人『ヴェニス^①の商人の資本論』1985)
- (9)凶作地窮民は馬を屠り、犬を殺して食となすし得る。(工藤美代子『工藤写真館の昭和』1990)

例(6)~(9)における「V+得る」構造の「得る」は前置動詞の「調節する」「体験する」「変更する」「なす」は意志動詞として認められる。例(6)における「V+得る」は「辺境の人間には呼吸まで調節できる可能性がある」という意味を表し「辺境の人間」なら、それができる可能性があるという話者の推測を表している。例(7)における「V+得る」は「貴族に血を吸われた者には同時に貴族の記憶や現在眼にしている光景すら同時体験できる可能性がある」という意味を表し、「貴族に血を吸われた者」なら、それができる可能性があるという話者の推測を表している。例(8)における「V+得る」は「彼の周囲および内部の環境を変更できる可能性がある」という意味を表し、「ロビンソン」なら、それができる可能性があるという話者の推測を表している。例(9)における「V+得る」は「馬を屠り、犬を殺して食となす可能性がある」という意味を表し、「凶作地窮民」なら、それができる可能性があるという話者の推測を表している。

このことから、Vが意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として機能し、その可能性の持ち主の主体が人物である場合、「あの人には、VPできる可能性がある」という意味を表すと認められる。

次に、用例を調べた結果、事物が可能性を持つ主体になることが可能であると推測できる。次の例(10)(11)(12)に示すように、この場合の「V+得る」は「その物には、VPできる可能性がある」という意味を表している。

- (10)加速度のついた吸血鬼の拳は人間の頭部を一撃で粉碎し得る。(古橋秀之『ブラックロッド』1997)
- (11)この装置のつくり出す空間なら、あの防御機構のエネルギーを一瞬でも排除し得

るだろう。(例(1)を再掲)

(12)見るからに無防備で襲撃は容易に見えるが、バーサーカーの謎めいた特殊能力は、
同様に不可解な宝具を持つアーチャーに拮抗しうる。(虚淵玄『Fate／Zero Vol.3
「散りゆく者たち」』2007)

例(10)(11)(12)における「V+得る」の前置動詞の「粉碎する」「排除する」「拮抗する」は意志動詞として機能している。例(10)における「V+得る」は「人間の頭部を一撃で粉碎できる可能性がある」という意味を表し、「加速度のついた吸血鬼の拳」なら、それができる可能性があるという話者の推測を表している。例(11)における「V+得る」は「あの防御機構のエネルギーを一瞬でも排除できる可能性がある」という意味を表し、「この装置のつくり出す空間」なら、それができる可能性があるという話者の推測を表す。例(12)における「V+得る」は「不可解な宝具を持つアーチャーに拮抗できる可能性がある」という意味を表し、「バーサーカーの謎めいた特殊能力」なら、それができる可能性があるという話者の推測を表している。

このことから、Vが意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として機能し、その可能性の持ち主の主体が事物である場合、「V+得る」は「あの物には、VP できる可能性がある」という意味を表すといえる。

さらに、可能性の持ち主の主体に、ある手段(方法)が立つことが可能である。この場合の「V+得る」は「その手段には、VP できる可能性がある」という意味を表す。その裏付けとして次の用例を挙げておく。

(13)B29の爆撃のみならば、右の疎開分散により、三年は保ち得る。(山田風太郎『戦中派不戦日記』1971)

(14)洋蔵はたしかに異様な能力を有しており、手をかざしたり凝視したりすることによって、かすかに地震計を動かし得る。(荒俣宏『帝都物語1』1995)

(15)したがって、この際徹底的打撃を与えることによって、将来の国境紛争を防止し得る。(五味川純平『ノモンハン(上)』1978)

(16)つまり、他者を打つ力にたいして、抵抗力によってではなく、その反応の予見不可能性そのものによって対抗しうる。(熊野純彦『レヴィナス入門』1999)

例(13)～(16)における「V+得る」構造は前置動詞の「保つ」「動かす」「防止する」「対抗する」は意志動詞である。例(13)における「V+得る」は「三年は保つことができる可能性がある」という意味を表し、「右の疎開分散」によって、それができる可能性があるという話者の推測を表している。例(14)における「V+得る」は「地震計を動かせる可能性がある」という意味を表し、「手をかざしたり凝視したりすること」によって、それができる可能性があるという話者の推測を表している。例(15)における「V+得る」は「将来の国境紛争を防止できる可能性がある」という意味を表し、「この際徹底的打撃を与えること」によって、それができる可能性があるという話者の推測を表している。例(16)における「V+得る」は「対抗できる可能性がある」という意味を表し、「その反応の予見不可能性そのもの」によって、それができる可能性があるという話者の推測を表している。

このことから、Vが意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として機能し、その可能性の持ち主の主体がある手段(方法)である場合、「V+得る」は「その手段には、VP できる可能性がある」という意味を表すといえる。

用例を観察してみると、可能性の「主体」に、ある状況が立つことも可能であると推測できる。この場合、「V+得る」は「あの状況には、VP できる可能性がある」という意味を表す。下記の例(17)～(20)はその裏付けである。

- (17)臨床的な、そういう過失の体験を経てはじめて、この病人にはこれ程と適量の劇薬を調合し得る。(例(2)を再掲)
- (18)舞台は、プレイヤーと見巧者の客が一体になって、はじめて、最大の魅力を発揮し得る。(皆川博子『水底の祭り』1976)
- (19)時と人と、天運が揃って初めてなし得る。(宮部みゆき『孤宿の人(下)』2005)
- (20)晩年のベートーヴェンの歳になって、やっと、限られた、世界でも数人のピアニストがその心境を弾き得るだろう。(五味康祐『西方の音』2001)

例(17)～(20)の「V+得る」構造の前置動詞の「調和する」「発揮する」「なす」「弾く」は意志動詞である。例(17)における「調和し得る」は「これ程と適量の劇薬を調合できる可能性がある」という意味を表し「そういう過失の体験を経る」という状況には、それができる可能性があるという話者の推測を表している。例(18)における「発揮し得る」は「最大の魅力を発揮できる可能性がある」という意味を表し、「プレイヤーと見巧者の客が一

体になる」という状況には、それができる可能性があるという話者の推測を表している。例(19)における「なし得る」は「成せる可能性がある」という意味を表し、「時と人と、天運が揃う」という状況には、それができる可能性があるという話者の推測を表している。例(20)における「弾き得る」は「その心境を弾ける可能性がある」という意味を表し、「晩年のベートーヴェンの歳になった」という状況には、それができる可能性があるという話者の推測を表している。

このことから、Vが意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として機能し、その可能性の持ち主の主体がある状況である場合、「V+得る」は「あの状況には、VP できる可能性がある」という意味を表すと認められる。

つまり、終止形として機能する場合、Vが意志動詞である場合の「V+得る」は「あのもの(手段、人、物)ならVP できる可能性がある」という意味を表す。その可能性を持つものは人物、事物、手段、状況に分布している。

3.1.2 「V+得ない」の場合

この部分では、終止形として機能する場合、Vが意志動詞である場合の「V+得ない」の意味・機能について考察する。用例を観察してみると、この場合の「V+得ない」は「あのもの(手段、人、物)には、VP できる可能性がない」という意味を表していると推測できる。下記の例(21)~(24)はその裏付けである。

(21)自分より大いなる人格は書き得ない。(三浦綾子『ちいろば先生物語』1987)

(22)千世は早や眸をうるませ、怨ずるごとく夫を贖めるだけで、答え得ない。(五味康祐『いろ暦四十八手』1971)

(23)尊皇か佐幕か、攘夷か開港か、もつれにもつれた幕末の政情は、歴史書を二読、三読したぐらいでは容易にその実情をつかみ得ない。(光瀬龍『征東都督府』1982)

(24)だが、それだけの規模の霊体融合を可能にする霊圧、それを維持する強力な結界は現行の技術では作り得ない。(古橋秀之『ブライトライツ・ホーリーランド』1999)

例(21)~(24)の「V+得ない」構造の前置動詞の「書く」「答える」「つかむ」「作る」は意志動詞として認められる。例(21)の「書き得ない」は「自分より大いなる人格を書ける可能性がない」という意味を表し、「私」には、それができる可能性がないという話者の推

測を表している。例(22)の「答え得ない」は「夫が答える可能性がない」という意味を表し、「夫を瞞める」という方法には、それができる可能性がないという話者の推測を表している。例(23)の「つかみ得ない」は「容易にその実情をつかむ可能性がない」という意味を表し、「歴史書を二読、三読する」という方法には、それができる可能性がないという話者の推測を表している。例(24)の「作り得ない」は「それを維持する強力な結界を作れる可能性がない」という意味を表し、「現行の技術」では、それができる可能性がないという話者の推測を表している。

このことから、終止形として機能する場合、Vが意志動詞である場合の「V+得ない」は「あのもの(手段、人、物)にはVPできる可能性がない」という意味を表す。

以上の分析をまとめると、終止形として機能する場合、Vが意志動詞である場合の「V+得る」は「あのもの(手段、人、物)ならVPできる可能性がある」という意味を表し、Vが意志動詞である場合の「V+得ない」は「あのもの(手段、人、物)にはVPできる可能性がない」という意味を表すと思われる。

3.2 前置動詞が無意志動詞である場合

以下では、終止形として機能する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得る」の意味・機能について考察する。この節では、「V+得る」の場合と「V+得ない」の場合に分け、それぞれの意味・機能について考察する。

3.2.1 「V+得る」の場合

この部分では、終止形として機能する場合、Vが意志動詞である場合の「V+得る」の意味・機能について考察する。この場合、「V+得る」のVが無意志動詞の場合、「ある状況では、VPが起こる可能性がある」という意味を表す。下記の例(25)～(28)はその裏付けである。

(25)同じようなことは、現実の世界でも起こり得るのだった。(伊藤たかみ『指輪をはめたい』2003)

(26)地震計の場合にも同様な現象が起き得る。(荒俣宏『帝都物語1』1995)

(27)人間の一生は遺伝子によって基本的には規定されるが、環境によってかなりな部分変わり得る。(宮下充正『子どものスポーツと才能教育』2002)

(28)水中でも『超音速の物体』というのは存在しうる。(賀東招二『フルメタル・パニック！短編集 06 あてにならない六法全書？』2002)

例(25)～(28)における「得る」の前置動詞の「起こる」「起きる」「変わる」「存在する」は無意志動詞として認められる。例(25)における「起こり得る」は「同じことが起こる可能性がある」という意味を表し、「現実の世界」では、それが起こる可能性があるという話者の推測を表す。例(26)における「起き得る」は「同様な現象が起こる可能性がある」という意味を表し、「地震計の場合」では、それが起こる可能性があるという話者の推測を表す。例(27)における「変わり得る」は「かなりな部分変わる可能性がある」という意味を表し、「環境」によって、それが起こる可能性があるという話者の推測を表す。例(28)における「存在しうる」は『超音速の物体』というのは存在する可能性がある」という意味を表し、「水中」では、それが起こる可能性があるという話者の推測を表す。

このことから、前置動詞が無意志動詞の「V+得る」が終止形として機能する場合、「ある状況では、VP が起こる可能性がある」という意味を表すといえる。

3.2.2 「V+得ない」の場合

この部分では、終止形として機能する場合、V が意志動詞である場合の「V+得ない」の意味・機能について考察する。次の例(29)～(32)に示すように、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」は、「ある状況(現実)には、VP が起こる可能性がない」という意味を表す。

(29)中東を舞台に、原油高に由来する第三次石油ショックのようなものは起こり得ない。(長谷川慶太郎『日本企業の生きる道』2013)

(30)常識からいってリピートなどという現象は起こり得ない。(乾くるみ『リピート』2004)

(31)そんなことは起き得ない。(三橋貴明『日本大復活の真相』2013)

(32)高価なメガネや美しいメガネは〈絶対的〉に存在するが、いいメガネは〈相対的〉にしか存在し得ない。(塩田丸男『口下手は損ですか 面白い話をするための12章』1986)

例(29)～(32)の「V+得ない」構造の前置動詞の「起こる」「起きる」「存在する」は無意志動詞として認められる。例(29)の「起こり得ない」は「第三次石油ショックのようなものが起こる可能性がない」という意味を表し、「中東を舞台にする」場合には、それができる可能性がないという話者の推測を表している。例(30)の「起こり得ない」は「リピートなどという現象が起こる可能性がない」という意味を表し、「この状況(現実)」には、それができる可能性がないという話者の推測を表している。例(31)の「起き得ない」は「そんなことが起きる可能性がない」という意味を表し、「この状況(現実)」には、それができる可能性がないという話者の推測を表している。例(32)の「存在し得ない」は「いいメガネが存在する可能性がない」という意味を表し、「絶対的な世界」には、それができる可能性がないという話者の推測を表している。

このことから、終止形として機能する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」は「ある状況にはVPが起こる可能性がない」という意味を表す。

3節を改めてまとめると、終止形として機能する場合、Vが意志動詞である場合の「V+得る」は「あのもの(手段、人、物)ならVPできる可能性がある」という意味を表し、Vが意志動詞である場合の「V+得ない」は「あのもの(手段、人、物)にはVPできる可能性がない」という意味を表す。無意志動詞である場合の「V+得る」は、「ある状況では、VPが起こる可能性がある」という意味を表し、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」は「ある状況にはVPが起こる可能性がない」という意味を表す。

4 「V+得る」が連体形として機能する場合の意味・機能

本節では、「V+得る」が連体修飾語として機能する場合の意味・機能について考察し、(5)の仮説について実証する。用例を観察した結果、前置動詞が意志動詞か、それとも無意志動詞かによって、「V+得る」の意味に違いが生じるとみなされる。そこで、本節では、さらに前置動詞が意志動詞の場合、前置動詞が無意志動詞の場合に分けて「V+得る」の意味・機能について考察する。

4.1 前置動詞が意志動詞である場合

この節では、連体形として機能する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の意味・機能について考察する。

この場合、「V+得る」は主に内の関係⁶⁾の名詞修飾であり、「VPできる可能性がある」

という意味を表す。被修飾語の人、物などに期待の評価を与えている。この節では、さらに「V+得る」の場合と「V+得ない」の場合に分け、それぞれの意味・機能について考察する。

4.1.1 「V+得る」の場合

この部分では、連体形として機能する場合、どんな名詞が「V+得る」の被修飾語になりうるかについて考察し、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の意味・機能について考察する。その被修飾語の違いによって、さらに主体が人物である場合、主体が物である場合、主体が手段である場合、主体が状況である場合に分けられる。以下では、それぞれの場合において、仮説の(5)が通用するかどうかについて考察する。

まず、人物が「V+得る」の被修飾語になりうる。この場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は連体形として機能することが可能である。被修飾語は終止形として機能する場合に定義した可能性の「主体」になる。ただし、終止形として機能する場合の「V+得る」の「あのもの(手段、人、物)なら VP できる可能性がある」という意味の「あのもの(手段、人、物)なら」という部分が被修飾語になったため、「V+得る」は「VP できる可能性がある」という部分の意味だけを表すようになる。「V+得る」は被修飾語に期待の評価を与える。

(33)端的に言って、戦争を科学的に構想し得る軍人も政治家も、かつての日本には必要額だけ育っていなかった。(五味川純平『ガダルカナル』1979)

(34)戦い得る生存者は、中隊長以下、わずか十七名になっていた。(伊藤桂一『遙かなインパール』2001)

(35)これまで、自分の刀を避け得る者はただのひとりもいなかった。(光瀬龍『夕ばえ作戦』1975)

(36)竜太の鋭い打ちこみを避け得る者は滅多にいない。(三浦綾子『銃口』1994)

例(33)～(36)における「V+得る」の前置動詞の「構想する」「戦う」「避ける」は意志動詞として認められる。「V+得る」は連体形として機能し、被修飾語は人物である。例(33)の場合、「構想し得る」は「戦争を科学的に構想することができる可能性がある」という意味を表している。例(34)の場合、「戦い得る」は「戦える可能性がある」という意味を表

している。例(35)の場合、「避け得る」は「自分の刀を避けることができる可能性がある」という意味を表している。例(36)の場合、「避け得る」は「竜太の鋭い打ちこみを避けることができる可能性がある」という意味を表している。「V+得る」は被修飾語に期待の評価を与えている。

このことから、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が連体形として機能し、その被修飾語が人物である場合、「V+得る」は「VP できる可能性がある」という意味を表し、被修飾語に期待の評価を与えていると認められる。

また、用例を観察した結果、「V+得る」が連体修飾語として機能し、被修飾語が物である場合、「VP できる可能性がある」という意味を表すと思われる。下記の用例はその裏付けである。

(37)我が方に戦車に対抗し得る火器等の所要装備があるなら、対戦車戦闘は絶対に恐ろしいものではない。(五味川純平『ノモンハン (下)』1978)

(38)また、一気に火星や地球まで到達し得る大型宇宙船でも、木星近傍で大圏航路の航路管制局の誘導にのるのが極めて面倒だった。(光瀬龍『たそがれに還る』1985)

(39)吸血鬼や人狼などの不死性の魔物を殺傷し得る兵器としては最小の部類に入る。(古橋秀之『ブラックロッド』1997)

(40)しかも、現場には結果において不十分だったが、十分人を殺し得る薬の痕跡が残っている。(横溝正史『芙蓉屋敷の秘密』1978)

例(37)～(40)における「V+得る」の前置動詞の「対抗する」「到達する」「殺傷する」「殺す」は意志動詞として認められる。「V+得る」は連体形として機能し、被修飾語は物である。例(37)の場合、「対抗し得る」は「我が方に戦車に対抗できる可能性がある」という意味を表し、被修飾語の「火器」に期待の評価を与えている。例(38)の場合、「到達し得る」は「一気に火星や地球まで到達できる可能性がある」という意味を表し、被修飾語の「大型宇宙船」に期待の評価を与えている。例(39)の場合、「殺傷し得る」は「吸血鬼や人狼などの不死性の魔物を殺傷することができる可能性がある」という意味を表し、被修飾語の「兵器」に期待の評価を与えている。例(40)の場合、「殺し得る」は「十分人を殺せる可能性がある」という意味を表し、被修飾語の「薬」に期待の評価を与えている。

このことから、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が連体形として機能し、そ

の被修飾語が物である場合、「V+得る」は「VP できる可能性がある」という意味を表すといえる。

さらに、下記の例(41)~(44)に示すように、連体形として機能し、被修飾語が「もの」という形式名詞である場合、「V+得る」も「VP できる可能性がある」という意味を表し、そのものに「期待」の評価を与えている。

(41)けれど、恐怖といった心的状態は、けっして正確に計量し得るものではない。(森本哲郎『戦争と人間: 歴史が語る 20 の教訓』2003)

(42)これによって、その方向から接近のおそれあるいかなる物体をも未然に探知し得るものである。(光瀬龍『たそがれに還る』1985)

(43)この窮地を救い得るものは、いまは貴隊よりほかにはない。(伊藤桂一『遙かなインパール』2001)

(44)金子幾子はフリーであるし、下塚圭子もまだ若く、組織で働くことに学び得るものは多大としながらも、組織運営にたずさわる多忙さに身を置いてはいない。(沖藤典子『転勤族の妻たち』1986)

例(41)~(44)の「V+得る」の前置動詞の「計量する」「探知する」「救う」「学ぶ」は意志動詞であり、「V+得る」は連体形として機能し、被修飾語は形式名詞の「もの」である。例(41)の場合、「計量し得る」という「V+得る」構造は「恐怖といった心的状態を計量できる可能性がある」という意味を表している。例(42)の場合、「探知し得る」という「V+得る」構造は「その方向から接近のおそれあるいかなる物体をも未然に探知することができる可能性がある」という意味を表している。例(43)の場合、「救い得る」という「V+得る」構造は「この窮地を救うことができる可能性がある」という意味を表している。例(44)の場合、「学び得る」という「V+得る」構造は「学べる可能性がある」という意味を表している。

このことから、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が連体形として機能し、その被修飾語が形式名詞の「もの」である場合、「V+得る」は「VP できる可能性がある」という意味を表すといえる。

さらに、「V+得る」が連体形として機能し、外の関係の名詞修飾である用例もある。この場合、「V+得る」は「VP できる可能性がある」という意味を表しているかどうかにつ

いて考察する。この場合、被修飾語には「時間」「範囲」などの状況を表す名詞が立つことが多くみられる。

(45)室内にはうすいとはいえ、光が溢れている。卿の行動し得る時間ではなかった。

(菊地秀行『吸血鬼ハンター09』1996)

(46)したがって、有効な攻撃を加え得る時間はきわめて短くならざるを得なかった。

(五味川純平『ガダルカナル』1979)

(47)雪の山も、撮り得る時に撮っておかないと、いつまた撮れなくなるか判らなかった。(井上靖『星と祭下』1975)

(48)たしかに、われわれの知り得る範囲内に高度な文明を持つ生命は存在しなかった。

(光瀬龍『たそがれに還る』1985)

例(45)~(48)の「V+得る」の前置動詞の「行動する」「加える」「撮る」「知る」は意志動詞として機能している。また、「V+得る」は連体形として機能し、被修飾語は「時間」「時」「範囲」という状況を表す名詞である。例(45)の「行動し得る」という「V+得る」構造は「行動できる可能性がある」という意味を表している。例(46)の「加え得る」という「V+得る」構造は「有効な攻撃を加えることができる可能性がある」という意味を表している。例(47)の「撮り得る」という「V+得る」構造は「雪の山も、撮れる可能性がある」という意味を表している。例(48)の「知る」という「V+得る」構造は知ろうという意志があるため、意志動詞として扱っている。この場合、「知り得る」は「われわれの知ることができる可能性がある」という意味を表している。

このことから、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が連体形として機能し、その被修飾語が状況を表す名詞である場合、「V+得る」は「VP できる可能性がある」という意味を表すといえる。

さらに、用例を観察した結果、「V+得る」は連体形として機能し、外の関係の名詞修飾である場合、その被修飾語に「方法」という名詞が立つ場合がある。この場合においても、「V+得る」は「VP できる可能性がある」という意味を表す。その証左として次の用例が挙げられる。

(49)まずは、事業の目標を立てるとともに、それと並行して、採り得る方法ごとのロー

ドマップを作ってみましょう。(應本健『創業者、経営者のための 30 分でわかる
出口戦略』2015)

(50)原理的に採り得る方法は二つしかない。(池田清彦『構造主義生物学とは何か: 多
元主義による世界解読の試み』1988)

(51)そのようなときに、行政主体が取り得る手法として行政契約や行政指導が考えら
れる。(東京法経学院出版部『行政書士合格ナビゲーション基本テキスト 1: 業務
法令上』2010)

(52)この他、イオン化した吸着種の同定に使用し得る手法として、試料表面に電場を
印加して吸着種を脱離させる方法が考えられる。(山口周『ナノイオニクス: 最新
技術とその展望』2008)

例(49)~(52)の「V+得る」は連体形として機能し、被修飾語は「方法」「手法」であり、
その前置動詞の「採る」「取る」「使用する」は意志動詞と考えられる。例(49)の「採り得
る」という「V+得る」構造は「それと並行して、採ることができる可能性がある」という
意味を表し、被修飾語の「方法」に期待の評価を与えている。例(50)の「採り得る」とい
う「V+得る」構造は「原理的に採ることができる可能性がある」という意味を表し、被修
飾語の「方法」に期待の評価を与えている。例(51)の「取り得る」という「V+得る」構造
は「行政主体が取ることができる可能性がある」という意味を表し、被修飾語の「手法」
に期待の評価を与えている。例(52)の場合、「使用し得る」という「V+得る」構造は「イ
オン化した吸着種の同定に使用することができる可能性がある」という意味を表し、被修
飾語の「手法」に期待の評価を与えている。

このことから、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が連体形として機能し、そ
の被修飾語が「方法」「手法」などの手段を表す名詞である場合、「V+得る」は「VP でき
る可能性がある」という意味を表すといえる。

さらに、コーパスを調べた結果、「V+得る」は連体形として「限り」と共起する用例も
みられる。次の例(53)~(56)に示すように、この場合も「VP できる可能性がある」という
意味を表している。

(53)考え得る限りすべての方法を駆使してはみるけど、正直言って今の医療技術で彼
女の命を救うことはできないわ。(三雲岳斗『レベリオン 第 01 巻』2000)

(54)それから幾日、私は想像し得る限りの美しい音を思いえがき、胸をふるわせたことだろう。(五味康祐『五味康祐オーディオ遍歴』2005)

(55)ここに登場する人物はもちろん、架空のものであり、特定のモデルはない。だが、ここに示されている客観データは入手し得る限り正確なものを使用した。(堺屋太一『油断!』1975)

(56)敵がここに至ったならば、貴方に振るいうる限りの全力をもって抗するように。(枯野瑛『銀月のソルトレージュ 04』2007)

例(53)~(56)の「V+得る」構造は「限り」と共起し、連体形としての役割を果たしている。この場合、「V+得る」構造の前置動詞の「考える」「想像する」「入手する」「振るう」は文脈からみれば、「Vしようとする」という意志性がみられたため、意志動詞として認められる。例(53)の「考え得る」という「V+得る」構造は「考えられる可能性がある」という意味を表し、例(54)の「想像し得る」という「V+得る」構造は「想像することができる可能性がある」という意味を表し、例(55)の「入手し得る」という「V+得る」構造は「入手できる可能性がある」という意味を表し、例(56)の「振るい得る」という「V+得る」構造は「振るえる可能性がある」という意味を表している。

このことから、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が連体形として機能し、その被修飾語が「方法」「手法」などの手段を表す名詞である場合、「V+得る」は「VPできる可能性がある」という意味を表すといえる。

この部分をまとめると、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が連体形として機能する場合、「VPできる可能性がある」という意味を表す。

4.1.2 「V+得ない」の場合

この部分では、連体形として機能する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得ない」の意味・機能について考察する。用例を観察してみると、この場合の「V+得ない」は「VPできる可能性がない」という意味を表していると推測できる。下記の例(57)~(60)はその裏付けである。

(57)第二師団正面も第三十八師団同様一月早々から米軍の本格的攻勢を受けはじめ、一月一日、師団長は、予備隊の戦闘に堪え得ない患者をセギロウ方面に移動させ

た。(五味川純平『ガダルカナル』1979)

(58)四割六厘を打ったのは四一年だから、それからもう七〇年近く誰一人なし得ない夢の記録である。(桑原晃弥『「トップアスリート」名語録』2008)

(59)広島にきた幕府の老中が、どのような処分をつきつけているかを詳しく彼らに説明し、もはや幕軍との対決は避け得ない事態に立ち至っていることを告げた。(古川薫『桂小五郎(下)』1977)

(60)物事には、対象の外部からでなければ観察し得ない事実というものがある。(古橋秀之『冬の巨人』2007)

例(57)~(60)の「V+得ない」構造の前置動詞の「堪え」「なす」「避ける」「観察する」は文脈から意志性がみられるため、意志動詞として認められる。その被修飾語に「患者」「夢」「事態」「事実」などが使われている。例(57)の「堪え得ない」という「V+得ない」構造は「耐えられる可能性がない」という意味を表し、例(58)の「なし得ない」という「V+得ない」構造は「なせる可能性がない」という意味を表し、例(59)の「避け得ない」という「V+得ない」構造は「対決を避けられる可能性がない」という意味を表し、例(60)の「観察し得ない」という「V+得ない」構造は「観察できる可能性がない」という意味を表している。

このことから、連体形として機能する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得ない」は「VP できる可能性がない」という意味を表すといえる。

この節をまとめると、連体形として機能する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は「VP できる可能性がある」という意味を表し、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得ない」は「VP できる可能性がない」という意味を表す。

4.2 前置動詞が無意志動詞である場合

この節では、連体形として機能する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得る」の意味・機能について考察する。この節においても、「V+得る」の場合と「V+得ない」の場合に分け、それぞれの意味・機能について考察する。

4.2.1 「V+得る」の場合

この部分では、連体形として機能する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+

得る」の意味・機能について考察する。この場合、「V+得る」は主に外の関係であり、「VP が起こる可能性がある」という意味を表す。下記の例(61)～(64)はその裏付けである。

(61)これは私のように無関係な人間の心にも広く起こり得る感情ですが、それと逆の心情というものもある。(笹倉明『遠い国からの殺人者』1989)

(62)実見する光景を、既に入手済みの地図と照らし合わせ、敵の気配の在り処を慎重に探り、明日起こり得る事態に備える。(高橋弥七郎『灼眼のシャナ0 (短編)』2005)

(63)流れに乗っちまえば楽なんだが、妙な自尊心がそれを邪魔する。本来なら美德になり得る部分なんだろうが、こんな時代じゃあな。(伊都工平『天槍の下のバシレイス1 まれびとの棺 (上)』2004)

(64)VHDこそが数あるビデオディスクの中で本命商品になり得る可能性を秘めております。(佐藤正明『陽はまた昇る 映像メディアの世紀』1999)

例(61)～(64)における「V+得る」の前置動詞の「起こる」「なる」は文脈からみれば、無意志動詞と認められる。また、「V+得る」は連体形として機能し、「感情」「事態」「部分」「可能性」という名詞を修飾している。例(61)の場合、「起こり得る」という「V+得る」構造は「無関係な人間の心にも広く起こる可能性がある」という意味を表し、例(62)の場合、「起こり得る」という「V+得る」構造は「起こる可能性がある」という意味を表し、例(63)の場合、「なり得る」という「V+得る」構造は「美德になる可能性がある」という意味を表し、例(64)の場合、「なり得る」という「V+得る」構造は「VHDこそが数あるビデオディスクの中で本命商品になる可能性がある」という意味を表している。

このことから、連体形として機能している場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得る」は、「VP が起こる可能性がある」という意味を表すといえる。

4.2.2 「V+得ない」の場合

この部分では、連体形として機能する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」の意味・機能について考察する。

用例を調べてみると、次の例(65)～(68)に示すように、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」は、「ある状況(現実)には、VP が起こる可能性がない」という意味を表

していると推測できる。

(65)自然界では決して起き得ない超低温だ。(『朝日新聞デジタル』2015年12月18日)

(66)すくなくも彼女の生理現象の範囲では、いくら想像力をたくましくしても、起き得ない物音。(安部公房『方舟さくら丸』1984)

(67)誤解を恐れずに言うならば、犯罪もまた「社会が求めている」形でしか起こり得ないものだからだ。(宮部みゆき『模倣犯-上』2001)

(68)日本の海軍もその点は同じで、すでにミッドウェー海戦の戦訓から、艦隊決戦など起こり得ないことはだれもが知っていた。(御田重宝『特攻』2002)

例(65)~(68)の「V+得ない」構造の前置動詞の「起きる」「起こる」は文脈から見れば、無意志動詞として認められる。この場合の「V+得ない」構造は連体形として「超低温」「物音」「もの」「こと」を修飾している。例(65)の「起き得ない」という「V+得ない」構造は「起きる可能性がない」という意味を表し、例(66)の「起き得ない」という「V+得ない」構造は「起きる可能性がない」という意味を表し、例(67)の「起こり得ない」という「V+得ない」構造は「犯罪もまた『社会が求めている』形で起こる可能性がない」という意味を表し、例(68)の「起こり得ない」という「V+得ない」構造は「すでにミッドウェー海戦の戦訓から、艦隊決戦がおこる可能性がない」という意味を表している。

このことから、連体形として機能する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」は「VP できる可能性がない」という意味を表す。

4節をまとめると、連体形として機能する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は「VP できる可能性がある」という意味を表し、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得ない」は「VP できる可能性がない」という意味を表す。前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得る」場合、「VP が起こる可能性がある」という意味を表し、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」は「VP が起こる可能性がない」という意味を表す。

5 本章のまとめ

以上のように、本章では、「V+得る」の意味・機能について、終止形として機能する場

合と連体形として機能する場合に分けて分析してきた。さらにそれぞれの場合において、前置動詞が意志動詞の場合と前置動詞が無意志動詞の場合に分けて考察してきた。分析の結果をあらためてまとめると次のようになる。

- ①終止形として機能する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は「あのもの(手段、人、物)なら VP できる可能性がある」という意味を表し、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得ない」は「あのもの(手段、人、物)には VP できる可能性がない」という意味を表す。
- ②終止形として機能する場合、無意志動詞である場合の「V+得る」場合、「ある状況では、VP が起こる可能性がある」という意味を表し、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」は「ある状況には VP が起こる可能性がない」という意味を表す。
- ③連体形として機能する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は「VP できる可能性がある」という意味を表し、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得ない」は「VP できる可能性がない」という意味を表す。
- ④連体形として機能する場合、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得る」場合、「VP が起こる可能性がある」という意味を表し、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」は「VP が起こる可能性がない」という意味を表す。

以上の①～④はこの章のまとめである。しかし、また解決できていない問題もある。前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」はすべての文環境において使用可能というわけではなく、決められた文環境にしか生起しえないようである。一方、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得る」にはそのような制限がないと思われる。しかし、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は具体的にどんな構文的条件があるについてまだ明らかされていない。次章では、本章で発見した「V+得る」の構文的特徴に基づき、この問題の解明に向けて、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の構文的条件について考察する。

注

- 1) 本章では、「うる」と「える」を同じく「得る」とみなし、研究対象とする。なお、「得ない」は「得る」の意味・機能と違う傾向にあるため、本論文では対象外とする。また、「ありえる」という表現もあるが、すでに意味が定着し、単独で述語としても使えるため、本論文では「ありえる」も対象外とする。
- 2) 渋谷勝己(1986)において、「V+得る」を「認識の可能」に分類された。本論文では、渋谷勝己(1986)の観点に指示し、「V+得る」を「認識の可能」として扱うことにする。具体的に「V+得る」はどんな文環境に「能力可能」を表し、どんな文環境に「状況可能」を表すかについては、また別の機会で論じることにする。
- 3) 「統語的複合動詞」については影山(1993)の pp.75-139 を参照されたい。
- 4) この結果は 30 代から 60 代計 10 名の日本語を母語とする方に対し、アンケートを行い、調査した結果である。10 名全員が例(1)は例(1')より自然であり、例(2)は例(2')より自然であるという結果が出たため、例(1')(2')はやや不自然の表現とみなした。
- 5) 本論文では、やや不自然な表現に「？」を付ける。
- 6) 連体修飾の「内の関係」と「外の関係」については、庵ほか(2001)の pp.384 を参照されたい。

第7章 前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の構文的条件について

1 はじめに

前章では、可能を表す複合動詞の「V+得る」の意味・機能について、終止形として機能する場合と連体形として機能する場合に分けて考察してきた。本章では、前章の結果に基づき、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」に焦点を絞り、その構文的条件を明らかにしたい。

可能を表す複合動詞の「V+得る」の前置動詞には、意志動詞が生起する場合と、無意志動詞が生起する場合がある。前置動詞が意志動詞である場合、「V+得る」はすべての文環境において使用可能というわけではない。

(1)*田中選手は100メートルを10秒で走り得る。¹⁾

(1')田中選手だけが100メートルを10秒で走り得る。

例(1)(1')における「走り得る」は前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」構造として認められる。この場合、「走り得る」は、同じく終止形として使われているにもかかわらず、例(1)は不自然な表現であるのに対して、例(1')は自然な表現である。このことから、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」には、用いることが可能な文環境と、用いることができない文環境が存在しているといえる。しかし、具体的に「V+得る」はどんな文環境に用いられるのかについて、これまでの研究ではまだ明らかにされていない。そこで、本論文では、この問題の解明に向けて、構文論と意味論の観点から、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」²⁾の構文的条件を浮き彫りにしたい。

2 先行研究の問題点と本論文の立場

「V+得る」構造に関する研究は、渋谷勝己(1986)、日本語記述文法研究会(2009)、姫野昌子(1999)、陳奕廷(2017)などが挙げられる。渋谷勝己(1986)と日本語記述文法研究会(2009)は、「V+得る」構造の意味・機能について述べている。前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」構造の構文的条件については言及していない。

一方、「V+得る」構造の語彙的制限に関する研究は、姫野昌子(1999)、陳奕廷(2017)に散見される。姫野昌子(1999:32)では、「V+得る」構造の語彙的制限について、「『いる』、

『得る』には『～得る』は用いられない」とされている。確かに終止形として文を言い切る場合、「いうる」(居る＋うる)や「得うる」(得る＋うる)のような用例はないようである。しかし、連体修飾語として機能する場合、または「かどうか」とともに疑問節³⁾を構成する場合、下記の例(2)(3)のような「居得る」のような用例も、例(4)(5)のような「得うる」のような用例も見られる。

- (2)携帯向こうにいうるジャックは恋人というセリフを聞きたがるだろうが、この場でそんな話題を出していいのか、恭夜には分からない。(あすか『唯我独尊な男 番外編』2016)
- (3)その間疎吉郎が、果して独りで居得るかどうか... ..殊によるむと、あの地で別に女子を待ずかせて居るのかも知れぬ。(山岡荘八『豊臣秀吉』1973)
- (4)したがって、包括便益は、「さまざまな財から将来得うる便益の合計」であると言えます。(八田達夫『ミクロ経済学Ⅱ：効率化と格差是正』2009)
- (5)したがって、そのような対象は、先行するチオプリンの治療による失敗にもかかわらず、DR-6MP 治療から利益を得うるかどうかを評価するために、DR-6MP 治療群のみに割付した。(日本国特許庁『公表特許公報』2017)

例(2)(3)の「V+得る」構造の前置動詞には「いる」が使われており、例(4)(5)の「V+得る」構造の前置動詞には「得る」が使われている。このことから、姫野昌子(1999:32)にまとめられている「V+得る」構造の語彙的制限に関する「『いる』、『得る』には『～得る』は用いられない」という主張は、事実に合わないと言わざるを得ない。

というのは、「V+得る」構造の用いる文環境に関係があると考えられる。いわば、例(2)(4)の「いうる」(居る＋うる)と「得うる」(得る＋うる)は連体修飾語として機能し、例(3)(5)における「得うる」(得る＋うる)は「かどうか」とともに疑問節を構成していることに関係しているかもしれない。本論文では、このような構文的特徴を「V+得る」構造の構文的条件として位置づける。

さらに、陳奕廷(2017:pp40-41)では、『国語研日本語ウェブコーパス』のデータに基づき、「V+得る」について、「与え続け得る」のような「V1V2 得る」構造において、「まくる」や「終える」はV2にはならないとされている。確かに終止形として文を言い切る場合には、「V1 まくり得る」「V1 終え得る」のような用例は見られない。しかし、コーパスを調

べてみたところ、連体修飾語として機能する場合、下記の例(6)(7)のような反例が見られる。

(6)たとえば「セントルイス・ブルース」など、彼女ほどのスタミナを以て唄いまくり得る歌手は我国に於て、現在のところ、絶対に他に求められない。(瀬川昌久『ジャズで踊って』1983)

(7)結婚カウンセリングは、決して世人の考えがちであるような、素人の常識を以てなし終えうる領域ではないのである。(嶋田津矢子『婦人解放と結婚の将来』1985)

例(6)(7)における「唄いまくり得る」「なし終えうる」は「V1V2 得る」構造であるにもかかわらず、V2には「まくる」と「終える」が使われている。例(6)(7)の「唄いまくり得る」「なし終えうる」は連体修飾語として機能し、「歌手」「領域」という名詞を修飾している。いわば、連体修飾語として機能する場合において、「まくる」や「終える」は「V1V2 得る」構造のV2になりうると推測できる。このことから、陳奕廷(2017)にまとめられている「V+得る」の語彙的制限に関する記述は、あくまでも『国語研日本語ウェブコーパス』の範囲内に通用し、本論文で収集・構築した「V+得る」のコーパスにおいては、通用しないとわざるを得ない。

つまり、姫野昌子(1999)と陳奕廷(2017)で判明された「V+得る」の前置動詞の制限は、「V+得る」が終止形として文を言い切る場合に通用するかもしれないが、連体形として機能する場合または疑問節として機能する場合のような文環境においては、適切ではないと言わざるを得ない。

以上の事実によって示されるように、これまでの研究では、複合動詞「V+得る」の全容が十分に明らかにされていないといえる。一方、複合動詞「V+得る」の構文的条件に関する研究は、管見の限りないようである。

「V+得る」の前置動詞の語彙的制限のほかに、どんな文環境に用いられるのかという構文的分布についても、目を向けるべきだと思われる。また、複合動詞「V+得る」の構文的条件は、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として機能するか、それとも連体形として機能するかに関係しているかもしれない。そこで、本論文では、終止形として機能する場合、連体形として機能する場合に分けて、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の構文的条件について考察する。

本章の解決すべき問題は、1節に挙げた例(1)を如何にして自然な表現にすることができるのかということである。以下3節では前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が終止形として機能する場合の構文的分布について考察し、4節では前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が連体形として機能する場合の構文的分布について考察する。さらに、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の構文的特徴に基づき、例(1)の問題を解明していく。5節ではまとめを行う。

3 「V+得る」が終止形として機能する場合の構文的分布

本節では、「V+得る」が終止形として機能する場合の構文的分布について考察する。用例を観察した結果、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が終止形として機能する場合の構文的分布は、文を言い切る場合、疑問文を構成する場合、「かどうか」や「か否か」とともに疑問節を構成する場合という三つの場合に分けられる。そこで、本節では、それぞれの場合に分けて、「V+得る」の構文的分布について考察していく。

3.1 文を言い切る場合

この節では、終止形として文を言い切る場合、前置動詞が意志動詞である「V+得る」の構文的分布について考察する。コーパスを調べた結果、「V+得る」が終止形として文を言い切る場合は、主語が「だけが」「のみが」で示される単文、仮説条件文に分布している⁴⁾。そこで、本節では、主語が「だけが」「のみが」で示される単文の場合と仮説条件文の場合に分けて、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の構文的特徴について考察する。

3.1.1 主語が「だけが」「のみが」で示される単文の場合

この部分では、主語が「だけが」「のみが」で示される単文において、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることが可能であるかどうかについて考察する。用例を観察した結果、主語が「だけが」「のみが」で示される単文において、「V+得る」が終止形として文を言い切ることができる。

まず、主語が「だけが」で示される単文において、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることが可能であるかどうかについて検証する。その証左として、下記の例(8)～(11)が挙げられる。

- (8)《神》という概念で総括されているものだけが、あの文字を使いうる。(山田正紀『神狩り』1977)
- (9)そいつだけが、海からやって来るというその男だけが、グレンの二つの望みを叶え得るのだった。(菊地秀行『吸血鬼ハンター07b』1988)
- (10)あの御方とおれだけが、世界の真相を理解し得る。(菊地秀行『吸血鬼ハンター15D－魔戦抄』2003)
- (11)庄九郎だけが、この大平野に強力な軍事国家をつくり得るだろうと思っているのである。(司馬遼太郎『国盗り物語』1966)

例(8)～(11)における「V+得る」の前置動詞の「使う」「叶う」「理解する」「つくる」は意志動詞としての役割を果たし、「V+得る」は終止形として文を言い切っている⁹⁾。また、それぞれの主語の「もの」「その男」「あの御方とおれ」「庄九郎」は「だけが」によって示されている。このことから、主語が「だけが」で示される単文において、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができる^{と認めなければ}ならない。

この場合、さらに主語が「だけが」によって示されることは、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が成り立つために必要な文環境であるかどうかについて考察する必要がある。例(8)～(11)の「だけが」を「は」または「が」に置き換えると、次の例(8')～(11')に示すように、容認度が下がる。

- (8')*《神》という概念で総括されているものは(が)、あの文字を使いうる。
- (9')*その男は(が)、グレンの二つの望みを叶え得るのだった。
- (10')*あの御方とおれは(が)、世界の真相を理解し得る。
- (11')*庄九郎は(が)、この大平野に強力な軍事国家をつくり得るだろう

例(8')～(11')の主語は「だけが」ではなく、「は(が)」で示されており、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は終止形として文を言い切っている。いずれも不自然な表現として認められる。このことから、主語が「だけが」で示される場合、「V+得る」が終止形として文を言い切ることができるのに対し、主語が「は」や「が」で示される単文において、「V+

得る」が終止形として文を言い切ることができないといえる。

次に、用例を観察したところ、主語が「のみが」で示される単文において、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることが可能であると思われる。下記の例(12)(13)(14)はその裏付けである。

(12)「それを殺さんには…。天下の精兵をもってしても足りない。貂蟬。ただ、おまえのその腕のみが成し得る」(吉川英治『歴史好きは必ず読む三国志完全版』2013)

(13)“星系全体開発”のような超巨大プロジェクトのみが、そのシステムを採算ラインに乗せ得るのだ。(古橋秀之『サムライ・レンズマン』2001)

(14)神のみがそうした奇跡をあらわしうるのだろう。(三瀬龍『百億の昼と千億の夜』1980)

例(12)(13)(14)の「V+得る」の前置動詞の「成す」「乗せる」「あらわす」は意志動詞としての役割を果たしており、「成し得る」「載せ得る」「あらわし得る」は終止形として文を言い切っている。例(12)(13)(14)の主語の「おまえのその腕」「超巨大プロジェクト」「神」は「のみが」によって示されている。このことから、主語が「のみが」で示される単文において、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができると思われる。

さらに、「のみが」という部分は、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が成り立つための必須条件であるかどうかについて検討する必要がある。上記の例(12)(13)(14)の「のみが」を「は」または「が」に置き換えると、次の例(12')(13')(14')のように、不自然な表現になる。

(12')*ただ、おまえのその腕は(が)成し得る。

(13')*“星系全体開発”のような超巨大プロジェクトは(が)、そのシステムを採算ラインに乗せ得るのだ。

(14')*神は(が)そうした奇跡をあらわしうるのだろう。

例(12')(13')(14')の主語は「は(が)」によって示されており、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切っており、不自然な表現だと思われる。この

ことから、主語が「のみが」で示される場合、「V+得る」が終止形として文を言い切ることができるのに対し、主語が「は」や「が」で示される単文では「V+得る」が終止形として文を言い切ることができないといえる。

本章の1節に挙げた例(1)が不自然であるのも、主語が「は」や「が」で示される単文では「V+得る」が終止形として文を言い切ることができないためだと考えられる。そこで、本章では、このような主語が「だけが」「のみが」で示されることを、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が終止形として文を言い切るための構文的条件として位置づける。この観点の妥当性は、以下の用例によって裏付けられる。

(15)*田中選手は100メートルを10秒で走り得る。(例(1)を再掲)

(15')田中選手だけが100メートルを10秒で走り得る。

(15'')田中選手のみが100メートルを10秒で走り得る。

例(15)は1節から例(1)を再掲したものであり、不自然な表現である。この場合、例(15)の主語を示す助詞の「は」を「だけが」「のみが」に置き換えると、例(15')(15'')のように自然な表現になる。

以上の言語事実に示したように、主語が「だけが」「のみが」で示される場合、前置動詞が意志動詞である「V+得る」が終止形として文を言い切ることができるとして認めなければならない。

3.1.2 仮説条件文の場合

この部分では、仮説条件文において、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることが可能であるかどうかについて考察する。

コーパスを調べた結果、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が終止形として文を言い切る用例は、「なら」で表す条件節の複文、「てはじめて」で表す条件節の複文と「ば」で表す条件節の複文に分布している。これに基づき、仮説条件文の場合、「V+得る」は終止形として文を言い切ることができると思われる。

まず、「なら」で条件節を表す場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができるかどうかについて考察する。この場合、次のような前置動詞が意志動詞の「V+得る」の用例が挙げられる。

- (16) 辺境の人間なら呼吸まで調節し得る。(菊地秀行『吸血鬼ハンター12』2000)
- (17) 香村つかさと二人なら、そうした作業に耐え得るだろう。(井上靖『崖(上)』1979)
- (18) この装置のつくり出す空間なら、あの防御機構のエネルギーを一瞬でも排除し得るだろう。(菊地秀行『妖戦地帯1』1985)
- (19) 短期間の延長なら検討しうる。(『朝日新聞デジタル』2003年3月13日)

例(16)~(19)の「V+得る」構造の前置動詞の「調節する」「耐える」「排除する」「検討する」は意志動詞として役割を果たしており、「V+得る」は終止形として、「なら」によって条件を表す仮説条件文を言い切っている。このことから、「なら」で条件節を表す場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができると思えなければならない。

次に、「てはじめて」で条件節を表す複文において、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができるかどうかについて検証する。以下の例(20)~(23)に示すように、「てはじめて」で条件節を表す場合、「V+得る」は終止形として文を言い切ることができると考えられる。

- (20) 臨床的な、そういう過失の体験を経てはじめて、この病人にはこれ程と適量の劇薬を調合し得る。(五味康祐『刺客』1989)
- (21) 世の中を直すなどという荒業はな、誰にでもできることではないのだ。また、いつでもできることでもない。時と人と、天運が揃って初めてなし得る。(宮部みゆき『孤宿の人(下)』2005)
- (22) こうした豪族の掌握があつてはじめて、彼らを地域行政の基幹たる郡司に任命しうるのである。(西別府元日『律令国家の展開と地域支配』2002)
- (23) 英語のそれらの語が、どのような含みを持つのか、言い換えれば、英語文化が作り出した意味はどのようなものかという点に留意しつつ学習して初めて、それらの語の全体的意味を把握し得るのだ。(『朝日新聞デジタル』2006年3月19日)

例(20)~(23)の「V+得る」構造の前置動詞の「調合する」「なす」「任命する」「把握する」は意志動詞として認められる。「V+得る」は終止形として、「てはじめて」で条件節を表し

ている複文を言い切っている。このことから、「てはじめて」で条件節を表す場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができることを認めなければならない。

それから、「ば」で条件節を表す複文において、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができるかどうかについて検証する。コーパスを調べてみると、「ば」で条件節を表す場合、「V+得る」は終止形として文を言い切ることができることを突き止めた。下記の用例はその裏付けである。

(24) 矢切鞭馬がどのような異形人といえど、三人で相手をすれば、たやすく斃し得る。

(菊地秀行『妖戦地帯 2』1986)

(25) そうすれば自然都市の教育設備は国民学校を除き全部これを外に移転し得る。(石

原莞爾『戦争史大観』1993)

(26) この動揺を見て、小次郎は、「今突撃に出れば、必ず破り得る」と、感じた。(海

音寺潮五郎『平将門 下巻』1967)

(27) 預金保険法 102 条や 126 条で、破綻前の公的資金注入が可能で、この規定が適用

されれば、破綻は回避し得る。(『朝日新聞デジタル』2016 年 10 月 27 日)

例(24)～(27)の「V+得る」構造の前置動詞に「斃す」「移転する」「破る」「回避する」という意志動詞が生起している。「V+得る」は終止形として、「ば」で表す条件節の複文を言い切っている。このことから、「ば」で条件節を表す複文の場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができるといえる。

以上のことをまとめると、「なら」で表す条件節の複文、「てはじめて」で表す条件節の複文、「ば」で表す条件節の複文などの仮説条件文の場合、「V+得る」は終止形として文を言い切ることができることを認めなければならない。

この結果に基づき、本論文では、「なら」で表す条件節の複文、「てはじめて」で表す条件節の複文、「ば」で表す条件節の複文などの仮説条件文の主節に生起することが、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が終止形として文を言い切るための構文的条件と仮定する。この観点の妥当性は、以下の例(28)によって支持される。

(28)a * 田中選手は 100 メートルを 10 秒で走り得る。(例(1)を再掲)

- b 田中選手なら 100メートルを 10秒で走り得る。
- c この靴を履いてはじめて、田中選手は 100メートルを 10秒で走り得る。
- d この靴さえ履けば、田中選手は 100メートルを 10秒で走り得る。

例(28a)の「走り得る」という「V+得る」構造は終止形として単文を言い切っており、不自然な表現である。この場合、例(28a)の主語を表す助詞の「は」を「なら」に置き換えると、単文の(28a)は、例(28b)のように「なら」で表す条件節の複文になり、自然な表現になる。また、例(28a)に「この靴を履いてはじめて」という「はじめて」で表す条件節を付け加えれば、例(28c)のように自然な表現になる。さらに、例(28a)に「この靴さえ履けば」という条件節を付け加えれば、例(28d)のように「ば」で表す条件節の複文になり、自然な表現になる。

この現象から見れば、「なら」で表す条件節の複文、「てはじめて」で表す条件節の複文、「ば」で表す条件節の複文などの仮説条件文であることは、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が終止形として文を言い切るための構文的条件として認めなければならない。このことは、仮説条件文において「V+得る」は終止形として文を言い切ることができることの裏付けにもなりうる。

以上のことから、「なら」で表す条件節の複文、「てはじめて」で表す条件節の複文、「ば」で表す条件節の複文などの仮説条件文の場合において、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができるといえる。

この節をまとめると、主語が「だけが」「のみが」で示される単文の場合、「なら」「てはじめて」「ば」で表す条件節の仮説条件文の場合において、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができる。

3.2 疑問文を構成する場合

この節では、終助詞「か」などと共起し、疑問文を構成する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることが可能であるかどうかについて考察する。

用例を観察した結果、「V+得る」が終助詞の「か」と共起し、疑問文を構成する場合、「V+得る」は終止形として文を言い切ることができるという仮説が立てられる。下記の用例はその裏付けである。

(29)富なくして美が創造し得るか。(山田風太郎『戦中派不戦日記』1971)

(30)それを自覚した時、我々はどんな眼差しを獲得しうるか。(『朝日新聞デジタル』
2012年9月16日)

(31)「貴下はこれについて説明し得るか」(光瀬龍『墓碑銘二〇〇七年』1975)

(32)いかに万能の椅子とは言え、この奇怪な刺客たちに抗し得るか。(菊地秀行『妖戦
地帯2』1986)

例(29)~(32)の「V+得る」構造の前置動詞に「創造する」「獲得する」「説明する」「抗する」という意志動詞が生起している。「V+得る」構造は終止形として、終助詞の「か」とともに疑問文を構成している。このことから、終助詞の「か」とともに疑問文を構成する場合、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができると考えられる。

さらに、用例を観察してみると、「V+得る」が連語の「だろうか」と共起し、疑問文を構成する場合、「V+得る」は終止形として文を言い切ることが可能であると推測できる。この場合、以下の例(33)~(36)はその証左として挙げられる。

(33)いったいラノンの誰がそんな世界を想像し得るだろうか。(縞田理理『霧の日には
ラノンが見える3』2005)

(34)いっさいの希望が消えたときに、なお人は希望を語りうるだろうか。(今村仁司『増
補 現代思想のキイ・ワード』1985)

(35)一個人の直観がそのまま人類共通の客観と言い得るだろうか。(出川直樹『民芸:
理論の崩壊と様式の誕生』1988)

(36)もしマンションが倒壊して生き埋めになれば、何時間くらい耐え得るだろうか。
(『朝日新聞デジタル』2018年6月22日)

例(33)~(36)の「V+得る」構造の前置動詞の「想像する」「語る」「言う」「耐える」は意志動詞としての役割を果たし、「V+得る」は終止形として、連語の「だろうか」とともに疑問文を構成している。このことから、連語の「だろうか」と疑問文を構成する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができる

認めなければならない。

この結果に基づき、終助詞の「か」と共起し、疑問文を構成することや連語の「だろうか」と共起し、疑問文を構成することは、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が終止形として文を言い切るための構文的条件と仮定できる。この場合、次の例(37)のような言語現象がみられる。

(37)* 田中選手は 100 メートルを 10 秒で走り得る。(例(1)を再掲)

(37') 田中選手は 100 メートルを 10 秒で走り得るだろうか。

(37'') * 田中選手は 100 メートルを 10 秒で走り得るか。

例(37)の「走り得る」という「V+得る」構造は単文を言い切っており、不自然な表現として認められる。この場合、例(37)に連語の「だろうか」を付け加えると、例(37')のように自然な表現になるのに対し、終助詞の「か」を付け加えていても、例(37'')のように依然として不自然な表現である。

このような現象が生じるのはなぜかについてさらに深掘りする必要がある。例(37')から見れば、連語の「だろうか」と共起し、疑問文を構成する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が終止形として文を言い切ることが可能である。

一方、例(37'')が不自然な表現であることから見れば、「V+得る」が「か」とともに疑問文に用いられていても、必ずしも終止形として文を言い切ることができるとは限らないといえる。この場合、もっと具体的な条件が必要である。この条件は、「V+得る」が使われている疑問文の種類に関係しているかもしれない。この場合、例(37)の「V+得る」に終助詞「か」を付け加えると、例(37'')のような相手に答えを求める一般的な疑問文になる。いわば、一般的な疑問文において、「V+得る」は終止形として機能することができないということになる。

さらに、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が終止形として用いられる疑問文の種類について解明するために、コーパスを調べたところ、「V+得る」が使えるのは、反語的な疑問文だけではないかという仮説が立てられる。この仮説に基づき、例(37')をさらに修正し、「田中選手」を聞き手に位置づけると、次の(38)のように自然な表現になる。

(38) じゃあ、田中さん(聞き手)には 100 メートルを 10 秒で走り得るか。(「どうせで

きないだろう」という意味合いで言う)

例(38)の「V+得る」は終助詞「か」と共起し、終止形として機能しており、自然な表現である。この場合、田中選手を聞き手に仕立てることによって、「どうせできないだろう」という意味が含まれている反語的な疑問文を構成することができ、「走り得る」が自然な表現になったと考えられる。このことから、前置動詞が意志動詞の「V+得る」はすべての疑問文に用いられるのではなく、反語的な疑問文を構成する場合にのみ、用いることが可能だと認めなければならない。

さらに、例(37')に示すように、連語の「だろうか」と共起し、疑問文を構成する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が終止形として文を言い切ることが可能であるのは、「だろうか」と意味関係を結ぶ場合、すでに話者には、「できるかどうかわからない」という言外の意味が含まれているからと推測できる。

以上のことから、終助詞「か」とともに反語的な疑問文を構成する場合、連語の「だろうか」とともに疑問文を構成する場合において、「V+得る」は終止形として文を言い切ることができるといえる。

3.3 「かどうか」や「か否か」とともに疑問節を構成する場合

この節では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が疑問節を構成する場合、終止形として機能することができるかどうかについて考察する。コーパスを調べたところ、「V+得る」は「かどうか」とともに疑問節を構成する場合、終止形として機能することができると思われる。下記の用例はその裏付けである。

(39)それをタマ子が正確に証言しうるかどうか、おぼつかないとあきらめたのであろう。(横溝正史『金田一耕助ファイル 08』1976)

(40)参謀長は、桑原参謀の明晰な処理方針の案に感心したが、新兵団長に、その理屈をのみ込ませ得るかどうかが問題だった。(伊藤桂一『遙かなインパール』2001)

(41)しかし、わたしは、それでもなお自分たちは「幸福な家族である」と胸を張って言い得るかどうかと懸念する。(三浦綾子『孤独のとなり』1984)

(42)「また、国を取り巻く時代の状況変化に十分に対応しうるかどうかが従前に増して大きく問われる」(『朝日新聞デジタル』2016年5月2日)

例(39)~(42)の「V+得る」構造の前置動詞の「証言する」「のみ込ませる」「言う」「対応する」は意志動詞としての役割を果たし、「V+得る」は終止形として機能し、「かどうか」とともに疑問文を構成している。このことから、「かどうか」とともに疑問節を構成する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができる」と認めなければならない。

また、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が「かどうか」と意味関係を結び、疑問節を構成する場合以外にも、「か否か」とともに疑問節を構成する場合も挙げられる。この場合においても、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は、終止形として機能することができる。次の用例はその裏付けである。

(43)果してそのような緻密な関係を保持し得るか否かが問題であった。(五味川純平『ガダルカナル』1979)

(44)株式の将来価格を人智をもって予知しうるか否かが事件の争点とされたのである。(青野豊作『相場師入門』2000)

(45)今回の出陣には、上洛の兵を進め得るか否かの見透しがかかっている。(咲村観『上杉謙信人の巻』1983)

(46)しかも、仮に一般道路での自動運転が技術的に可能だったとしても、それを低コストで乗用車に応用しうるか否かは別問題である。(『朝日新聞デジタル』2019年5月16日)

例(43)~(46)の「V+得る」構造の前置動詞の「保持する」「予知する」「進める」「応用する」は意志動詞として機能し、「V+得る」は終止形として機能し、「か否か」とともに疑問文を構成している。このことから、「か否か」とともに疑問節を構成する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができる」と認められる。

つまり、「かどうか」または「か否か」とともに疑問節を構成する場合、「V+得る」は終止形として機能することができる。この結果に基づき、下記の例(47)を例(47')(47'')のように、「V+得る」に「かどうか」や「か否か」を後続させ、(47)の内容を疑問節として位置づけてみると、自然な表現になる。

(47)* 田中選手は 100 メートルを 10 秒で走り得る。(例(1)を再掲)

(47') 田中選手が 100 メートルを 10 秒で走り得るかどうかは不明である。

(47'') 田中選手が 100 メートルを 10 秒で走り得るか否かは不明である。

例(47)の「走り得る」は主語が助詞「は」で示される単文に使われており、不自然な表現である。この場合、助詞「は」を「が」に置き換え、「走り得る」に「かどうか」「か否か」を付け加え、疑問節を構成すると、例(47')(47'')のように自然な表現になる。このことから、「かどうか」「か否か」とともに疑問節を構成する場合、「V+得る」は終止形として機能することができると思えなければならない。

3節をまとめてみると、主語が「だけが」「のみが」で示される単文、「なら」「てはじめて」「ば」などで条件を表す仮説条件文、助詞の「か」とともに構成した反語的な疑問文、連語の「だろうか」とともに構成した疑問文、「かどうか」や「か否か」とともに疑問節を構成する場合において、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は終止形として機能することができる。

4 「V+得る」が連体形として機能する場合の構文的分布

本節では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が連体形として機能する場合の構文的分布について考察する。コーパスに基づき、「V+得る」が連体形として機能する場合の構文的分布は、被修飾語が人物である場合、被修飾語が物である場合、「限り」と共起する場合の三つにまとめられる。

4.1 被修飾語が人物である場合

この節では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は連体形として機能できるかどうかについて考察し、さらに人物を表す名詞がその被修飾語に立つことが可能であるかどうかについて考察する。コーパスを調べた結果、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が連体形として機能する場合、人物を表す名詞はその被修飾語になりうる。下記の(48)～(51)はその裏付けとして挙げられる。

(48)第七中隊は、戦死者三十五名。負傷者二十名で、戦死者だけでも、夜襲突入時の

半数に達している。戦い得る生存者は、中隊長以下、わずか十七名になっていた。

(伊藤桂一『遙かなインパール』2001)

(49)この窮地を救い得るものは、いまは貴隊よりほかにはない。(伊藤桂一『遙かなインパール』2001)

(50)竜太の鋭い打ちこみを避け得る者は滅多にいない。(三浦綾子『銃口』1994)

(51)SDGsの採択から3年を経たいま、社会を変えうる人たちによりやくそのメッセージが伝わり始めた気がします。(『朝日新聞デジタル』2018年11月27日)

例(48)～(51)の「V+得る」構造の前置動詞の「戦う」「救う」「避ける」「変える」は意志動詞としての役割を果たし、「V+得る」構造は連体形として機能している。さらに、被修飾語の「生存者」「もの」「者」「人たち」は人物を指している。

このことから、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は連体形として機能することができるといえる。さらに、その被修飾語に、人物を表す名詞が立つことが可能である。

4.2 被修飾語が物である場合

この節では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は連体形として機能する場合、物を表す名詞を修飾することが可能であるかどうかについて考察する。用例を観察してみたところ、「V+得る」が連体形として機能する場合、物を表す名詞も被修飾語になりうる⁹⁾。下記の用例はその裏付けである。

(52)我が方に戦車に対抗し得る火器等の所要装備があるなら、対戦車戦闘は絶対に恐ろしいものではない。(五味川純平『ノモンハン(下)』1978)

(53)また、一気に火星や地球まで到達し得る大型宇宙船でも、木星近傍で大圏航路の航路管制局の誘導にのるのが極めて面倒だった。(光瀬龍『たそがれに還る』1985)

(54)吸血鬼や人狼などの不死性の魔物を殺傷し得る兵器としては最小の部類に入る。(古橋秀之『ブラックロッド』1997)

(55)しかも、現場には結果において不十分だったが、十分人を殺し得る薬の痕跡が残っている。(横溝正史『芙蓉屋敷の秘密』1978)

例(52)～(55)の「V+得る」構造の前置動詞の「対抗する」「到達する」「殺傷する」「殺す」

は意志動詞として機能し、「V+得る」構造は連体形として機能している。さらに、被修飾語の「火器等の所要装備」「大型宇宙船」「兵器」「薬」は物を指す名詞である。

このことから、「V+得る」が連体形として機能する場合、物を表す名詞は被修飾語になりうるといえる。

4.3 「限り」と共起する場合

この節では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は連体形として機能する場合、「限り」を修飾することが可能であるかどうかについて考察する。

下記の例(56)～(59)に示すように、「V+得る」は連体形として機能する場合、「限り」と共起できる。

(56)考え得る限りすべての方法を駆使してはみるけど、正直言って今の医療技術で彼女の命を救うことはできないわ。(三雲岳斗『レベリオン 第01巻』2000)

(57)活動報告にも極めて積極的で、想像し得る限りの隙間に潜りこみ、都市のあらゆる姿をブログや写真で公開する。(『朝日新聞デジタル』2015年1月18日)

(58)それから幾日、私は想像し得る限りの美しい音を思いえがき、胸をふるわせたことだろう。(五味康祐『五味康祐オーディオ遍歴』2005)

(59)ここに登場する人物はもちろん、架空のものであり、特定のモデルはない。だが、ここに示されている客観データは入手し得る限り正確なものを使用した。(堺屋太一『油断!』1975)

例(56)～(59)の「V+得る」構造の前置動詞の「考える」「想像する」「入手する」は、文脈から自主性が読み取れるため、意志動詞として機能していると考えられる。この場合において、「V+得る」構造は連体形として機能し、「限り」と意味関係を結んでいる。このように、「V+得る」が連体修飾語として機能することができる。その被修飾語に人物や物を表す名詞が立つのが普通である。

この結果に基づき、連体形として機能することを前置動詞が意志動詞の「V+得る」の構文的条件として仮定できる。この場合、1節に挙げた例(1)をもって、この構文的条件について検討する。次の例(60)の「走り得る」に「者」という人物を付け加え、「走り得る」を終止形から連体形にすることによって、例(60')のように自然な表現になる。

(60)* 田中選手は 100 メートルを 10 秒で走り得る。(例(1)を再掲)

(60')100 メートルを 10 秒で走り得る者は、田中選手だけだ。

例(60)の「走り得る」は終止形として機能し、文を言い切っており、不自然な表現であるのに対し、例(60')の「走り得る」は「者」を修飾し、連体形として機能しており、自然な表現である。このことから、終止形として不自然な表現の「V+得る」を連体形にすることによって、自然な表現になる可能性がある。

また、実際の用例を考察したところ、本論文で取り扱っている前置動詞が意志動詞の「V+得る」の 13,660 例のうち、連体形として使われているのは 8,486 例があり、用例の 6 割以上を占めている。いわば、現代語において、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は終止形としての機能を果たす場合より、連体形としての機能を果たす場合のほうがよく使われている。

4 節をまとめると、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が連体形として機能することができる。人物や物を表す名詞は「V+得る」の被修飾語になりうる。また、「限り」と共起することができる。

5 本章のまとめ

本章では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」はどんな場合に生起しうるのかについて考察し、その構文的条件について考察してきた。分析の結果を改めてまとめると、次のようになる。

- ①前置動詞が意志動詞の「V+得る」には、終止形として機能する場合と連体形として機能する場合がある。「V+得る」が連体形として機能する場合は本論文の調査対象の 13,660 例の 6 割を示し、終止形よりよく使われている。
- ②主語が「だけが」「のみが」で示される単文、「なら」「てはじめて」「ば」などで条件を表す仮説条件文、助詞の「か」とともに構成した反語的な疑問文、連語の「だろうか」とともに構成した疑問文、「かどうか」「か否か」とともに疑問節を構成する場合において、「V+得る」は終止形として機能することができる。
- ③前置動詞が意志動詞の「V+得る」は連体形として機能することができる。その被

修飾語に、人物や物を表す名詞が立つことが可能である。また、「限り」と意味関係を結ぶことが可能である。

- ④単文に於いて、主語が「だけが」「のみが」で示される場合、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができるのに対し、主語が「は」や「が」で示される場合、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は終止形として文を言い切ることができない。

以上が本章のまとめである。また、なぜ「V+得る」はこのような構文的分布を有しているのか、なぜ「V+得る」は連体形としてよく使われるようになったのかなどの問題についても考察する必要がある、また別の機会でも論じることにする。さらに、第1章から第5章までに論じてきた中国語の可能補語の「V+“得”/“不”+“了”」構造と、「V+“得”/“不”+“了”」構造との対応・非対応関係についても考察する必要がある、次章で改めて論じることにする。

注

- 1) 例(1)は庵ほか(2001)の pp.178 から引用した文である。例(1)が「不自然」という判断は、庵ほか(2001:178)の判断である。庵ほか(2001)p178 では、例(1)について「特定の人を主語にした能力可能を表すような例では、『～得る』は不自然である。」と述べている。筆者が行ったアンケートの結果と一致したため、「不自然」と見なした。
- 2) 本章では、「～うる」と「～える」が同じものであるとみなし、「V+得る」として扱うことにする。また、「勝ち得る」のような「V+得る」が本動詞の意味の「獲得する」の意味を表す場合も対象外とする。なお、「～得ない」にはこのような構文的特徴がみられないため、本章の対象外とする。
- 3) 「疑問節」とは末尾に「か」などを伴って不確定な内容を表す補足節のことである。詳細については日本語記述文法研究会(2008)の pp.37-42 を参照されたい。
- 4) 本章では、筆者が収集した計 13,660 例の中で、10 例以下の現象に対し、現象として取り上げるほどの量に達していないと判断し、対象外とする。
- 5) 例(11)の「V+得る」構造の後に「と思っているのである」という部分が含まれているが、この部分は話者の意志を表す部分、いわゆるモダリティの部分とみなし、例(11)も単文として扱うことにする。
- 6) 本章では、動詞自体が意志動詞であり、物が被修飾語の連体修飾構造に用いると、無意志的な動きを表す現象について、「V+得る」の構文的分布に影響のないものとし、あくまでも動詞自体が意志動詞かどうかを判断基準とする。

第8章 「V+得る」と「V+“得”/“不”+“来”」「V+“得”/“不”+“了”」との対応・非対応関係について

1 はじめに

本論文では、第1章から第5章までは、中国語の可能補語の「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能と構文的特徴について考察してきた。さらに第6章と第7章では、日本語の「V+得る」の意味・機能と構文的特徴について考察してきた。本章では、これまでの研究結果に基づき、日本語の「V+得る」と、中国語の可能補語の「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造との対応・非対応関係について考察する。

日本語の「V+得る」は可能を表す複合動詞として知られており、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造は可能の意味を表す可能補語として知られている。同じく可能を表す表現として、「V+得る」は、「V+“得”/“不”+“来”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応する場合もあれば、対応しない場合もある。しかし、具体的に、「V+得る」はどんな場合に「V+“得”/“不”+“来”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応し、どんな場合に対応しないかという問題について、未だ明確なルールが示されていない。

また、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造に比べると、日本語の「V+得る」の使用可能な文環境は限られている。そのため、本章では、対照言語学の観点から、日本語の「V+得る」の構文的分布を中心に、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造はどんな場合にそれと対応するのかという問題を解明に向けて、両者の対応・非対応を明らかにする。そうすることによって、第二言語習得のためのルールを確立したい。

2 先行研究の問題点と本論文の立場

日本語の「V+得る」構造に関する研究は、渋谷勝己(1986)、日本語記述文法研究会(2009)、丁颯颯(2020)などが挙げられる。渋谷勝己(1986:pp107-108)では、「可能」の種類から、「V+得る」は「認識の可能」として位置づけられている。日本語記述文法研究会(2009:283)は、「V+得る」構造の意味・機能について、「『(し)うる』『(し)える』は動作が起こる可能性があることを表す」と述べている。丁颯颯(2020)では、「V+得る」構造の構文的条件につい

て、前置動詞が意志動詞である「V+得る」はどんな場合に生起しうるかという問題について述べている。

一方、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造に関する研究は、刘月华(1998)、安本真弓(2009)、丁飒飒(2017)などが挙げられる。刘月华(1998)では、「V+“得”/“不”+“来”」構造の「V+“得”/“不”+“来”」構造について、前置動詞と「V+“得”/“不”+“来”」構造の意味関係について述べている。安本真弓(2009)では、「V+“得”/“不”+“来”」構造と「“能”+V」構造の生起条件及び両者の違いについて述べている。丁飒飒(2017)では、どんな動詞が「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞になれるのかについて考察し、その意味・機能について述べている。

さらに、中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造に関する研究は、申莉(2011)、王明洲(2019)、丁飒飒(2020)などが挙げられる。申莉(2011)では、「V 得/不了」構造と「V 得/不着」構造の表す意味の違いについて述べている。王明洲(2019)では、「V 不了」構造と「V 不“着”」の意味の違いについて述べている。丁飒飒(2020)では、「V+“得”+“了”」構造と「V+“不”+“了”」構造が疑問詞の“谁”と意味関係を結ぶ場合の構文的分布について述べている。

以上のように、これまでの「V+得る」に関する研究も、「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造に関する研究は、未だ個別言語の研究にとどまっている。管見の限り、日本語の「V+得る」と中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造に関する対照研究はまだないようである。

日本語の「V+得る」と中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造は可能を表す表現として、同じく「認識の可能」を表す役割を果たすことが可能である。この点から、「V+得る」は中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造とは、少なからぬ共通点があると考えられる。また、実際の用例を調べてみたところ、日本語の「V+得る」が「V+“得”/“不”+“来”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応する場合も数多くみられた。次の例(1)のように、日本語の「V+得る」が「V+“得”/“不”+“来”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造として翻訳することが可能である。

- (1)自分より大いなる人格は書き得ない。(三浦綾子『ちいろば先生物語』1987)
- (1')写不来比自己更大的人格。
- (1'')写不了比自己更大的人格。

例(1)の「書き得ない」は「V+得ない」構造として機能している。この場合、例(1')のように“写不来”という「V+“不”+“来”」構造や、例(1'')のように“写不了”という「V+“不”+“了”」構造に翻訳していても差し支えないように思われる。このことからみれば、日本語の「V+得る」と中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造、「V+“得”/“不”+“了”」構造の間には、似通った意味・機能を表す場合があると認めなければならない。いわば、日本語の「V+得る」は、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造、「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応する場合があると考えられる。

また、日本語の「V+得る」構造と中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造、「V+“得”/“不”+“了”」構造との対応・非対応関係について考察する場合、次の例(2)のような現象を見逃してはならない。

(2)富なくして美が創造し得るか。(山田風太郎『戦中派不戦日記』1971)

(2')没有财富，创造得了美么？

(2'')* 没有财富，创造得来美么？

例(2)の「創造し得る」は「V+得る」構造として機能し、疑問文に使われている。この場合、「創造し得る」は、例(2')のように“创造得了”という「V+“得”+“了”」構造に翻訳することが可能であるのに対して、“创造得来”という「V+“得”+“来”」構造に翻訳することができない。いわば、「V+得る」構造は、必ずしも「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造の両方とも対応できるわけではないといえる。このことから、「V+得る」には、「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応しているが、「V+“得”/“不”+“来”」構造と対応しない場合がある¹⁾。

さらに、コーパスを調べた結果、「V+得る」構造には、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造とも、「V+“得”/“不”+“了”」構造とも対応しない場合がある。次の例(3)はその裏付けとして挙げられる。

(3)同じようなことは、現実の世界でも起こり得るのだった。(伊藤たかみ『指輪をはめたい』2003)

(3')* 同样的事情也在现实的世界也发生得来。

(3'')* 同样的事情也在现实的世界也发生得了。

例(3)の「起こり得る」は無意志動詞の「起こる」が前置動詞として機能している「V+得る」構造である。この場合、例(3')(3'')のように「V+“得”+“来”」構造や「V+“得”+“了”」構造に翻訳すると、不自然な表現になる。このことから、「V+得る」には、「V+“得”+“来”」構造とも「V+“得”+“了”」構造とも対応しない場合があると認めなければならない。

以上の言語事実が示すように、「V+得る」と「V+“得”/“不”+“来”」構造、「V+“得”/“不”+“了”」構造の間には、対応する場合と対応しない場合が存在することを突き止めた。しかし、これまでの研究では、未だ「V+得る」と「V+“得”/“不”+“来”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造はどんな場合に対応し、どんな場合に対応しないかという問題について解明していない。

本章では、このような「V+得る」と「V+“得”/“不”+“来”」構造、「V+“得”/“不”+“了”」構造との対応・非対応関係について解明していきたい。また、日本語の「V+得る」の使用可能な文環境は限られているため、本章では、日本語の「V+得る」の意味・用法を中心に、どんな場合に「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造の両方とも対応することができるか、どんな場合に、「V+“得”/“不”+“了”」構造としか対応しないか、さらにどんな場合に「V+“得”/“不”+“来”」「V+“得”/“不”+“了”」の両方とも対応しないかという三つの場合に分けて考察する。

以下3節では、「V+得る」が「V+“得”/“不”+“来”」「V+“得”/“不”+“了”」の両方とも対応できる場合について考察し、4節では「V+得る」が「V+“得”/“不”+“了”」構造としか対応しない場合について考察し、さらに5節では、「V+得る」が「V+“得”/“不”+“来”」「V+“得”/“不”+“了”」の両方とも対応しない場合について考察する。6節ではまとめを行う。

3 「V+得る」が「V+“得”/“不”+“来”」とも「V+“得”/“不”+“了”」とも対応する場合

本節では、「V+得る」が「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造の両方とも対応する文環境について考察する。

用例を観察してみると、「V+“得”/“不”+“来”」「V+“得”/“不”+“了”」の両方とも対応する場合は、前置動詞が意志動詞である「V+得る」の用法に集中している。もっと具体的に言えば、主語が「だけが」「のみが」に示される文、仮説条件文、「かどうか」「か否か」と疑問節を構成する文、前置動詞が意志動詞の「V+得ない」の文に分布している²⁾。

そこで、本節では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が「だけが」「のみが」で主語を示す文に使われる場合、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が仮説条件文に使われる場合、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が「かどうか」「か否か」と疑問節を構成する場合、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得ない」の場合という四つの場合に分けて、「V+得る」と「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造との対応関係について考察する。

3.1 Vが意志動詞の「V+得る」が「だけが」「のみが」で主語を示す文に使われる場合

この節では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が「だけが」「のみが」で主語を示す文に使われる場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応するかどうかについて考察する。もっと具体的に言えば、「V+得る」は「V+“得”/“不”+“来”」や「V+“得”/“不”+“了”」に翻訳することが可能であるかどうかという方法で考察を進める。

まず、下記の例(4)～(7)において、前置動詞が意志動詞の「V+得る」は「だけが」「のみが」で主語を示す文に使われている。

(4)《神》という概念で総括されているものだけが、あの文字を使いうる。(山田正紀『神狩り』1977)

(5)だが本当は、何らかの仕方であらかじめ陰の存在に触れた者だけが、光の限界の意味を理解しうるとも言えるのである。(永井均『ウィトゲンシュタイン入門』1995)

(6)殺人事件は、人間だけがなし得る、最大の罪悪です。(胡桃沢耕史『翔んでる警視正 平成篇1』1989)

(7)神ののみがそうした奇跡をあらわしうるのだろう。(三瀬龍『百億の昼と千億の夜』1980)

例(4)～(7)の「V+得る」の前置動詞Vには「使う」「理解する」「なす」「あらわす」という意志動詞が使われており、例(4)(5)(6)の主語は「だけが」によって示され、例(7)の主語は「のみが」によって示されている。

このような場合において、「V+得る」構造は、次の例(4')～(7')に示すように、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造や、「V+“得”/“不”+“了”」構造に翻訳しても差し支えないと

思われる。

(4') 只有是“上帝”概念的人物才(用得来・用得了)那种文字。

(5') 但是实际上可以说, 只有通过某些方法接触过黑暗存在的人才(理解得来・理解得了)光明的极限。

(6') 杀人事件是, 只有人才(干得来・干得了)的最大的罪恶。

(7') 只有神(创造得来・创造得了)这样的奇迹。

例(4')~(7')に示すように、例(4)~(7)の「使いうる」「理解しうる」「なし得る」「あらわしうる」は中国語の“用得来”“理解得来”“干得来”“创造得来”という「V+“得”+“来”」構造に翻訳することも、中国語の“用得了”“理解得了”“干得了”“创造得了”という「V+“得”+“了”」構造に翻訳することも可能である。

このことから、Vが意志動詞の「V+得る」が「だけが」「のみが」で主語を示す文に使われる場合、「V+得る」は、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造とも「V+“得”/“不”+“了”」構造とも対応するといえる。

3.2 Vが意志動詞の「V+得る」が仮説条件文に使われる場合

前節では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が「だけが」「のみが」で主語を示す文に使われる場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造に翻訳することが可能であるかどうかについて考察した。この節では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が仮説条件文に使われる場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応するかどうかという問題について考察する。この場合においても、「V+得る」構造が「V+“得”/“不”+“来”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造に翻訳することが可能かどうかという基準をもって検討する。

まず、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が仮説条件文に使われている用例として、下記の例(8)~(11)が挙げられる。

(8) 辺境の人間なら呼吸まで調節し得る。(菊地秀行『吸血鬼ハンター12』2000)

(9) 香村つかさと二人なら、そうした作業に耐え得るだろう。(井上靖『崖(上)』1979)

(10) 時と人と、天運が揃って初めてなし得る。(宮部みゆき『孤宿の人(下)』2005)

(11)晩年のベートーヴェンの歳になって、やっと、限られた、世界でも数人のピアニストがその心境を弾き得るだろう。(五味康祐『西方の音』2001)

例(8)~(11)における「V+得る」の前置動詞の「調節する」「耐える」「なす」「弾く」は意志動詞としての機能を果たしている。例(8)(9)は「なら」によって示された仮説条件文であり、例(10)は「てはじめて」によって示された仮説条件文であり、例(11)は副詞の「やっと」によって示された仮説条件文である。この場合、次の例(8')~(11')に示すように、「V+得る」構造を中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造に翻訳することが可能である。

(8')边境の人连呼吸都(调节得来・调节得了)。

(9')和香村司两个人的话,应该(承受得来・承受得了)那样的工作吧。

(10')只有时间,人,天运都齐了,才(做得来・做得了)。

(11')世界上也只有屈指可数的几个钢琴家,在到了晚年的贝多芬的年龄的时候,才(弹得来・弹得了)那个心境吧。

例(8')~(11')に示すように、例(8)~(11)にある「調節し得る」「耐え得る」「なし得る」「弾き得る」は中国語の“调节得来”“承受得来”“做得来”“弹得来”という「V+“得”+“来”」構造に翻訳することも、中国語の“调节得了”“承受得了”“做得了”“弹得了”という「V+“得”+“了”」構造に翻訳することも可能である。

このことから、Vが意志動詞の「V+得る」が仮説条件文に使われる場合、「V+得る」は、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応すると認めなければならない。

3.3 Vが意志動詞の「V+得る」が「かどうか」「か否か」と疑問節を構成する場合

この節では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が「かどうか」「か否か」と疑問節を構成する場合、「V+“得”+“来”」構造や「V+“得”+“了”」構造と対応するかどうかについて考察する。具体的に言えば、「V+得る」は「V+“得”/“不”+“来”」や「V+“得”/“不”+“了”」に翻訳することが可能であるかどうかという基準をもって検討する。「かどうか」「か否か」と疑問節を構成する場合の用例として、次の例(12)~(15)のような前置動詞が

意志動詞の「V+得る」の用例が挙げられる。

- (12)また、国を取り巻く時代の状況変化に十分に対応しうるかどうかが従前に増して大きく問われる。(『朝日新聞デジタル』2016年5月2日)
- (13)ブラウン氏によると、米兵は肉体的にも前線任務に耐えうるかどうか、心配していたという。(『朝日新聞デジタル』2012年3月16日)
- (14)果してそのような緻密な関係を保持し得るか否かが問題であった。(五味川純平『ガダルカナル』1979)
- (15)したがって、この当時に世界資本主義の仲間入りを果たしうるか否かは、たんなる資本主義にではなく、この段階的な変化によく対応しうるか否かにもかかってきていたといわなければならない。(高橋衛『明治から昭和へ選択の屈折』2005)

例(12)~(15)における「V+得る」の前置動詞の「対応する」「耐える」「保持する」「対応する」には、意志性が感じられるため、意志動詞としての機能を果たしていると思われる。例(12)(13)の「V+得る」は「かどうか」とともに疑問節を構成し、例(14)(15)における「V+得る」は「か否か」とともに疑問節を構成している。

この場合においても、次の例(12')~(15')に示すように、Vが意志動詞の「V+得る」構造を中国語の「V+“得”“不”+“来”」構造や「V+“得”“不”+“了”」構造に翻訳することが可能である。

- (12')此外，能否充分(应对得来・应对得了)该国所在的时代变化，也变得比以前都更加重要。
- (13')据布朗先生说，美国士兵曾担心他们身体是否(承受得来・承受得了)前线任务。
- (14')最终是否(维持得来・维持得了)这样紧密的关系确实是一个问题。
- (15')因此、必须说，当时能否进入世界资本主义的行列，不仅仅取决于资本主义，这还取决于是否充分(应对得来・应对得了)这一阶段性的变化。

例(12)~(15)における「対応しうる」「耐え得る」「保持し得る」「対応しうる」は、例(12')~(15')のように、中国語の“应对得来”“承受得来”“维持得来”“应对得来”という「V+“得”+“来”」構造に翻訳することも、中国語の“应对得了”“承受得了”“维持得了”“应对得了”とい

う「V+“得”+“了”」構造に翻訳することも可能である。

このことから、Vが意志動詞の「V+得る」が「かどうか」「か否か」と疑問節を構成する場合、「V+得る」は中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応するといえる。

3.4 Vが意志動詞の「V+得ない」の場合

この節では、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得ない」について、「V+“不”+“来”」構造や「V+“不”+“了”」構造と対応するかどうかについて考察する。この場合、次の例(16)～(19)のようなVが意志動詞の「V+得ない」の用例が挙げられる。

(16)自分より大いなる人格は書き得ない。(例(1)を再掲)

(17)だが、それだけの規模の霊体融合を可能にする霊圧、それを維持する強力な結界は現行の技術では作り得ない。(古橋秀之『ブライトライツ・ホーリーランド』1999)

(18)論理の枠からこぼれ落ちるもの、言語では語り得ないものを歌に託した。(『朝日新聞デジタル』2019年2月2日)

(19)複数の企業で個人データが共有されると、本人すら予測し得ないプロファイリングが行われる恐れがあります。(『朝日新聞デジタル』2018年10月27日)

例(16)～(19)における「V+得ない」の前置動詞の「書く」「作る」「語る」「予測する」は意志動詞としての機能を果たしているため、前置動詞が意志動詞の「V+得ない」として認められる。

それから、この場合の「V+得ない」は「V+“不”+“来”」や「V+“不”+“了”」に翻訳できるかどうかについて検討する。次の例(16')～(19')に示すように、Vが意志動詞である場合の「V+得ない」構造を、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造に翻訳することも、「V+“得”/“不”+“了”」構造に翻訳することも可能である。

(16')(写不来・写不了)比自己更大的人格。

(17')但是，以现在的技术(做不来・做不了)足够强大的结界，来能够维持这个强大到能够使“灵体融合”变为可能的大规模灵压。

(18')我把这些不符合伦理框架的，用语言(描述不来・描述不了)的东西，托付给歌曲。

(19')当多个公司共享个人数据时,可能会出现连本人都(预测不来·预测不了)的性能分析被自动执行的风险。

例(16')~(19')のように、例(16)~(19)にある「書き得ない」「作り得ない」「語り得ない」「予測し得ない」という前置動詞が意志動詞の「V+得ない」構造は、中国語の“写不来”“做不来”“描述不来”“预测不来”という「V+“不”+“来”」構造に翻訳することも、中国語の“写不了”“做不了”“描述不了”“预测不了”という「V+“不”+“了”」構造に翻訳することも可能である。

このことから、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得ない」は、中国語の「V+“不”+“来”」構造とも「V+“不”+“了”」構造とも対応すると認められる。

3節をまとめると、「だけが」「のみが」で主語を示す文に使われる場合、仮説条件文に使われる場合、「かどうか」「か否か」と疑問節を構成する場合、Vが意志動詞の「V+得る」は、中国語の「V+“得”+“来”」構造と「V+“得”+“了”」構造と対応する。Vが意志動詞である場合の「V+得ない」は、中国語の「V+“不”+“来”」構造と「V+“不”+“了”」構造と対応する。

4 「V+得る」が「V+“得”+“不”+“了”」構造としか対応しない場合

本節では、「V+得る」が「V+“得”+“不”+“了”」構造と対応するのに対し、「V+“得”+“不”+“来”」構造と対応できない場合について考察する。

用例を観察してみると、「V+得る」が「V+“得”+“不”+“了”」構造としか対応しないケースは、Vが意志動詞の「V+得る」が疑問文に使われる場合、「行く」という動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合に分布している。この二つのケースは、同じレベルの基準ではなく、「V+得る」が疑問文に使われる場合は構文的特徴のレベルから、「行く」という動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合はVの語彙的制限のレベルから、「V+得る」が「V+“得”+“不”+“来”」構造と対応しないと考えられる³⁾。

そこで、本節では、前置動詞が意志動詞の「V+得る」が疑問文に使われる場合と、「行く」という動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合という二つの場合に分けて、「V+得る」が「V+“得”+“不”+“了”」構造としか対応しないケースについて、翻訳可能かどうかという基準をもって考察する。

4.1 Vが意志動詞の「V+得る」が疑問文に使われる場合

この節では、Vが意志動詞の「V+得る」が疑問文に使われる場合、「V+“得”/“不”+“来”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応するかどうかについて考察する。下記の例(20)～(23)は、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が疑問文に使われる用例として挙げられる。

(20)富なくして美が創造し得るか。(例(2)を再掲)

(21)「貴下はこれについて説明し得るか」(光瀬龍『墓碑銘二〇〇七年』1975)

(22)いかに万能の椅子とは言え、この奇怪な刺客たちに抗し得るか。(菊地秀行『妖戦地帯 2』1986)

(23)もしマンションが倒壊して生き埋めになれば、何時間くらい耐え得るだろうか。
(『朝日新聞デジタル』2018年6月22日)

例(20)～(23)の「V+得る」の前置動詞の「創造する」「説明する」「抗する」「耐える」は意志動詞として機能し、「V+得る」構造は疑問文に使われている。

この場合において、次の例(20')～(23')に示すように、Vが意志動詞の「V+得る」構造は中国語の「V+“得”+“了”」構造に翻訳することが可能であるのに対して、「V+“得”+“来”」構造に翻訳することができないと思われる。

(20')没有财富，(创造得了/*创造得来)美么？

(21')您(解释得了/*解释得来)这个么？

(22')虽说是一把万能的椅子，但是(对抗得了/*对抗得来)那些刺客么？

(23')如果一间公寓倒塌被活埋了的话，(坚持得了/*坚持得来)几个小时呢？

例(20')～(23')に示すように、例(20)～(23)にある「創造し得る」「説明し得る」「抗し得る」「耐え得る」は、中国語の“创造得了”“解释得了”“对抗得了”“坚持得了”という「V+“得”+“了”」構造に翻訳することが可能であるのに対し、中国語の“创造得来”“解释得来”“对抗得来”“坚持得来”という「V+“得”+“来”」構造に翻訳することができないと認めなければならない⁴⁾。

このことから、Vが意志動詞の「V+得る」が疑問文に使われる場合、Vが意志動詞であ

る場合の「V+得ない」は、中国語の「V+“不”+“了”」構造と対応することができるのに対し、「V+“不”+“来”」構造と対応しないといえる。

4.2 「行く」が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合

この節では、「行く」という動詞が前置動詞に生起する場合、「V+得ない」構造は「V+“不”+“来”」構造や「V+“不”+“了”」構造と対応するかどうかについて考察する。まず、「行く」という動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ用例として、次の例(24)(25)(26)を挙げておく。

(24) 武術にかぎらないが、すべて、技術というものは、一心不乱、その道に打ちこんで狂気の状態になる期間がないと、深い所までは行き得ない。(海音寺潮五郎『史談と史論(上)』1977)

(25) もう車は行きえない。(吉川英治『新・平家物語』2014)

(26) 陸路ではいきえないところに船はいき、人をはこび、人は城をきずき、群れをつくる。(『群像』(第55巻)2000)

例(24)(25)(26)の「V+得ない」構造の前置動詞に、「行く」という意志動詞が生起している。つまり、「V+得ない」の前置動詞に、「行く」が生起しうる。しかし、このような場合において、次の例(24')(25')(26')に示すように、前置動詞が「行く」の「V+得ない」構造は中国語の「V+“不”+“了”」構造に翻訳することが可能であるのに対し、「V+“不”+“来”」構造に翻訳することができないと思われる。

(24') 不仅是武术，任何一门技术，如果没有坚定不懈地钻研、甚至钻研到发狂的状态的话，是(去不了/*去不来)深处的。

(25') 车已经(去不了/*去不来)了。

(26') 船舶去到陆路(去不了/*去不来)的地方，载着人，人在所到之地建城，成为一个团体。

例(24')(25')(26')に示すように、例(24)(25)(26)の「行き得ない」は、中国語の“去不了”という「V+“不”+“了”」構造に翻訳することが可能であるのに対し、中国語の“去不来”と

いう「V+“不”+“来”」構造に翻訳することができないのである。

なぜならば、「行く」を意味する中国語の“去”という動詞は、「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に立つことができないからである。もっと具体的に言えば、“去”は「行く」という意味を表し、「V+“得”/“不”+“来”」構造にある“来”とは対義語関係にあるため、“去”という動詞自体を、「V+“得”/“不”+“来”」構造に使用することができない。そのため、前置動詞が「行く」の「V+得ない」構造は「V+“不”+“来”」構造に翻訳することができないのである。

このことから、「行く」という動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合、「V+得ない」は、中国語の「V+“不”+“了”」構造と対応することができるのに対し、「V+“不”+“来”」構造と対応することができない。

4節をまとめると、Vが意志動詞の「V+得る」が疑問文に使われる場合、「行く」という動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合において、「V+得る」「V+得ない」は、中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応することができるのに対し、「V+“得”/“不”+“来”」構造と対応しないのである。

5 「V+得る」が「V+“得”/“不”+“来”」「V+“得”/“不”+“了”」と対応しない場合

以上のように、本章では、3節において、「V+得る」が「V+“得”/“不”+“来”」構造とも「V+“得”/“不”+“了”」構造とも対応するケースについて検討し、4節において、「V+“得”/“不”+“了”」構造としか対応しないケースについて考察してきた。本節では、「V+得る」構造が「V+“得”/“不”+“来”」構造とも「V+“得”/“不”+“了”」構造とも対応しない場合について考察する。

用例を観察してみると、「V+得る」構造が「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造の両者とも対応しないケースは、無意志動詞が「V+得る」構造の前置動詞に立つ場合が挙げられる。このケースは、「V+得る」の前置動詞に立つことが可能な無意志動詞と、「V+“得”/“不”+“来”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造の前置動詞に立つことが可能な無意志動詞と一致していないことに起因していると推測できる。

そこで、本節では、便宜上さらに無意志動詞が「V+得る」構造の前置動詞に立つ場合と、無意志動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合という二つの場合に分けて考察する。

5.1 無意志動詞が「V+得る」構造の前置動詞に立つ場合

この節では、無意志動詞が「V+得る」構造の前置動詞に立つ場合、「V+得る」は「V+“得”+“来”」構造や「V+“得”+“了”」構造と対応するかどうかを翻訳可能かどうかという基準をもって考察していく。以下では、前置動詞が無意志動詞の「V+得る」の用例を挙げておく。

- (27)密閉・密集・密接を避け、手洗いを心がけていても感染してしまうことは起こり得る。(『朝日新聞デジタル』2020年4月19日)
- (28)ここからは、避難所での生活で起こり得る困難を考えます。(『朝日新聞デジタル』2016年4月26日)
- (29)予測しえない状況が起き得る。(『朝日新聞デジタル』2018年10月26日)
- (30)人材を引き抜かれるリスクがないのならば、厳しい上下関係も存在しうる。(『朝日新聞デジタル』2014年4月11日)

例(27)~(30)の「V+得る」の前置動詞に、「起こる」「起きる」「存在する」という無意志動詞が立っている。この場合、前置動詞が無意志動詞の「V+得る」構造を中国語の「V+“得”+“了”」構造や「V+“得”+“来”」構造に翻訳すると、次の例(27')~(30')のように不自然な表現になると思われる。

- (27')就算回避了“密闭・密集・密接”，坚持勤洗手，也(*发生得了/*发生得来)感染。
- (28')接下来要考虑的是，在避难所生活里(*发生得了/*发生得来)的困难。
- (29')(*出现得了/*出现得来)无法预测的情况。
- (30')如果没有人才被挖角的风险，就(*存在得了/*存在得来)严格的上下关系。

例(27')~(30')に示すように、例(27)~(30)の「起こり得る」「起き得る」「存在しうる」は、中国語の“发生得了”“出现得了”“存在得了”という「V+“得”+“了”」構造に翻訳することも、中国語の“发生得来”“出现得来”“存在得来”という「V+“的”+“来”」構造に翻訳することもできない。

というのは、“发生”“出现”“存在”のような無意志動詞は、「V+“得”+“不”+“了”」構造の前置動詞に立つことも、「V+“得”+“不”+“来”」構造の前置動詞に立つこともできないか

らである。そのため、前置動詞が無意志動詞の「V+得る」構造は「V+“得”+“了”」構造や「V+“得”+“来”」構造に翻訳することができないと考えられる。

この場合、前置動詞が無意志動詞の「V+得る」構造は中国語の「“可能”+V」構造に対応しているのではないかと思われる。下記の例(27”)～(30”)に示すように、この場合の「V+得る」構造は中国語の「“可能”+V」構造に対応していると思われる。

(27”)就算回避了“密闭・密集・密接”，坚持勤洗手，也可能发生感染。

(28”)接下来要考虑的是，在避难所生活里可能发生的困难。

(29”)可能出现无法预测的情况。

(30”)如果没有人才被挖角的风险，就可能存在严格的上下关系。

上記の例(27”)～(30”)のように、例(27)～(30)の「起こり得る」「起き得る」「存在しうる」は、中国語の“可能发生”“可能出现”“可能存在”という可能性を表す「“可能”+V」構造に翻訳することが可能である。

このことから、無意志動詞が「V+得る」構造の前置動詞に立つ場合、「V+得る」は、中国語の「V+“得”+“了”」構造と対応することも、「V+“得”+“来”」構造と対応することもできないといえる。

5.2 無意志動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合

この節では、無意志動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合、「V+得ない」構造は「V+“不”+“来”」構造や「V+“不”+“了”」構造は対応するかどうかについて、翻訳可能かどうかという基準をもって考察する。この場合においても、「V+得ない」構造は「V+“不”+“来”」構造や「V+“不”+“了”」構造に翻訳することができないと思われる。前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」の用例として、下記の例(31)～(33)が挙げられる。

(31)相次ぐ異常気象は、温暖化なしには起こりえない。(『朝日新聞デジタル』2019年9月15日)

(32)そんなことは起き得ない。(三橋貴明『日本大復活の真相』2013)

(33)自然界では決して起き得ない超低温だ。(『朝日新聞デジタル』2015年12月18日)

日)

(34)わずかでも価値判断を含む言葉は、その言葉の意味を引き受ける個人を離れては存在し得ない。(『朝日新聞デジタル』2018年2月15日)

例(31)～(34)の「V+得ない」の前置動詞に、「起こる」「起きる」「存在する」という無意志動詞が立っている。次の例(31')～(34')に示すように、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」構造は中国語の「V+“不”+“了”」構造に翻訳することも、「V+“不”+“来”」構造に翻訳することもできないと思われる。

(31')接连不断的异常天气，没有暖化现象，就(*发生不了/*发生不来)。

(32')那样的事情(*出现不了/*出现不来)。

(33')自然界里(*出现不了/*出现不来)的超低温。

(34')只要有一点含有价值判断的词语，离开了接受那些词语意义的个人，就(*存在不了/*存在不来)。

例(31')～(34')に示すように、例(31)～(34)の「起こりえない」「起き得ない」「存在し得ない」は、中国語の“发生不了”“出现不了”“存在不了”という「V+“得”+“了”」構造に翻訳することも、中国語の“发生不来”“出现不来”“存在不来”という「V+“得”+“来”」構造に翻訳することもできない。

それは、“发生”“出现”“存在”のような無意志動詞は、「V+“得”/“不”+“了”」構造や「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に立つことができないからと考えられる。そのため、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」構造は「V+“不”+“了”」構造や「V+“不”+“来”」構造に翻訳することができないのである。

この場合、前置動詞が無意志動詞の「V+得ない」構造は中国語の「“不可能”+V」構造に対応する。下記の例(31'')～(34'')に示すように、この場合の「V+得る」構造は中国語の「“不可能”+V」という構造に対応していると思われる。

(31'')接连不断的异常天气，没有暖化现象，就不可能发生。

(32'')那样的事情不可能出现。

(33'')自然界里不可能出现的超低温。

(34’)只要有一点含有价值判断的词语,离开了接受那些词语意义的个人,就不可能存在。

例(31’)～(34’)に示すように、例(31)～(34)の「起こりえない」「起き得ない」「存在し得ない」は、中国語の“不可能发生”“不可能出现”“不可能存在”という不可能の意味を表す「“不可能”+V」構造に翻訳することが可能である。

このことから、無意志動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合、「V+得ない」は、中国語の「V+“不”+“了”」構造とも、「V+“不”+“来”」構造とも対応することもできないといえる。

5節をまとめると、無意志動詞が「V+得る」構造の前置動詞に立つ場合と無意志動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合において、「V+得る」構造は、中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造とも「V+“得”/“不”+“来”」構造とも対応しない。

6 本章のまとめ

本章では、「V+得る」は、どんな場合に「V+“得”/“不”+“来”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応することができ、どんな場合に対応することができないのかという問題について考察してきた。分析の結果を改めてまとめると、次のようになる。

- ①「だけが」「のみが」で主語を示す文に使われる場合、仮説条件文に使われる場合、「かどうか」「か否か」と疑問節を構成する場合、Vが意志動詞の「V+得る」は、中国語の「V+“得”+“来”」構造と「V+“得”+“了”」構造と対応する。
- ②Vが意志動詞である場合の「V+得ない」は、中国語の「V+“不”+“来”」構造と「V+“不”+“了”」構造と対応する。
- ③Vが意志動詞の「V+得る」が疑問文に使われる場合、「行く」という動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合において、「V+得る」「V+得ない」は、中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応することができるのに対し、「V+“得”/“不”+“来”」構造と対応することができない。
- ④無意志動詞が「V+得る」構造の前置動詞に立つ場合と無意志動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合において、「V+得る」「V+得ない」は、中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造とも「V+“得”/“不”+“来”」構造とも対応しない。

以上が本章のまとめである。本章では、主に構文論の観点から、日本語の可能を表す複合動詞の「V+得る」と中国語の可能補語の「V+“得”/“不”+“了”」構造と、「V+“得”/“不”+“了”」構造との対応・非対応関係についても考察してきたが、まだ解決できていない問題も残されている。本章のまとめに挙げた対応しない場合の他にも、「V+“得”/“不”+“了”」構造や「V+“得”/“不”+“了”」構造の語彙的制限によって、「V+得る」と対応しない場合がある。それらの場合についても考察する必要がある、この問題についてはまた別の機会に述べることにする。

注

- 1) 管見の限り、「V+得る」には、「V+“得”/“不”+“了”」構造としか対応しない場合があるのに対し、「V+“得”/“不”+“来”」構造としか対応しない場合は見られない。
- 2) 本章でいう「V+得る」が「V+“得”/“不”+“了”」構造とも「V+“得”/“不”+“来”」構造とも対応する場合は、構文的特徴において対応するかどうかを中心にのべている。研究対象の語彙的制限によって対応しない場合を対象外とする。いわば、「V+得る」の前置動詞Vに対応する中国語が、「V+“得”/“不”+“了”」構造や「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞に立つことができない用例を対象外とする。
- 3) 「行く」という動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合以外にも、「V+“得”/“不”+“来”」構造のVの語彙的制限によって、日本語の「V+得る」構造に対応しないケースがある。これを解明するためには、さらに「V+“得”/“不”+“来”」構造のVの語彙的制限と日本語の「V+得る」構造の語彙的特徴の違いについて考察する必要があるため、今後の課題としたい。
- 4) この場合において、「V+得る」が「V+“得”/“不”+“来”」構造と対応しないのは、本章で提案した疑問文に関係している証拠として、この場合の“创造得来”“解释得来”“对抗得来”“坚持得来”という「V+“得”+“来”」構造は単独では自然な表現として成り立っている。いわば、“创造”“解释”“对抗”“坚持”は「V+“得”+“来”」構造のVに立つことが可能である。この場合において、“创造得来”“解释得来”“对抗得来”“坚持得来”が不自然な表現であるのは、「V+“得”+“来”」構造に使われている文環境に関係しているとしか考えられないのである。

終章 本論文の言語学的意義と言語教育学的意義

本論文では、第1章から第7章の議論で、中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞について、類義語研究の観点から両言語における統語論的特徴、意味論的特徴を記述し、その一端を明らかにした。第1章から第7章の議論の言語学意義は次のようにまとめられる。

- I. 「V+“得”/“不”+“来”」構造の前置動詞が意志動詞の場合、「ある動作が実現できるかどうか」という意味を表す。前置動詞が無意志動詞の場合、「ある現象が現れる可能性があるかどうか」という意味を表す。一方、前置動詞が意志動詞である場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vできるかどうか」という意味を表し、前置動詞が無意志動詞である場合、「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vが現れる可能性があるかどうか」という意味を表す。
- II. 主語が「だけが」「のみが」で示される単文、「なら」「てはじめて」「ば」などで条件を表す仮説条件文、助詞の「か」とともに構成した反語的な疑問文、連語の「だろうか」とともに構成した疑問文、「かどうか」「か否か」とともに疑問節を構成する場合において、Vが意志動詞の「V+得る」は終止形として機能することができ、「V+得る」は「あのもの(手段、人、物)ならVPできる可能性があるかどうか」という意味を表す。一方、前置動詞が無意志動詞の「V+得る」は、「ある状況では、VPが起こる可能性があるかどうか」という意味を表す。

以上が個別言語において、中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞の研究成果である。ことばの対照研究は、このような個別言語に関する研究成果の支えがないと成り立たないものである。本論文の第8章では、個別言語の成果に基づいて、対照研究の観点から中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞について照らし合わせた。

可能表現は日常生活においてよく使われているものである。その中の中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞も使用頻度の高い言葉として認められる。中国語母語話者がどのように中国語の可能補語を使っているかは、どのようにその意味を認識しているかということを反映している。これと同じように、日本語母語話者がどのように日本語の可能を表す複合動詞を使っているかは、どのようにその意味を認識しているかと

いうことを反映している。本論文の第8章において、統語論的側面、意味的側面を対照分析の対象とした。第8章の意義をまとめると次のようになる。

III.「だけが」「のみが」で主語を示す文に使われる場合、仮説条件文に使われる場合、「かどうか」「か否か」と疑問節を構成する場合、Vが意志動詞の「V+得る」は、中国語の「V+“得”+“来”」構造と「V+“得”+“了”」構造と対応する。また、Vが意志動詞である場合の「V+得ない」は、中国語の「V+“不”+“来”」構造とも「V+“不”+“了”」構造とも対応する。一方、Vが意志動詞の「V+得る」が疑問文に使われる場合、「行く」という動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合において、「V+得る」構造は、中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応することができるのに対し、「V+“得”/“不”+“来”」構造とは対応することができない。さらに、中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造と「V+“得”/“不”+“来”」構造は、無意志動詞の「V+得る」構造に対応することができない。

このような結論は、第二言語教育の現場において、どんな場合にどんなマーカ―が使え、どんなマーカ―が使えないかという誤用の問題をある程度解消する効果があるように思われる。そのため、このような研究は言語学的意義のみならず、言語教育学的意義もあるといえる。特に辞書や教科書の編纂に役立つと期待できる。

以上が本論文の考察の内容であるが、本論文が取り扱っているマーカ―以外の中国語の可能補語や日本語の可能を表す形式はどのような意味・用法を有しているか、なぜ可能の意味を表すことができるかなどの問題については、また別の機会で論じることにする。

主要参考文献

日本語文献

- 渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房.
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房.
- 森田良行(1977)『基礎日本語』角川書店.
- 金子尚一(1980)「可能表現の形式と意味(1)―“ちからの可能”と“認識可能”について―」
『国立女子短期大学(文科)紀要』23:62-76.
- 森田良行(1980)『基礎日本語』角川書店.
- 寺村秀夫(1982a)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
- 寺村秀夫(1982b)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 言語学研究会(編)(1986)『ことばの科学Ⅰ』むぎ書房.
- 渋谷勝己(1986)「可能表現の発展・素描」『大阪大学日本学報』5:101-137.
- 日本教育学会(1987)『日本語教育事典』大修館書店.
- 金田一春彦(編)(1988)『日本語百科大事典』大修館書店.
- 望月圭子(1990)「日・中両語の結果を表わす複合動詞」『東京外国語大学論集』40:13-27.
- 国立国語研究所(1991)『日本語教育指導参考書 副詞の意味と用法』大蔵省印刷局.
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法』くろしお出版.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房.
- 杉村博文(1994)『中国語文法教室』大修館書店.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト―現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.
- 渡辺実(1996)『日本語概説』岩波書店.
- 杉本和之(1997)「意志動詞と無意志動詞の研究―その2」『愛媛大学教育学部紀要 2 人文・社会科学』29-2、pp.33-47.
- 城田俊(1998)『日本語形態論』ひつじ書房.
- 張威(1998)『結果可能表現の研究―日本語・中国語対照研究の立場から―』くろしお出版.
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.

- 松田文子(2000)「複合動詞の意味理解方略の実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』
20:52-65.
- 庵ほか(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワ
ーク.
- 生越直樹(2002)『対照言語学』東京大学出版会.
- 渡辺実(2002)『国語意味論』塙書房.
- 戦慶勝(2003)『中国語の姿・日本語の姿』高城書房.
- 北京大学中国語文学系現代漢語教研室(2004)『現代中国語総説』三省堂.
- 安達太郎(2005)「疑問文における反語解釈をめぐる覚え書き」『京都橘女子大学研究紀
要』31:35-50.
- 石井正彦(2007)『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房.
- 杉村泰(2007)「コーパスを利用した複合動詞の類義分析—インターネット検索エンジンの
利用—」『言葉と文化』8:289-304.
- 荒川清秀(2008)「“～不了”は二つか」『日本語と中国語の可能表現』111-116
- 日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法6』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法2』くろしお出版.
- 前田直子(2009)『日本語の複文』くろしお出版.
- 安本真弓(2009)『現代中国語における可能表現の意味分析—可能補語を中心に—』白帝
社.
- 岸本秀樹編(2010)『ことばの対照』くろしお出版.
- 石村広(2011)『中国語結果構文の研究—動詞連続構造の観点から—』白帝社.
- 伊藤加奈子(2011)「可能表現の使用に関する日中比較」『可能表現の使用に関する日中比
較』45:19-33.
- 村田年(2013)「社会科学系書籍における複合動詞の使用傾向：後項動詞を指標として」『日
本語と日本語教育』41:67-95.
- 大江元貴(2014)「日本語における無情物・無意志の可能表現について」『文藝言語研究. 言
語篇』66:1-20.
- 影山太郎編(2014)『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』ひつじ書房.
- 工藤真由美(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ研究叢書.
- 丸尾誠(2014)『現代中国語方向補語の研究』白帝社.

- 荒川清秀(2015)『動詞を中心にした中国語文法論集』 白帝社.
- 金水敏(2015)「日本語の疑問文の歴史素描」『国語研プロジェクトレビュー』 5(3):108-121.
- 杉村泰(2016)「複合動詞の意味記述に関する一考察」『ことばの科学』 30:127-145.
- 戦慶勝(2016)『中国語と日本語における目的表現の対照研究』 白帝社.
- 陳奕廷(2017)「基底と精緻化から見た複合語の分類」『国立国語研究所論集』 13:25-50.
- 丁颯颯(2017)「中国語における「V+得"/"不"+来」の構文的特徴に関する考察」『鹿児島国際大学大学院学術論集』 9: 57-66.
- 山田昌史(2017)「複合動詞の普遍的・個別的基盤の一考察：日本語、韓国語、英語の対照言語研究」『常葉大学外国語学部紀要』 34:45-60.
- 姫野昌子(2018)『新版複合動詞の構造と意味用法』 研究社.
- 安本真弓(2019)「中国語可能表現のメカニズム—“能”と“会”構文を中心に—」『跡見学園女子大学文学部紀要』 54:95-109.
- 丁颯颯(2020)「複合動詞「V+得る」の構文的条件について—前項動詞が意志動詞の場合を中心に—」『日中言語対照研究論集』 22: 43-56.
- 丁颯颯(2020)「"V 得了"と"V 不了"の構文的分布について—疑問詞"谁"との関わりを中心に—」『九州中國學會報』 58: 55-46.

中国語文献

- 丁声树(1961)《现代汉语语法讲话》 商务印书馆.
- 赵元任(1964)《中国话的文法》 商务印书馆.
- 赵元任(1979)《汉语口语法》 商务印书馆.
- 郭志良(1980)“可能补语‘了’的使用范围”《语言教学与研究》， 1:22-29.
- 江天(1980)《现代汉语语法通释》 辽宁人民出版社.
- 刘月华(1980)“可能补语用法的研究”《现代汉语补语研究资料》， 313-342.
- 吕叔湘(1980)《现代汉语八百词》 商务印书馆.
- 朱德熙(1980)《现代汉语语法研究》 商务印书馆.
- 朱德熙(1982)《语法讲义》 商务印书馆.
- 王力(1985)《中国现代语法》 商务印书馆.
- 玉柱(1985)“‘V 得来’‘V 不来’”《汉语学习》， 6:14.
- 王砚农等编(1987)《汉语动词-结果补语搭配词典》 北京语言学院出版社.

- 马庆株(1988)“自主动词和非自主动词”《中国语言学报》，3:157-180.
- 缪锦安(1990)《汉语的语义结构和补语形式》上海外语教育出版社.
- 北京语言学院语言教学研究所编(1992)《现代汉语补语研究资料》北京语言学院出版社.
- 李宗江(1994)“‘V得(不得)’与‘V得了(不了)’”《中国语文》，5:375-381.
- 赵永新(1995)《语言对比研究与对外汉语教学》华语教学出版社.
- 胡明杨主编(1996)《词类问题考察》北京语言学院出版社.
- 梅笑寒(1996)“可能补语‘动’的语义分析”《汉语学习》，4:37-39.
- 杨述人(1996)“与汉语补语对应的日语句子成分”《现代外语》，1:51-56.
- 黄文龙(1998)“‘V不了’的否定焦点与语法意义浅析”《湘潭师范学院学报(社会科学版)》，5:85-86.
- 刘月华(1998)《趋向补语通释》北京语言大学出版社.
- 张旺熹(1999)《汉语特殊句法的语义研究》北京语言大学出版社.
- 侯精一等(2001)《中国语补语例解》商务印书馆.
- 刘月华等(2001)《实用现代汉语语法》商务印书馆.
- 石毓智(2001)《肯定与否定的对称与不对称》北京语言文化大学出版社.
- 许余龙(2002)《对比语言学》上海外语教育出版社.
- 季艳(2005)“‘V不下’与‘V不了’句法语义语用对比探析”《常熟理工学院学报》，3:70-73.
- 张庆翔·刘焱(2005)《现代汉语概论》上海大学出版社.
- 郝玲(2006)“再谈构成可能补语‘V得/不C’的条件”《语文学刊》，16:118-119.
- 史维国(2006)“说可能补语前不能加修饰语”《汉语学习》，2:76-80.
- 梁银峰(2007)《汉语趋向动词的语法化》学林出版社.
- 王文静(2009)“‘V得O’与‘VO不得’格式不对称原因探析”《语文学刊》，9:75-76.
- 安本真弓(2010)“可能性述补结构‘V(得/不)了’的语义分析”《东方语言学》，8:44-54.
- 陈信春(2010)《补语同相关成分的句法语义关系》河南大学出版社.
- 卢英顺(2010)“‘V不了(O)’结构的语法意义及相关问题”《汉语学习》，2:40-47.
- 杉村博文(2010)“可能补语的语义分析—从汉日语对比的角度—”《世界汉语教学(第24卷)》，2:183-191.
- 郑远远(2010)“浅议‘V不了’”《语文学刊》，5:86-87.
- 黄春玉(2011)《关于结果补语句的中日比较研究》上海译文出版社.
- 彭国珍(2011)《结果补语小句理论与现代汉语动结式相关问题研究》浙江大学出版社.

- 申莉(2011)“‘V 得/不了’与‘V 得/不着’的构式分析”《语言教学与研究》，2:23-28.
- 北京大学中文系现代汉语教研室编(2012)《现代汉语》商务印书馆.
- 蔡丽(2012)《程度范畴及其在补语系统中的句法实现》世界图书出版公司.
- 董淑慧(2012)《认知视野下的对外汉语语法教学——以“趋向动词语法化”为例——》南开大学出版社.
- 胡晓慧(2012)《汉语趋向动词语法化问题研究》广西师范大学出版社.
- 李燕(2012)《现代汉语趋向补语范畴研究》南开大学出版社.
- 吕佳(2013)《基于最简方案的汉语“得”字补语句研究》河北大学出版社.
- 吕俞辉(2013)“汉语可能补语的不对称现象”《外语学刊》，6:43-46.
- 陈晶晶(2015)“‘V 不 C’构式研究综述”《现代语文(语言研究版)》，4:27-30.
- 刘芳(2015)《趋向动词演变举要》西南交通大学出版社.
- 李贞亮(2016)“‘V 得 C’格式歧义条件研究”《文学教育(下)》，7:50-51.
- 齐春红(2016)《东南亚三国学生汉语趋向补语习得研究》中国社会科学出版社.
- 严宝刚(2017)“语法化与语法专题课——以‘了’为例——”《现代语文(语言研究版)》，7:48-54.
- 杨德峰(2017)《趋向补语的认知和习得研究》北京大学出版社.
- 李嘉(2018)“《忠义直言》中的‘V 得 X’结构”《现代语文》，1:97-101.
- 王明洲(2019)“认知视角下的‘V 不了’与‘V 不得’比较研究”《现代语文》，12:27-33.

初出一覧

本論文の各章の初出は下記の通りである。各章は以下に挙げる各稿をもとにして、加筆、修正したものである。

序章

書き下ろし

第1章 中国語における「V+“得”/“不”+“来”」の意味・機能について

丁飒飒(2017)「中国語における『V+“得”/“不”+“来”』の構文的特徴に関する考察」『鹿児島国際大学大学院学術論集』9: 57-66.※査読付き論文

第2章 前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“来”」の構文的条件について

書き下ろし

第3章 「V+“得”/“不”+“来”」構造と程度副詞との関わりについて

書き下ろし

第4章 「V+“得”/“不”+“了”」構造の意味・機能について

書き下ろし

第5章 「V+“得”/“不”+“了”」構造と疑問詞との関わりについて

丁飒飒(2020)「“V 得了”と“V 不了”の構文的分布について—疑問詞“谁”との関わりを中心に—」『九州中国學會報』58: 55-46.※査読付き研究ノート

第6章 「V+得る」構造の意味・機能について

2018年8月に行われた2018年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウムの口頭発表用に書き下ろしたものである。発表原題は、「『V+得る』の使用条件について」である。

第7章 前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」の構文的条件について

丁颯颯(2020)「複合動詞『V+得る』の構文的条件について—前項動詞が意志動詞の場合を中心に—」『日中言語対照研究論集』22: 43-56.※査読付き論文

第8章 「V+得る」と「V+“得”/“不”+“来”」「V+“得”/“不”+“了”」との対応・非対応関係について

書き下ろし

終章 本論文の言語学的意義と言語教育学的意義

書き下ろし